

千歳市

オサツトー1遺跡
キウス7遺跡

—北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

千歳市

オサツトー1遺跡
キウス7遺跡

—北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書—

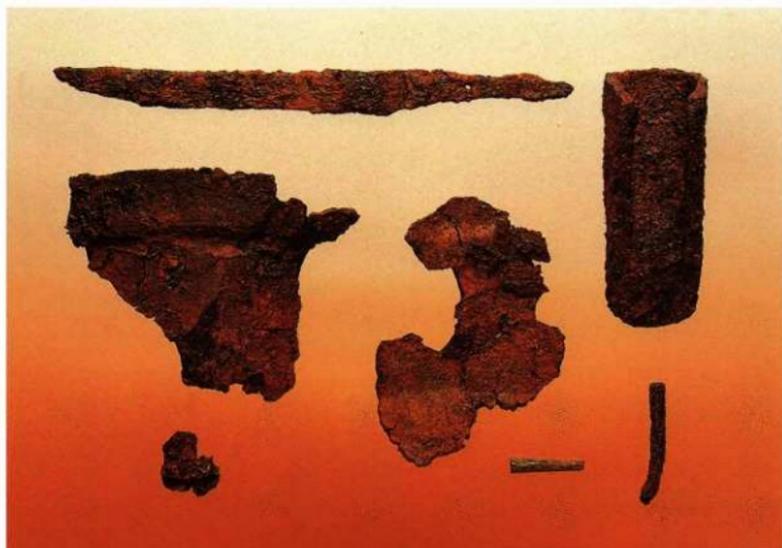
平成5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. オサツト-1 遺跡 アイヌ文化期土墳墓 (P-2)

NE→



2. オサツト-1 遺跡 P-1・2 出土の金属製品



1. キウス7遺跡 縄文時代後期土器囲い炉 (L F-15)

W→



2. キウス7遺跡 縄文時代後期下部単孔土器

例 言

1. 本書は平成5年度に当センターが実施した北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 本書の執筆・編集は千葉英一、皆川洋一、鎌田 望が行った。
3. 各種分析等は下記に依頼した。
脂防酸 株式会社ズコーシャ
金属製品 岩手県立博物館 赤沼 英男 氏
4. 整理報告終了後の出土遺物および記録類については千歳市教育委員会が保管する。
5. 調査・整理報告にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた。

(敬称略、順不同)

文化庁、北海道教育委員会、千歳市教育委員会、日本道路公団札幌建設局千歳工事事務所、
渡辺重建工業株式会社

北海道大学 吉崎昌一

北海道開拓記念館 野村 崇、平川善祥、山田悟郎、右代啓視、小林幸雄、手塚 薫

千歳市教育委員会 田村俊之、松田淳子、高橋 理、遠藤昭浩、豊田宏良

千歳市役所 大谷敏三

恵庭市郷土資料館 松谷純一、上屋真一

苫小牧市埋蔵文化財調査センター 佐藤一夫、工藤 肇、宮夫靖夫、渡辺俊一、二階堂啓也、
大泉博嗣、鈴木耕栄、赤石慎三、兵藤千秋

札幌市埋蔵文化財センター 加藤邦雄、羽賀憲二、上野秀一、仙庭伸久

江別市郷土資料館 高橋正勝、直井孝一、野中一宏、稲垣和幸

江別市役所 團部真幸

石狩町教育委員会 石橋孝夫、工藤義衛

前土地所有者 村本重雄、松浦 武、坪井義幸、佐藤松次郎

記号等の説明

1. 遺構の表記には以下に示す記号を用いた。

H：住居跡 HP：住居跡に伴うピット HF：住居跡に伴う焼土もしくは炉

P：土 壤 SP：小ピット TP：Tピット F：焼 土 C：炭化物集中

FC：フレイク・チップ集中

キウス7遺跡の土壌および焼土の遺構記号の頭には樽前c降下軽石（Ta-c）層より上位のものにUを、下位のものにはLを付した。

2. 遺構図の数値は標高（単位m）である。
3. 図の方位は真北を示し、磁針方位は西偏約8°30'である。
4. 遺構平面図の発掘区標示のうち、例えばM-100E3S2mとあるのはM-100グリッドの標示杭から東へ3m、南へ2mの位置を示す。
5. 遺構の規模は「確認面での長軸長×短軸長/床（底）面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深」の順で記した。一部壊されているものは現存長を（ ）で示し、不明のものは-で示した。
6. 土層名は下記の略号、略称を用いた場合がある。

樽前a降下軽石層：Ta-a層

第Ⅰ黒色土層：Ⅰ黒層

樽前c降下軽石層：Ta-c層

第Ⅱ黒色土層：Ⅱ黒層

恵庭aローム層：En-aローム層（En-L）

恵庭a降下軽石層：En-a層（En-P）

※火山灰の層名・略号は下記による。（ ）内はそれをさらに簡略化したものである。

曾屋龍典・佐藤博之（1980）『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会（1982）『北海道の火山灰』

7. 土層の混在状態は上記の略号などを用いて下記のように表してある。

A+B：AとBがほぼ同量に混じる。

A>B：AにBが少量混じる。

A>>B：AにBが微量混じる。

8. 土層の色調説明には『新版標準土色帖1988年版』を用いたところもある。

9. 石器・石製品等の大きさは最大長、最大幅、最大厚の順で記し、破損しているものについてはその数値を（ ）で括弧してある。

目 次

口絵 (カラー写真)

例言

記号等の説明

I	調査の概要	1
1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	調査にいたる経緯	1
4	調査結果の概要	1
	(1) オサットー1遺跡	1
	(2) キウス7遺跡	4
5	遺物の分類	4
	(1) 土器	4
	(2) 石器・石製品	5
	(3) 土製品	5
	(4) 金属器・金属製品	5
	(5) 自然遺物	5
II	オサットー1遺跡	7
1	立地と環境	7
2	発掘区の設定	8
3	土層	8
4	遺構	11
	(1) 土墳墓	11
	(2) 焼土	11
	(3) フレイク・チップ集中	16
5	遺物	16
	(1) 土器	16
	(2) 石器	16
III	キウス7遺跡	21
1	立地と環境	21
2	発掘区の設定	23
3	土層	23
4	Ta-c層上位の遺構	24
	(1) 杭跡	24

(2) 土壌	25
(3) 焼土	25
(4) 炭化物集中	27
5 Ta-c層下位の遺構	27
(1) 住居跡	27
(2) 土壌	31
(3) 小ピット	43
(4) Tピット	47
(5) 焼土	47
6 遺物	53
(1) 土器	53
(2) 石器	70
(3) 土製品・石製品	70

插图目次

図Ⅰ-1	遺跡の位置(1).....	2
図Ⅰ-2	遺跡の位置(2).....	3
図Ⅱ-1	遺跡周辺の地形.....	7
図Ⅱ-2	土層.....	8
図Ⅱ-3	遺構位置図.....	10
図Ⅱ-4	P-1.....	10
図Ⅱ-5	P-2、F-4.....	12
図Ⅱ-6	P-2およびその周辺出土の遺物.....	13
図Ⅱ-7	Ⅲ層の焼土.....	14
図Ⅱ-8	V層の焼土.....	15
図Ⅱ-9	包含層出土の遺物(1).....	17
図Ⅱ-10	包含層出土の遺物(2).....	18
図Ⅲ-1	遺跡周辺の地形.....	21
図Ⅲ-2	遺構位置図.....	22
図Ⅲ-3	土層.....	23
図Ⅲ-4	杭跡.....	24
図Ⅲ-5	UP-1・2、UF-1~3、UC-1.....	26
図Ⅲ-6	H-1.....	27
図Ⅲ-7	H-2.....	28
図Ⅲ-8	H-3.....	30
図Ⅲ-9	縄文時代晩期の土壌群.....	31
図Ⅲ-10	LP-1・2.....	32
図Ⅲ-11	LP-3・4.....	34
図Ⅲ-12	LP-5・6・7.....	35
図Ⅲ-13	LP-8・9.....	36
図Ⅲ-14	LP-10.....	38
図Ⅲ-15	LP-11・12・13・14.....	40
図Ⅲ-16	LP-15・16・17、SP-4.....	42
図Ⅲ-17	SP-1~3・5~9、TP-1.....	44
図Ⅲ-18	LF-1・3.....	46
図Ⅲ-19	LF-2・4~13・16.....	48
図Ⅲ-20	LF-14・15.....	51
図Ⅲ-21	LF-17.....	52
図Ⅲ-22	I群・Ⅲ群土器.....	54
図Ⅲ-23	Ⅳ群a類土器.....	54
図Ⅲ-24	Ⅳ群b類土器(1).....	56

図Ⅲ-25	IV群 b 類土器(2).....	57
図Ⅲ-26	IV群 b 類土器(3).....	58
図Ⅲ-27	IV群 c 類土器.....	60
図Ⅲ-28	V群 c 類土器(1)Ⅲ・Ⅳ～Ⅴ層出土.....	61
図Ⅲ-29	V群 c 類土器(2)Ⅴ層出土.....	61
図Ⅲ-30	V群 c 類土器(3)Ⅴ層出土.....	62
図Ⅲ-31	V群 c 類土器(4)Ⅴ層出土.....	63
図Ⅲ-32	Ⅵ群土器.....	64
図Ⅲ-33	グリッド別土器出土点数(1).....	65
図Ⅲ-34	グリッド別土器出土点数(2).....	66
図Ⅲ-35	石器(1).....	67
図Ⅲ-36	石器(2).....	68
図Ⅲ-37	土製品・石製品.....	69

表 目 次

表 I - 1	遺構數一覽	6
表 I - 2	遺物數一覽	6
表 II - 1	層別遺構數	9
表 II - 2	遺構出土遺物數	9
表 II - 3	層別出土遺物數	9
表 II - 4	III層燒土一覽	14
表 II - 5	V層燒土一覽	15
表 II - 6	遺構出土遺物一覽	19
表 II - 7	遺構等出土掲載遺物一覽	19
表 II - 8	石器類器種別点数	19
表 II - 9	包含層出土自然遺物一覽	20
表 II - 10	包含層出土掲載土器一覽	20
表 II - 11	包含層出土掲載石器一覽	20
表 III - 1	層別遺構數	70
表 III - 2	遺構出土遺物數	70
表 III - 3	層別出土遺物數	70
表 III - 4	遺構出土遺物一覽	71
表 III - 5	分類別土器点数	72
表 III - 6	石器類器種別点数	72
表 III - 7	遺構出土掲載土器一覽	73
表 III - 8	遺構出土掲載石器一覽	73
表 III - 9	包含層出土掲載土器一覽(1)	74
表 III - 10	包含層出土掲載土器一覽(2)	75
表 III - 11	包含層出土掲載石器・土製品・石製品一覽	76

口絵目次

- 口絵 1-1 オサツト-1 遺跡 アイヌ文化期土墳墓 (P-2)
- 口絵 1-2 オサツト-1 遺跡 P-1・2 出土の金属製品
- 口絵 2-1 キウス7 遺跡 縄文時代後期土器囲い炉 (LF-15)
- 口絵 2-2 キウス7 遺跡 縄文時代後期下部単孔土器

図版目次

Ⅱ オサツトー1遺跡

図版Ⅱ-1	1	Ⅲ層上面調査状況	81
	2	土層断面	81
図版Ⅱ-2	1	P-1 検出状況	82
	2	P-1 キセル	82
	3	P-2 完掘	82
図版Ⅱ-3	1	P-2 完掘	83
	2	墳底刀子出土状況	83
	3	P-2 集石	83
	4	P-2 集石	83
	5	鉄斧出土状況	83
	6	P-2 調査状況	83
図版Ⅱ-4	1	F-4	84
	2	F-6・7	84
	3	V層遺物出土状況	84
	4	石斧出土状況	84
	5	貝皮出土状況	84
図版Ⅱ-5	1	Ⅲ層上面地割れ検出状況	85
	2	V層調査状況	85
図版Ⅱ-6	1	遺構出土の金属製品(1)	86
図版Ⅱ-7	1	遺構出土の金属製品(2)・石器	87
図版Ⅱ-8	1	土器・石器・自然遺物	88

Ⅲ キウス7遺跡

図版Ⅲ-1	1	調査前全景	89
	2	土層断面	89
	3	耕作土および盛土除去作業状況	89
図版Ⅲ-2	1	杭跡検出状況	90
	2	Ⅲ層調査状況	90
	3	UP-1 遺物出土状況	90
	4	UP-1 完掘	90
	5	UP-2 完掘	90
図版Ⅲ-3	1	H-1 完掘	91
	2	HP-3 セクション	91
	3	HP-3 完掘	91
図版Ⅲ-4	1	H-2 完掘	92
	2	HP-2 完掘	92

	3	HP-10セクション	92
	4	H-3完掘	92
	5	HP-1完掘	92
図版Ⅲ-5	1	縄文時代晩期遺構群確認状況	93
	2	縄文時代晩期遺構群完掘状況	93
	3	試掘で検出されたLP-9のセクション	93
	4	晩期遺構群調査状況	93
図版Ⅲ-6	1	LP-1～3完掘	94
	2	LP-1セクションと遺物出土状況	94
	3	LP-2セクション	94
	4	LP-1～3調査状況	94
	5	LP-5セクション	94
	6	LP-6完掘	94
	7	LP-6セクション	94
	8	LP-8遺物出土状況	94
図版Ⅲ-7	1	LP-10遺物出土状況	95
	2	LP-10完掘	95
	3	LP-11完掘	95
	4	LP-12完掘	95
	5	LP-17・SP-4完掘	95
	6	TP-1完掘	95
図版Ⅲ-8	1	LF-1	96
	2	LF-15	96
	3	LC-1	96
	4	IV群b類土器出土状況	96
	5	V群c類土器出土状況およびV層調査状況	96
図版Ⅲ-9	1	遺構の遺物(1)	97
図版Ⅲ-10	1	遺構の遺物(2)	98
図版Ⅲ-11	1	遺構の遺物(3)	99
図版Ⅲ-12	1	遺構の遺物(4)	100
図版Ⅲ-13	1	I群b-2類・Ⅲ群・Ⅳ群a類土器	101
図版Ⅲ-14	1	Ⅳ群b類土器(1)	102
図版Ⅲ-15	1	Ⅳ群b類土器(2)	103
図版Ⅲ-16	1	Ⅳ群b類土器(3)	104
図版Ⅲ-17	1	Ⅳ群c類・V群c類(Ⅲ・Ⅳ～Ⅴ出土)土器	105
図版Ⅲ-18	1	V群c類土器(1)	106
図版Ⅲ-19	1	V群c類土器(2)	107
図版Ⅲ-20	1	V群c類土器(3)・Ⅵ群土器	108
図版Ⅲ-21	1	石器(1)	109
図版Ⅲ-22	1	石器(2)・土製品・石製品・自然遺物	110

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名	北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査	
委託者	日本道路公団札幌建設局	
受託期間	平成5年4月1日～平成6年3月31日	
調査遺跡	オサットー1遺跡	キウス7遺跡
登載番号	A-03-269	A-03-265
所在地	千歳市中央730-15、2475-1	千歳市中央852-2・34・73・74・88・94～97
調査面積	1,700㎡	5,613㎡
発掘期間	7月29日～9月4日	5月6日～7月15日、9月6日～10月27日

2. 調査体制

調査部長	森田知忠
調査第3課長	千葉 英一（発掘担当者）
文化財保護主事	皆川 洋一（発掘担当者）
嘱託	鎌田 望
調査補助員	袖岡 淳子（8月2日から）

3. 調査にいたる経緯

昭和62年10月に日本道路公団札幌建設局（以下道路公団という）から北海道教育委員会（以下道教委という）に北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設について埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。これを受けた道教委は、昭和63年4～5月に千歳～夕張の全線を対象として所在確認調査を実施し、19箇所（埋蔵文化財包蔵地）について範囲確認調査が必要との回答が出された。

その後平成3年8月に道路公団が用地を決定したのに伴い、道教委は同年10月（第一次）および4年11月（第二次）にキウス7遺跡、4年5月にオサットー1遺跡の範囲確認調査を実施した。この結果を基に両者で取扱いについて協議したが、工事計画の変更が不可能であることから発掘調査が必要となり、当センターが実施することとなった。

なお、キウス7遺跡は仮称キウスPA（パークングエリア）部分にあたるため面積が広く、平成5年9～10月に実施された第三次範囲確認調査の結果を加えて、27,850㎡となっている。

4. 調査結果の概要

(1)オサットー1遺跡

遺構は土壌墓2基、焼土19箇所、フレイク・チップの集中1箇所が確認された。土壌墓は2基ともアイヌ文化期のもので、このうちP-2では墳底から刀子、周囲からは鉄鍋・鉄斧・火打石などが出土しており、土壌の形態や遺物の特徴からアイヌ文化期のなかでも古い段階のものと考えられる。焼土はその層準から縄文時代～アイヌ文化期のものである。フレイク・チップの集中は調査区北側の境界付近にあり、すべて黒曜石で453点を数える。

遺物は土器24点、石器類489点、礫・礫片196点、金属製品8点、自然遺物8点の計725点出土した。

I 調査の概要



図1-1 遺跡の位置(1) この地図は国土地理院発行2万5千分1地形図「長都」を使用したものである。



図1-2 遺跡の位置② この地図は国土地理院発行5万分1地形図「漁」(大正5年及6年測図)の
 印画を使用したものである。

1 調査の概要

土器はいずれも小破片で、その時期は縄文時代早期、中期～晩期である。石器は磨製石斧が19点、石鏃・ポイント・スクレイパー・たたき石・砥石・台石・火打石各1点のほか463点のフレイク・チップがある。金属製品には上記のものほかに棒状鉄製品・キセルの吸口が、自然遺物には獣骨片、貝皮、種子などがある。

なお、鍋・斧・刀子の鉄製品3点の分析結果については、次年度に報告する。

(2)キウス7遺跡

調査は用地買収および山林伐採の進行状況ならびに工事計画にあわせ二回に分けて行ない、一回目は畑地部分を、二回目は北側側道（工専用道路）の山林部分を調査した。

遺構は樽前c降下軽石（Ta-c）層を境にしてその上位から土壌38基、焼土42箇所、道跡？2条、炭化物集中1箇所が、下位からは住居跡3軒、土壌24基、小ピット9個、Tピット1基、焼土40箇所が確認された。これらのうち北側側道にあたる105ラインより西側（図Ⅲ-2、網かけ部分）で確認された土壌43（上層36、下層7）基、焼土62（上層39、下層23）箇所、道跡および出土した遺物については6年度以降に報告する。

住居跡はいずれも畑地造成の際に削平された部分のEn-aローム層で焼土（炉跡）と柱穴が検出されたものである。時期は縄文時代中期もしくは後期と推定される。土壌は縄文時代後・晩期、続縄文時代のものが多く、それらの一部は墓塚と考えられる。Tピットは1基のみであるが、これまでの例から見て次年度以降調査区に分布しているものと推測される。

なお、後・晩期の土壌（LP-1・11・12）に関する残存脂肪酸の分析結果については、後年次に他の土壌と併せて報告する予定である。

遺物は今年度報告対象地区では9,204点出土した。その内訳は土器5,903点、石器類1,531点、礫・礫片1,760点、土製品6点、石製品2点、自然遺物2点である。土器は縄文時代後期・晩期を主体とし、ほかに早期・中期、続縄文時代のものが出土している。石器については器種の欠落はほとんどないものの、数的にはポイント類やつまみ付きナイフが少ない。

5. 遺物の分類

(1)土器

北海道横断自動車道（千歳～夕張）の調査は平成5年が初年度であり、今後数年間の調査が予定されている。したがって、今年度は『美沢川流域の遺跡群』での分類基準を用いることとし、細部については今後の調査結果によって加除する予定である。

※は今年度出土しているもの

I群 縄文時代早期に属するもの。

a類 貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。

b類 縄文、燃糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群。

b-1類 東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの。

※b-2類 コックロ式に相当するもの。

b-3類 中茶路式に相当するもの。

※b-4類 東釧路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの。

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの。

a類 円筒土器上層式に相当するもの。

b類 a類以外のもの。

※b-1類 天神山式に相当するもの。

※b-2類 柏木川式に相当するもの。

b-3類 北筒式(トコロ6類)、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

IV群 縄文時代後期に属するもの。

※a類 余市式、入江式に相当するもの。

※b類 船泊上層式、手稲式、鯨瀬式、エリモB式に相当するもの。

※c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属するもの。

a類 大洞B式、上ノ国式に相当するもの。

b類 大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの。

※c類 大洞A式、大洞A'式、タンネトウL式に相当するもの。

※VI群 続縄文時代に属するもの。

VII群 擦文時代に属するもの。

(2)石器・石製品

器種別の大分類にとどめ、記号による細分は行っていない。剥片石器には石鏃、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー類、楔形石器などが、礫石器には磨製石斧、たたき石、すり石、砥石、石皿・台石、火打石?などがある。ほかに石核、剥片・石屑、加工痕ある剥片(Rフレイク)、刃こぼれ状の使用痕ある剥片(Uフレイク)および焼礫、有意と考えられる礫、自然礫がある。石製品には橄欖岩製の管玉がある。

なお、表中の石材の略号は次の通りである。

And. (Andesite)	安山岩	Che. (Chert)	チャート
Gr-Mud. (Green-Mudstone)	緑色泥岩	Gr-Sa. (Green-Sand)	緑色砂岩
Mud. (Mudstone)	泥岩	Obs. (Obsidian)	黒曜石
Per. (Peridotite)	橄欖岩	Qua. (Quartzite)	珪岩
Sa. (Sand)	砂岩	Sch. (Schist)	片岩
Ser. (Serpentinite)	蛇紋岩	Sh. (Shale)	頁岩

(3)土製品

有孔円盤状、オロシガネ状、スタンプ状土製品の破片のほか焼成粘土塊がある。

(4)金属器・金属製品

鉄錐、鉄斧、刀子、キセルの吸口などがある。

(5)自然遺物

獣骨片・カワシンジュガイの皮などの動物遺存体、ニシキギ科・モクレン科・ユリ科の種子などの植物遺存体がある。

I 調査の概要

表 I-1 遺構数一覧

	オサフト-1遺跡	キウス7遺跡		
住居跡 (H)	0	3	3	0
土壌 (P)	2	62	19	43
小ピット (SP)	0	9	9	0
Tピット (TP)	0	1	1	0
焼土 (F)	19	82	20	62
炭化物集中 (C)	0	1	1	0
フレイク・チップ集中 (FC)	1	0	0	0
道跡 ?	0	2	0	2
杭跡	0	2	2	0
計	22	162	55	107

キウス7遺跡の左欄：5年度調査数

中欄：本書報告数

右欄：次年度以降報告数

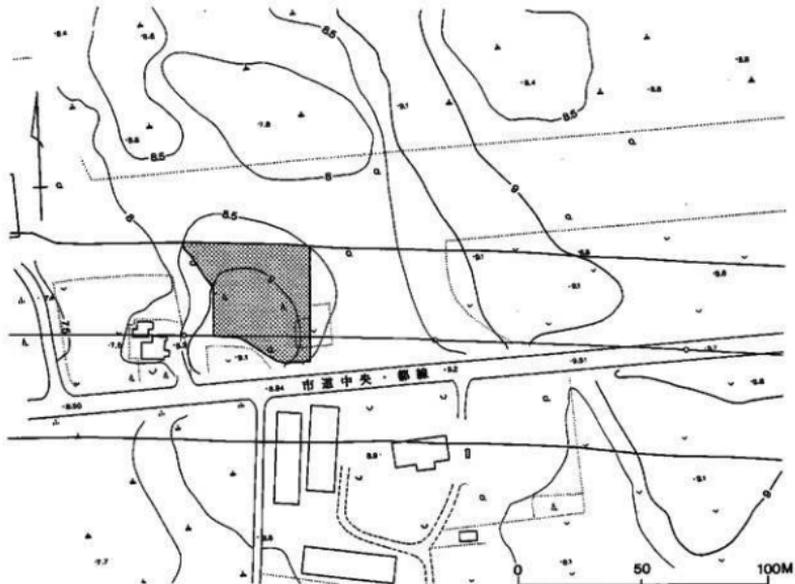
表 I-2 遺物数一覧

	オサフト-1遺跡	キウス7遺跡	計
土器	24	5,903	5,927
石器	489	1,531	2,020
礫・礫片	196	1,760	1,956
土製品	0	6	6
石製品	0	2	2
金属製品	8	0	8
自然遺物	8	2	10
計	725	9,204	9,929

II オサットー1遺跡

1. 立地と環境

千歳市と長沼町の境界付近は石狩勇払低地帯の沖積低地である。かつては長都沼^{ナガツ}をはじめとする沼と、それを取り巻く湿地が広がっていた(図I-2)。長都沼(オサットー)の北東には馬追沼(マオイト)があった。馬追沼には北から馬追川、東から剣漣川が流入していた。馬追沼から流出した水はイカベツ川となり、オルイカ川と合流して長都沼に流入していた。増水時には、イカベツ川は姿を消し、付近は沼と化したという。また、長都沼には、南から千歳川・長都川・祝梅川^{イシメグサ}が流入していた。安政4年に長都沼を北から南へ舟行した松浦武四郎は、次のように記録している。「…ヲサツトウえ出けり。然る処周囲は凡三里計、あさくして周りは蘆荻のみ生えたり。此処より南の方に行て千歳川すじえ入る也。右え入てヲサツの方え入るなり。また東の方え入ればシユクハイえ入るなり。北え入ればマライの方え入る也。依て此沼え落口四ツ、出口は一ツなり。…」長都沼へ流れ込んだ水は沼の西から流出し、北流する千歳川となって石狩川に注いでいた。古来より、この千歳川水系は、日本海側の石狩と太平洋側の勇払を結ぶ交通路として、重要な役割を果たしていた。江戸時代元禄期の松前藩領の頃には長都川流域に、シコツ十六場所の一つとしてヲサツ場所が設けられていた。しかし、明治時代以降開拓が進展してくると、この一帯は長都原野と呼ばれる洪水常襲地帯とみなされるようになった。昭和26年から昭和44年にかけて国営灌漑排水事業他造成事業により耕地が造成され、これらの沼や湿地は姿を消していった。本遺跡はその長都沼の東側の微高地(標高7~9m)に立地しており、遺跡の名称はこれによる。



図II-1 遺跡周辺の地形

II オサットー1遺跡

なお、オサットーとはアイヌ語の \hat{O} -sat-to「川尻の・乾いた・沼」で、沼に注ぐ長都川(\hat{O} -sat-nay「川尻の・乾いた・川」)の川口が砂で埋まったことにちなむ。

調査前の遺跡の現況は、大部分が林地で一部は畑地であった。標高の低い部分には水成の灰白色粘土層が認められ、遺跡形成期にも周囲は沼・湿地であったことがうかがえる。その粘土層直下には、おおむね8.0mと8.5mのコンターを中心に2列の帯状に炭化材・炭化物が残っており、汀線の推移を物語っている。

2. 発掘区の設定

本線のセンター杭S.T.A.115+20とS.T.A.115+60を見通す線をMラインとし、北側4mをLライン、南側4mをNラインとして順次4mごとのラインを設定した。次に、これらのラインに直交するラインを4mごとに設定した。このラインはS.T.A.115+00を25とし、東へ向かって26, 27, 28と数字で示した。このようにして区画された4m四方の区画については、周囲の4点のうちもっとも若い順位の記号を区画の記号としている。たとえば、M-30, M-31, N-30, N-31の4点で囲まれた区画はM-30となる。また、さらにこの区画を4分割した2m四方の区画を、北西から反時計回りにa, b, c, dと細分した。

3. 土層

表土層から明黄褐色軽石層(恵庭a降下軽石層)まで、次のI~VIII層に大別した。また、II層はII aとII bに細分した。

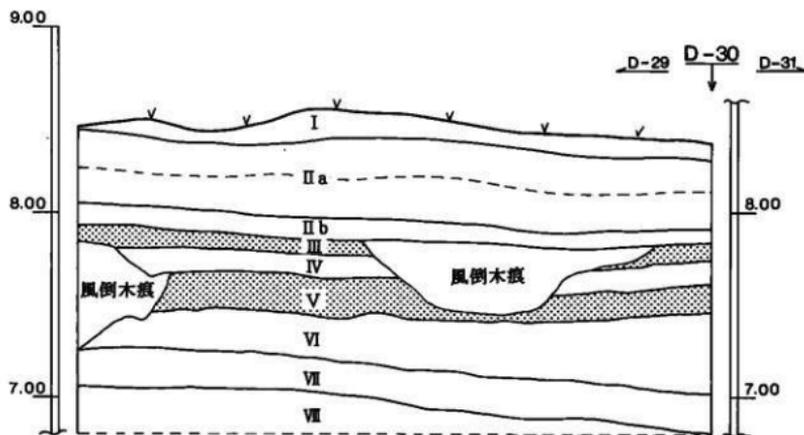
I 表土層(褐灰: Hue10YR4/1)

IIa 灰白色軽石層(灰白: Hue10YR8/1)

層厚約40cmの樽前a降下軽石(Ta-a)層。上位は粒径0.5~2.0cmで、層厚は約15cmである。下位は粒径0.5cm以下の火山灰と、褐色で砂質の薄い火山灰層とが互層をなしており、層厚は約25cmである。

IIb 灰白色粘土層(灰白: Hue10YR7/1)

層厚約20cmの水成堆積の粘土層。標高の高い所には見られず、低くなるにつれて層厚が厚くなる。



図II-2 土層

層中には炭化塊や炭化物、酸化鉄を含む。

Ⅲ 黒色土層（黒：Hue7.5YR2/1）

層厚約10cmの腐植土層。粘性に乏しく締まりがない。乾燥すると微細なクラックが生じる。縄文時代晩期とアイヌ文化期の遺物が出土する。美沢川流域の「第Ⅰ黒色土層」に相当する。

Ⅳ 褐色軽石層（にぶい黄褐：Hue10YR4/3）

樽前c降下軽石（Ta-c）を主体にⅤ層混在する層。安定した層厚は見られず、Ⅴ層との境界は不明瞭である。場所によっては全く見られないところもある。縄文時代晩期の遺物が出土する。

Ⅴ 暗褐色土層（褐：Hue10YR4/4）

層厚20cm程の腐植土を含む粒子の粗い土の層。堅く締まり粘性に乏しい。層中には酸化鉄を含む。縄文時代早期～晩期の遺物が出土する。美沢川流域の「第Ⅱ黒色土層」に相当する。

Ⅵ 褐色土層（褐：Hue10YR4/6）

わずかに腐植土を含む細砂層。層厚は約40cmで、層中には酸化鉄を含む。Ⅴ層との境界は不明瞭である。

Ⅶ 明黄褐色ローム層（にぶい黄褐：Hue10YR4/3）

風化作用によってローム化した恵庭a降下軽石（En-a）層。

Ⅷ 明黄褐色軽石層（黄褐：Hue10YR5/8）

恵庭a降下軽石（En-a）層。

表Ⅱ-1 層別遺構数

	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ～Ⅴ層	Ⅴ層	計
土墳墓	1	1			2
焼土		12		7	19
フレイク・チップ集中			1		1
計	1	13	1	7	22

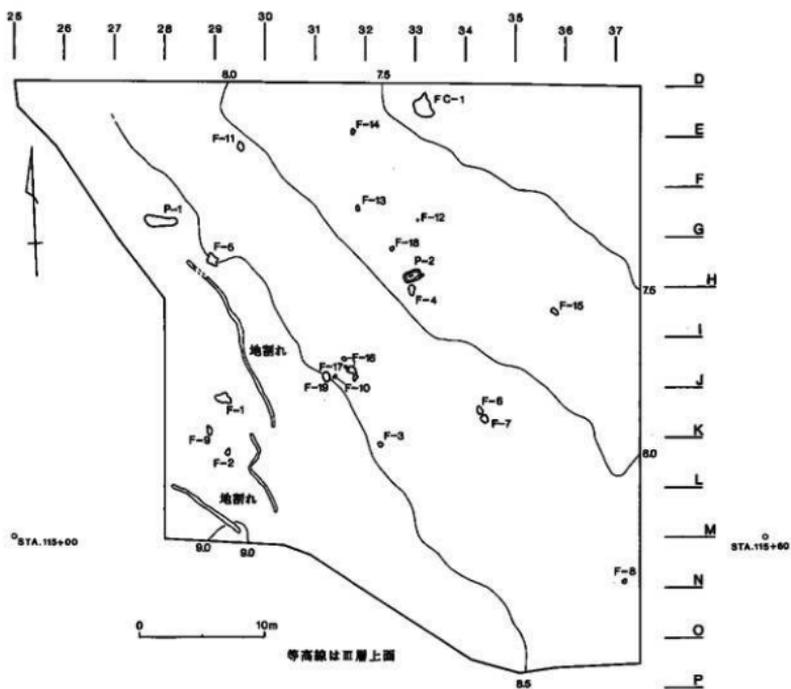
表Ⅱ-2 遺構出土遺物数

	土器	石器類	金属製品	自然遺物	計
土墳墓	0	84	4	0	88
焼土	0	3	0	4	7
フレイク・チップ集中	0	457	0	0	457
計	0	544	4	4	552

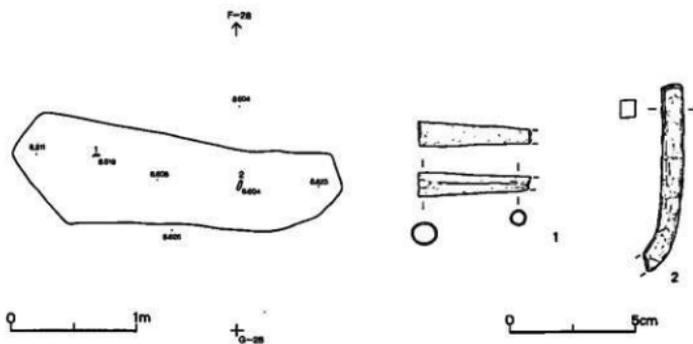
表Ⅱ-3 層別出土遺物数

	土器	石器類	金属製品	自然遺物	計
Ⅰ層	0	5	0	0	5
Ⅲ層	3	99	4	4	110
Ⅲ～Ⅴ層	14	2	0	0	16
Ⅴ層	6	28	0	0	34
Ⅵ層	1	0	0	0	1
攪乱等	0	7	0	0	7
計	24	141	4	4	173

II オサツトー1遺跡



図II-3 遺構位置図



図II-4 P-1

4. 遺構

(1)土墳墓

形態の異なるアイヌ文化期の土墳墓が2ヵ所検出された。P-1はⅡb層より上位の土層、P-2はⅢ層の上位から掘り込まれており、後者はより古い段階のものと考えられる。

P-1 (図Ⅱ-4、図版Ⅱ-2-1・2、Ⅱ-6)

位置 F-27-c、F-28-b

規模 $- \times - / 2.58 \times 0.84 / 0.01 \text{m}$ 長軸方向 N-84°-W

特徴 P-1は調査区西側で検出された土墳墓の墳底部分である。掘込みはⅡb層より上位の土層からなされている。Ⅲ層上面の調査中に白色粘土の入る輪郭と金属製品を認め遺構と判断した。平面は長軸方向が東西で西側の幅が広く東側でやや狭い不整形長方形である。頭位は西側と推定され、図示した位置から1と2の遺物が出土した。

遺物 1は銅製のキセル吸口部、2は断面が四角の棒状鉄製品である。

時期 アイヌ文化期

P-2 (図Ⅱ-5・6、図版Ⅱ-3、Ⅱ-3、Ⅱ4-1、Ⅱ-6、7)

位置 G-32-c、G-33-b

規模 $1.30 \times 0.71 / 1.16 \times 0.60 / 0.40 \text{m}$ 長軸方向 N-75°-E

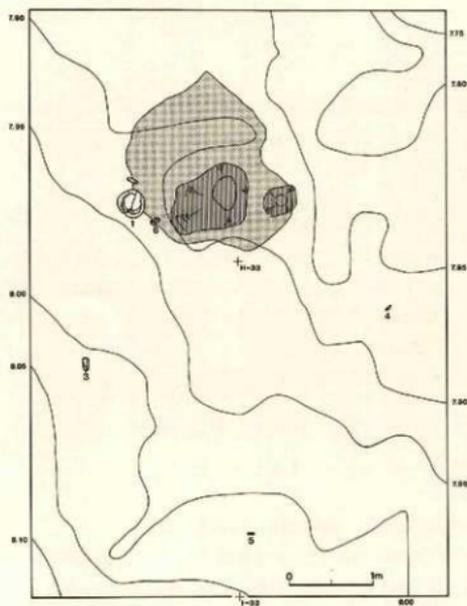
特徴 調査区中央やや東よりの平坦部で検出された土墳墓である。Ta-a除去作業中に伏せた鉄鍋底部を認め、Ⅲ層上面で掘上げ土の広がりや窪みを確認した。掘込み面はⅢ層上面より約1cm下である。平面形は隅丸の長方形で墳底は西側が深く傾斜している。周囲には南〜南東側に焼土(F-4a)、南東側に小ピットと焼土(F-4b)、集石が位置しており、掘り上げ土は北側に向かって広がる。周囲の焼土・集石は鉄鍋と共に意図的に配置されたと考えられる。長径から被葬者が成人の場合、「屈葬」の埋葬形態が取られた可能性がある。

遺物は墳底、掘込みの付近、周辺で出土している。墳底からは切っ先を東に向けた刀子(2)が出土した。また、破線で示した場所に木製品等の有機質の遺物と思われる痕跡が認められた。土壌の付近からは、西側に伏せて置かれた鉄鍋(1)と割れた火打石(6)等が出土した。また少し離れた位置で出土した金属製品(3~5)は、土墳墓に関連すると考えられここに含めた。

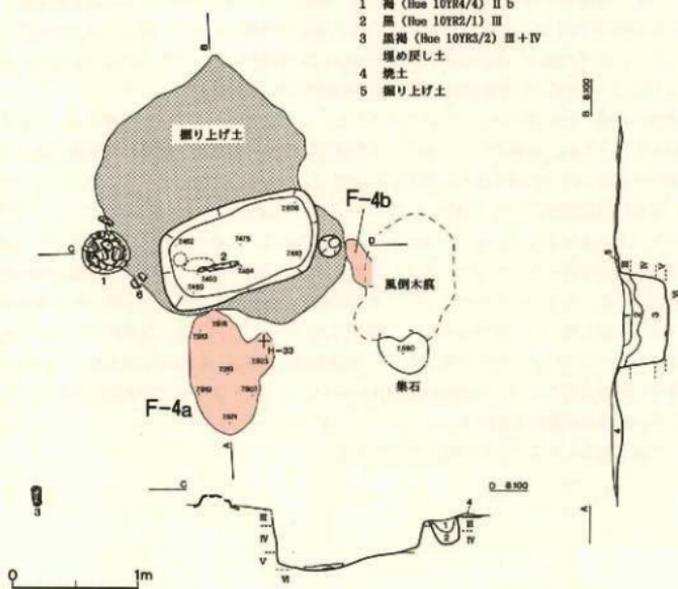
遺物 1は内耳と底部中央に一字の湯口を持つ鉄鍋である。腐植による細片化が著しく、図は出土状況を元に推定復元したもので、内耳の片側と湯口の一部が欠落している。復元された内耳は、鉄鍋の口唇よりも下がって付いている。2は比較的大振りの刀子である。鞘や柄の木質部が全体に付着、残存している。刃から中茎への変換部はなだらかで、中茎には目釘の穴が一つある。3は開いた部分を持つ袋状様の鉄斧である。刃部は丸味を帯び、表裏面に袋部から刃部に向けてが直線的で段差を持たない。袋部分は全体に厚みを持つ。4・5は棒状の鉄製品である。6は火打石と思われる珪岩製の石器である。

時期 アイヌ文化期でもより古い段階と考えられる。

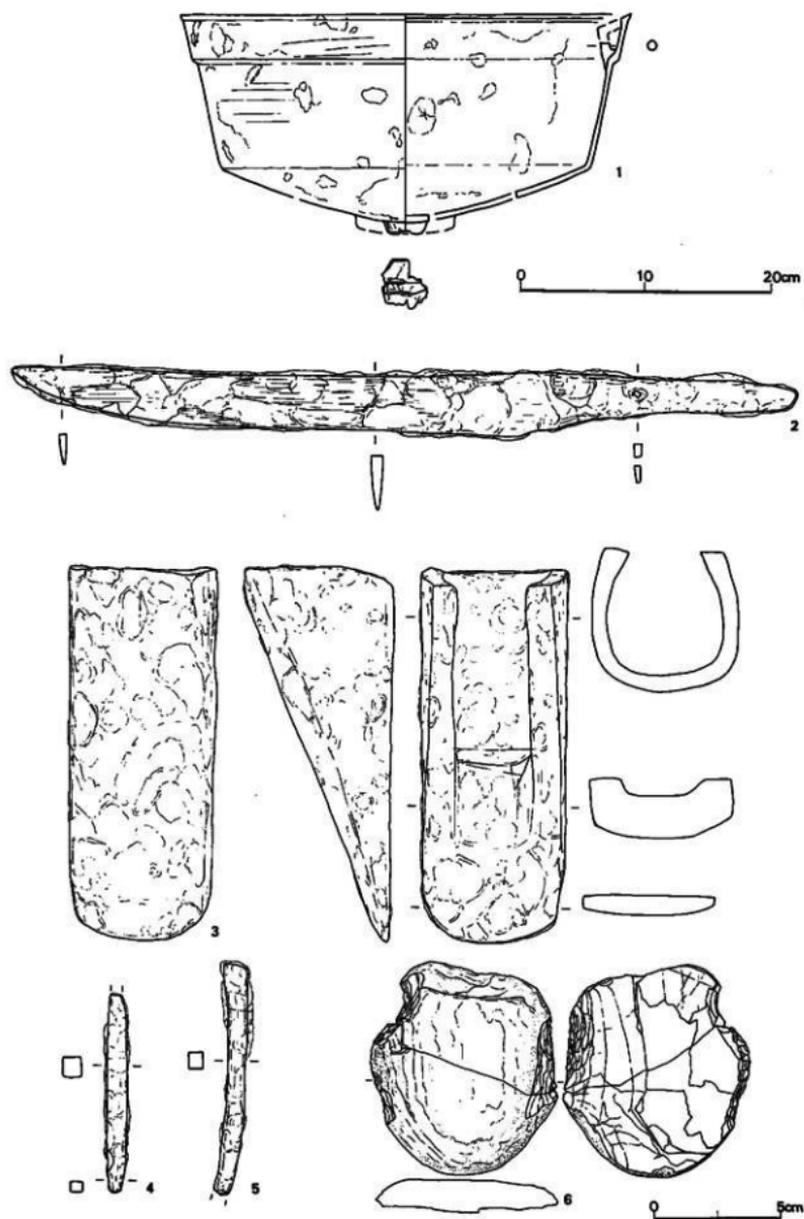
II オサツトー1遺跡



- 1 海 (Hoe 10YR4/4) II b
- 2 黒 (Hoe 10YR2/1) III
- 3 黒褐 (Hoe 10YR3/2) III + IV
- 埋め戻し土
- 4 焼土
- 5 盛り上げ土



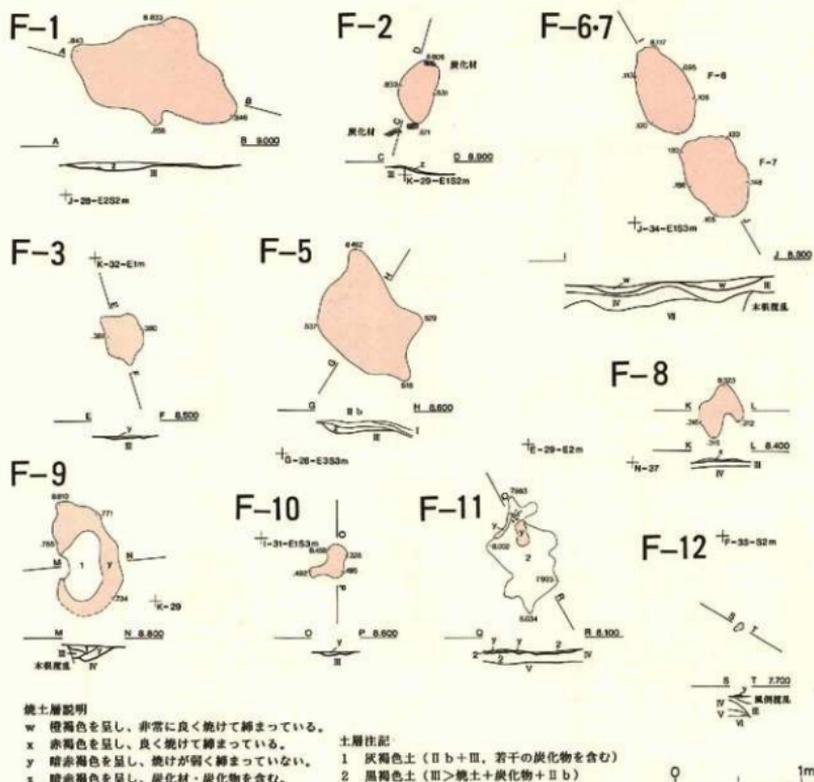
図II-5 P-2、F-4



図Ⅱ-6 P-2およびその周辺出土の遺物

表II-4 III層焼土一覽

遺構名	位 置	層位	長軸長×短軸長/最大厚(m)	備 考
F-1	J-28-d	上面	1.38×0.85/0.07	表面に灰・フレイク・チップ、獣骨片、炭化物
F-2	K-29-a	上面	0.50×0.28/0.02	焼土上に炭化材あり。炭化物。
F-3	K-32-a	上面	0.41×0.31/0.02	表面に灰。炭化物。
F-4	G-32-cほか	上面	1.01×0.69/0.09	P-2に伴う。炭化物、種子。
F-5	G-28-c・dほか	上面	1.13×0.72/0.04	古い風倒の凹みを利用。炭化物。
F-6	J-34-a・b	上面	0.73×0.42/0.05	表面粘土化。フレイク・チップ、炭化物。
F-7	J-34-b	上面	0.60×0.45/0.07	表面粘土化。獣骨片。
F-8	M-37-b	上面	0.44×0.36/0.02	
F-9	J-28-c	上面	(0.93) × 0.42/0.12	炭化物。
F-10	I-31-b	下位	0.35×0.18/0.03	炭化物。
F-11	E-29-a・d	下位	(0.95×0.41) / 0.02	
F-12	F-33-b	下位	0.08×0.04/0.01	風倒の上。III層の面に相当。



II オサツトー1遺跡

V層の焼土は、以下のE～Gに分けられる。GはE・Fより古い時期のものである。

E：上面で確認した標高8.0～8.2mに位置するもの（F-16・17・19）

F：上面で確認した標高7.4～7.6mに位置するもの（F-13～15）

G：下位で確認したもの（F-18）

II b層除去後のIII層上面には標高8.2m付近と8.4～8.6mの等高線に沿うように、炭化材・炭化物が分布していた。これらは、かつての汀線の推移を示している。汀線の推移からA～Cのあいだには時期差が考えられる。また、V層においても土が水に漬かっていた形跡が確認されている。ここでも汀線の移動が繰り返されていたと仮定すれば、EとFのあいだにも時期差があると考えられる。

③フレイク・チップ集中

調査区北側境界近く、D-32・33でIII層からV層にかけて、東西1.5m南北2mの範囲にわたって発見された。土壌水洗によって得られたものを含めてフレイク・チップ453点、礫片4点が出土した。フレイク・チップはすべて黒曜石で、そのなかには両面加工石器製作の際に生じる調整フレイクが含まれている。

5. 遺物

(1)土器（図Ⅱ-9、図版Ⅱ-8）

Ⅲ～Ⅵ層からごく少量の縄文土器が出土している。1は磨耗した器面に燃糸文風の羽状縄文が施されるもので東釧路Ⅳ式土器である。2は貼付帯のある口縁部で、地文には多条の原体による斜行縄文、貼付帯上には縄線文が2～3本施されている。3・4は斜行縄文の施された胴部片で胎土には微量の繊維を含む。5・6は小型の注口もしくは壺形土器で同一個体である。口唇の断面は角形で器壁は薄く、刻みの入った小山形突起を持つ口縁部から頸部には斜行縄文を施した後に細い沈線で区画する文様帯を持つ。器面には刻みの入る粘土が貼り付けられている。7～8は鉢形土器と思われるもので、剥落していない器面には条の乱れた斜行縄文が認められる。

(2)石器（図Ⅱ-9・10、図版Ⅱ-8）

1は無茎凹基の石鏃。2は太い茎を有するポイントもしくは両面加工のナイフ。3はスクレイパーで、横長剥片の下端に細かい剥離によってやや外彎する刃部が作られている。1～3は黒曜石製。

4～15は磨製石斧。刃先や体部の薄片を含め19点出土しているが、すべて破損品である。接合例や石質の相違から個体数は17点で、ほかに範囲確認調査の際に出土した1点（12）がある。刃部の形状は15の片刃状のもの以外はすべて両刃一曲刃である。

16はたたき石で焼けている。17は砥石片。18は浅いくぼみ状の潰打痕のある台石片。

参考文献

『角川日本地名大辞典』編纂委員会 1987 『角川日本地名大辞典 1 北海道 上巻』（角川書店）

千歳市史編さん委員会 1983 『増補 千歳市史』（千歳市）

知里真志保 1956 『地名アイヌ語小辞典』（検査房）

※1973『知里真志保著作集 第3巻』（平凡社）所収

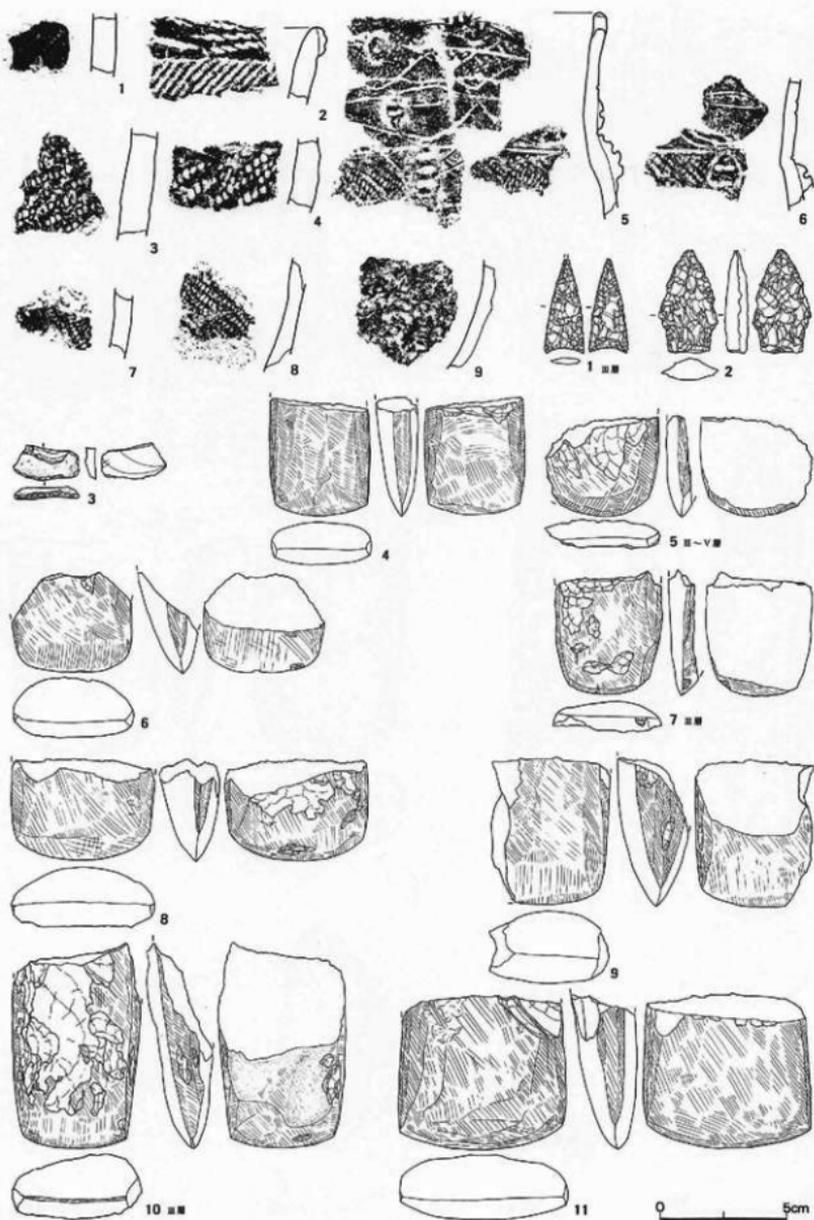
永田方正 1891 『北海道蝦夷語地名解』（北海道庁）

※1984『初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版』（草風館）所収

松浦武四郎 1855 『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌二十四巻』

※秋葉実解説 1982 『丁巳第十五巻 由宇発利日誌 巻の一』『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌下』

（北海道出版企画センター）所収



図Ⅱ-9 包含層出土の遺物(1)

II オサツトー1遺跡

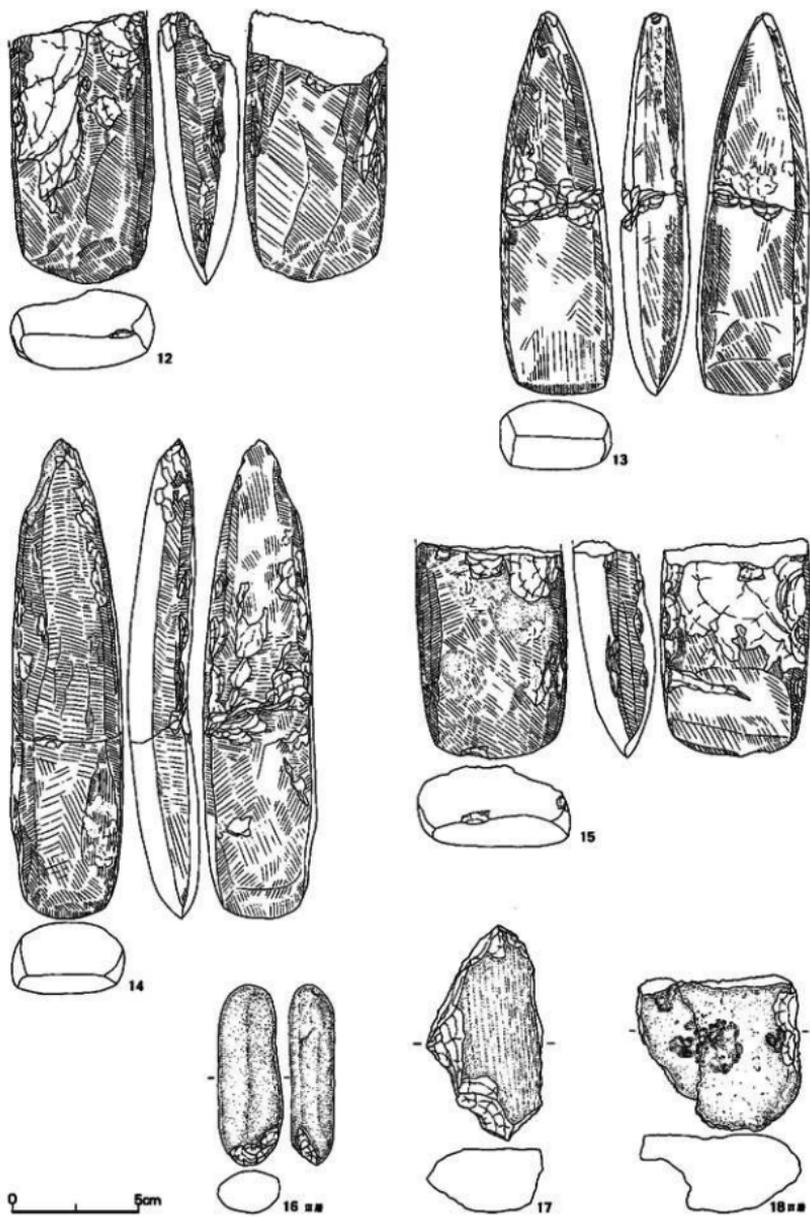


圖 II-10 包含層出土の遺物(2)

表Ⅱ-6 遺構出土遺物一覧

遺構名	層位	種別	点数	備考	遺構名	層位	種別	点数	備考
P-1	覆土	キセル	1		F-3	--	炭化物	+	0.308g
		棒状鉄製品	1		F-4	--	炭化物	+	0.514g
		礫	2				種子	1	0.010g, ユリ科orユキザサ
		合計	4						
P-2	覆土	鉄鍋	1	内耳、一字溝口	F-5	---	炭化物	+	0.550g
		刀子	1		F-6	---	チップ	1	
		火打石	1	接合	F-7	---	獣骨片	(1)	0.020g
		礫・礫片	81		F-9	--	炭化物	+	0.144g
		合計	84		F-10	--	炭化物	+	0.122g
F-1	--	チップ	1		F-13	--	炭化物	+	0.599g
		炭化物	+	17.794g	F-15	--	焼成礫	1	
		獣骨片	(2)	2.099g	F-16b	--	炭化物	+	49.434g
		合計	3		F-18	--	炭化物	+	15.998g
F-2		炭化物	+						

表Ⅱ-7 遺構等出土掲載遺物一覧

図	番	出土遺構等	名称	位置・層	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
Ⅱ-4	1	P-1	キセル	墳底	(4.5) 径0.6-1.0	2.6	銅
	2	＃	棒状鉄製品	＃	(7.5) × 0.7 × 0.7	21.9	鉄
Ⅱ-5	1	P-2	内耳鉄鍋	墳脇Ⅲ層	径36.0深さ17.4	-	鉄
	2	＃	刀子	墳底	31.4 × 2.8 × 0.5	75.8	＃
	3	H-2-d	鉄斧	墳周辺Ⅲ層	14.9 × 6.0 × 6.0	560	＃
	4	H-2-a	棒状鉄製品	＃	(8.0) × 0.8 × 0.8	15.3	＃
	5	H-2-b	棒状鉄製品	＃	(9.4) × 0.6 × 0.7	10.5	＃
	6	P-2	火打石?	墳脇Ⅲ層	8.54 × 7.45 × 1.36	121.0	Qua.

表Ⅱ-8 石器類器種別点数

	遺 構				包 含 層						
	P	F	FC	小計	I	Ⅲ	Ⅲ~V	V	攪乱等	小計	合計
石鏃						1				1	1
ポイントナイフ								1		1	1
スクレイパー								1		1	1
磨製石斧						2	1	14	2	19	19
たたき石						1				1	1
砥石								1		1	1
台石						1				1	1
火打石?	1			1							1
フレイク・チップ		2	453	455		3	1	3	1	8	463
焼礫		1		1		15				15	16
軽石						3				3	3
礫・礫片	83		4	87	5	73		8	4	90	177
計	84	3	457	544	5	99	2	28	7	141	685

表II-9 包含層出土自然遺物一覽

出土区	層位	種別	点数	重量(g)	備考
G-27-d	Ⅲ層	貝皮	1	0.513	カワシンジュガイ
G-27-d	Ⅲ層	獣骨片 (1)		0.832	焼けている
G-28-a	Ⅲ層	貝皮	1	0.099	カワシンジュガイ
H-29-b	Ⅳ層	炭化物	+	4.183	
J-28-a	Ⅲ層	貝皮	1	0.061	カワシンジュガイ, F-1付近

表II-10 包含層出土掲載土器一覽

図	番号	分類	出土区	層位
II-11	1	I b-4	G-32-a	VI
	2	IV a	J-30-a	V
	3	Ⅲ	L-31-b	"
	4	"	K-31-b	"
	5	IV c	H-29-c	Ⅲ~V・V
	6	"	H-29-c・H-30-a	V
	7	V c	M-33-a	Ⅲ
	8	"	"	"
	9	"	"	"

表II-11 包含層出土掲載石器一覽

図	番号	名称	出土区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
II-9	1	石 織	J-33-c	Ⅲ	(3.70) × 1.59 × 0.27	1.2	Obs.	
	2	ポイント	N-32-d	V	4.05 × 2.35 × 0.90	7.0	"	
	3	スクレイパー	H-27-d	V	(1.37) × (2.58) × 0.49	1.8	"	
	4	磨製石斧	L-33-d	V	(4.69) × 4.00 × 1.68	51.7	Gr-Sa.	
	5	"	H-29-c	Ⅲ~V	(3.96) × (4.50) × (1.09)	23.6	"	
	6	"	H-36-c	V	(3.90) × 4.80 × 2.35	35.9	Gr-Mud.	
	7	"	H-28-a	Ⅲ	(4.95) × (4.27) × (1.20)	30.0	Sch.	
	8	"	L-35-c	V	(4.00) × 5.70 × 2.39	76.0	"	
	9	"	I-28-d	V	(5.88) × (4.70) × 2.90	109.8	Gr-Mud.	
	10	"	I-29-b	Ⅲ	(8.20) × 5.10 × 2.62	117.6	Sch.	
	11	"	L-28-a	V	(6.20) × 6.65 × 2.56	166.9	Gr-Mud.	
II-10	12	"	(J-32)	(V)	(10.72) × 5.70 × 3.15	293.3	Sch.	範囲確認調査で出土
	13	"	H-29-d	V	15.20 × 4.50 × 2.70	294.3	"	接合
	14	"	L-35-a	V	18.94 × 4.50 × 2.70	376.3	"	接合
	15	"	M-31-d	V	(8.60) × 6.00 × 3.22	254.3	"	
	16	たつき石	J-28-d	Ⅲ	7.23 × 2.59 × 1.80	57.2	Sa.	
	17	砥石	H-27-d	V	(8.60) × (4.60) × 2.55	89.6	"	
	18	台石	G-32-d	Ⅲ	(6.20) × (6.58) × 3.18	127.0	And.	

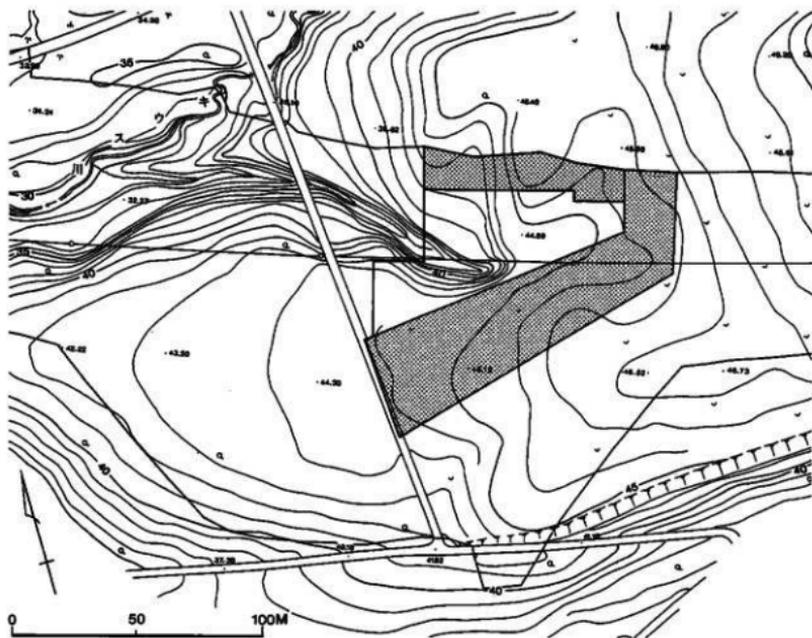
III キウス7遺跡

1. 立地と環境（図Ⅲ-1）

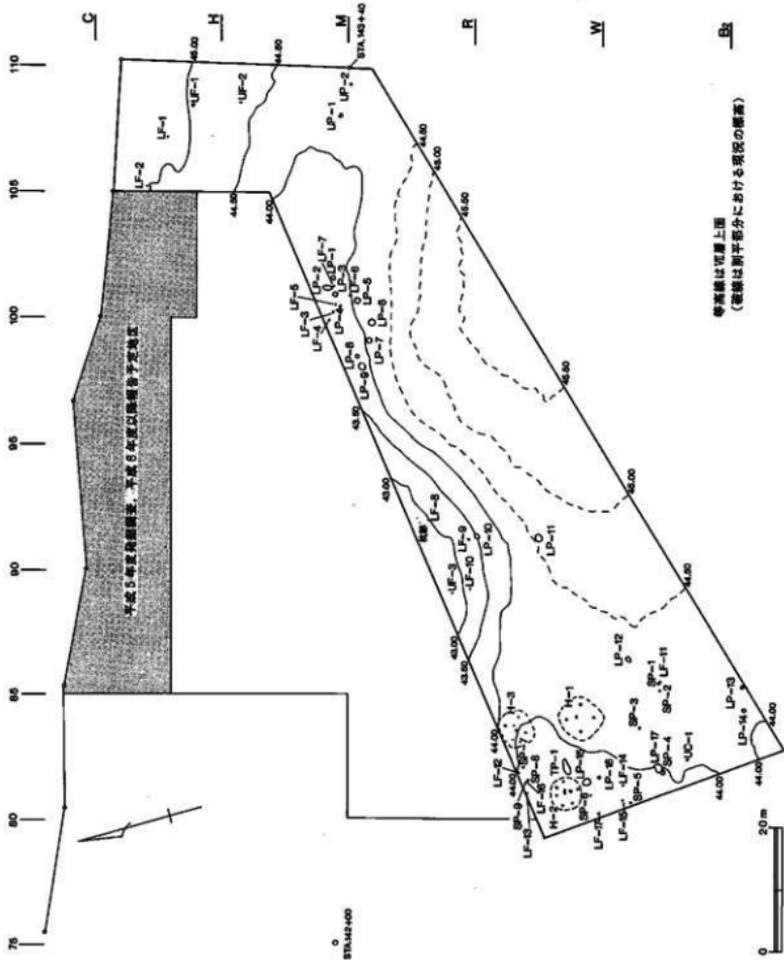
馬追丘陵西側の丘麓には多数の侵食河川が形成されており、本遺跡はキウス川を含むそれらの小支流に挟まれた舌状台地中央の沢頭周辺の緩斜面（標高40～46m）に立地する。遺跡と沢の水面との比高差は約10mである。近隣には国指定史跡「キウス周堤墓群」やタンネットウL遺跡などが見られる。千歳川の流れる沖積低地に面した丘麓縁辺部周辺には多数の遺跡が営まれており、本遺跡はその内の一つである。

調査対象区の土地は沢頭の東側と南側が農地に利用され、北側が山林である。農地は腐食土を採取した土地を機械力で均平化したもので、標高44.5～45.0m以上の包含層は消失し、耕作土からは縄文時代の遺跡が採集される。山林は針葉樹や広葉樹などが混在する雑木林だが、明治時代を中心に炭焼きの原木が伐採されており二次林が主体と考えられる。

遺跡名の「キウス」は『北海道蝦夷語地名解』（永田方正 1891）によると「Kiushi・キウシ＝鬼茅大キ處・川ノ名」と記載されている。明治29年製版の地形図では馬追沼に入るオルイカ川の小支流に「キウシ」と記され（オルイカは同書に「Oruika・オルイカ・川尻ノ橋」と記されている。）、明治43年製版の地形図では現在の「中央」あたりの地名として「キウス」と記されていることから、地名の由来はこの川の名によると考えられる。



図Ⅲ-1 遺跡周辺の地形



図III-2 遺構位置図

2. 調査の方法 (図Ⅲ-2)

本遺跡の調査は、横断自動車道の車道部分・パーキングエリア・工事用道路などの建設予定地にかかる部分を対象に実施したものである。発掘区の設定は建設用地内に設けられた本線センターラインのS T A.143+00とS T A.143+40のポイントを結ぶ基本ラインを基に行っている。基本ラインと平行するラインと直交するラインをそれぞれ4m間隔で設け、前者には基本ラインがMとなるように上から下へ向かうA～C₂の英大文字を、後者には左から右へ向かう100～130の数字を割り振り、4m×4mのグリッドを設定した。各グリッドの名称は、その中央に立って北方向を向いたときに左前方にある杭の名称を使用した。

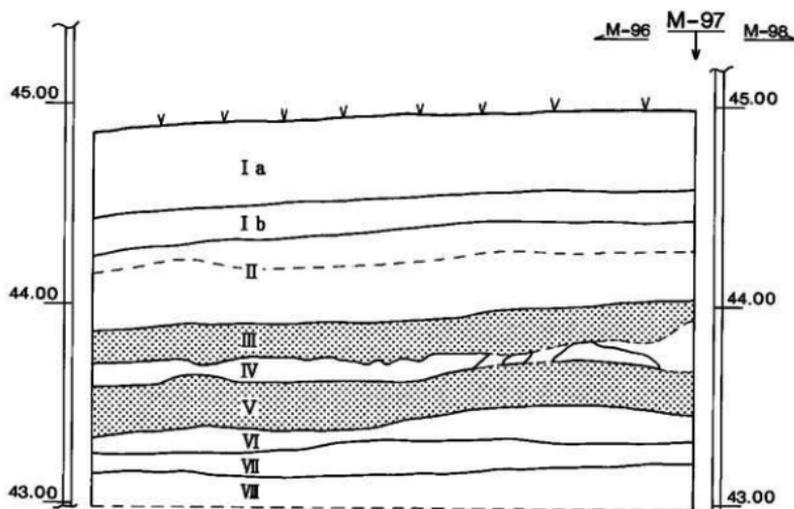
遺物の取り上げは土層毎を基本とし、平面はグリッド内を四分割した2×2mの小グリッド毎に取り上げを行なった。小グリッドの呼び名は、左上から時計回りと反対の方向の順にa～dの英小文字を振り当てて名称とし、グリッド名の末尾に加えて使用した。

本年度の調査は、用地買収の進行状況ならびに工事計画にあわせ期間を変えた二回の調査に分けて行なった。第一回目は本線とパーキングエリアの予定地となっている農地を主な対象とし、第二回目は工事用道路の予定地を対象に実施した。報告は第一回目の調査区を中心とした5,613m²について行い、残りの1,100m²については次年度以降に報告を作成する予定である。

3. 土層 (図Ⅲ-3、図版Ⅲ-1-2)

包含層はⅢ～Ⅵ層で、Ⅲ層とⅤ層の遺物が最も多く、Ⅲ層からは縄文時代晩期・統縄文時代、Ⅴ層からは縄文時代早～晩期のものが出土する。これらの腐植土層は各々美沢川流域の遺跡群などで認められる「第Ⅰ黒色土層」と「第Ⅱ黒色土層」に相当する。一部の地区で盛土の下に旧地表面が残っており、最上層の耕作土・盛土をⅠa層、埋もれた表土をⅠb層とした。

Ⅰa 耕作土・盛土 (黒: Hue7.5YR2/1)



図Ⅲ-3 土層

III キウス7遺跡

Ib 埋もれた表土層 (褐灰: Hue10YR4/1)

近・現代の杭跡が検出されている。

II 灰白色軽石層 (灰白: Hue7.5YR8/1)

樽前 a 降下軽石 (Ta-a)。層厚は平均45cmである。本層は破線の上位と下位で軽石の粒径が異なる。上位 (IIa) は粒径が0.5~2.0cmのもので層厚は15cm程である。下位 (IIb) は径0.5cm以下の火山灰と褐色で砂質の薄い火山灰層とが互層をなしている。

III 黒色土層 (黒: Hue7.5YR1.7/1)

10~20cmの層厚を持つ腐植土。粘性は弱く、乾燥すると微細なラックが生じやすい。縄文時代晩期と続縄文時代の遺物が出土しており、本層は美沢川流域で見られる「第I黒色土層」に相当する。

IV 明黄褐~黄橙色軽石層 (褐: Hue7.5YR4/4)

樽前 c 降下軽石 (Ta-c)。層厚は平均10cm程と美沢川流域のものと比較して薄く、III・V層との境界が不明瞭な部分も見られる。縄文時代晩期の遺物が出土する。

V 黒色土層 (黒: Hue7.5YR1.7/1)

20~30cmの層厚を持つ腐植土。細粒で粘性が強い。縄文時代早期~晩期の遺物が出土しており、本層は美沢川流域で見られる「第II黒色土層」に相当する。

VI 暗褐色土層 (黒褐: Hue7.5YR3/2)

V層とVII層の間にある漸移層。V・VII層との境界は不明瞭である。調査区西側のH-1~3周辺では基本とした土層 (図III-3) のそれよりも厚く形成されている。縄文時代早期の遺物が出土している。

VII 明黄褐色ローム層 (にぶい黄褐: Hue10YR4/3)

風化作用によってローム化した恵庭 a 降下軽石 (En-a) を主体とした層。調査区の東西で恵庭 a 降下軽石 (En-a) と混じる二次堆積の部分があり、その層中にはまれに径1cm以下の樽前d₂降下スコリア (Ta-d₂) が混入する。

VIII 明黄褐色軽石層 (黄褐: Hue10YR5/8)

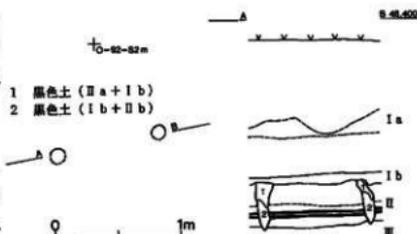
恵庭 a 降下軽石 (En-a)。

※ () 内の土層の色名については「新版標準土色帖」(1988年版)を使用した。

4. Ta-c層上位の遺構

(1) 杭跡 (図III-4)

発掘区境界線のO-91-c、O-92-b区で、旧表土層の下位からII層に打ち込まれた杭跡を2ヵ所確認した。杭跡の間隔はおよそ90cm、規模は径10cmほどである。確認面からの深さは、西側の杭跡は38cm、東側の杭跡は34cmである。掘り方は見られず、断面はいずれも先端が尖る。覆土2に入っている腐植土は旧表土層と同様のものだが、杭の立ち腐れによるものと考えられる。



図III-4 杭跡

②土壌

UP-1・2だけが調査区の東端で検出されており、周囲に同時期の遺構・遺物は皆無である。

UP-1 (図Ⅲ-5)

位置 L-108-b 規模 0.99×0.89/0.60×0.44/0.09m 長軸方向 N-15°-E

特徴 調査区東側標高約44.5mのIV層上面で土器片と共に検出された性格不明の土壌である。平面は東側がやや飛び出した不整形で掘込みは浅い。覆土はTa-cを含む黒色土で、埋め戻し土と考えられる。土器は埋め戻しの終えた覆土の上に破片の状態出土した。掘込み面は覆土と遺物の出土状況から確認面より若干上のIII層中と考えられる。UP-2は比較的近い位置にあり形態などに類似点が見られることから関連する可能性がある。

遺物 土器片は全て同一個体のもので1はその復元個体である。後北C₂-D式の深鉢形土器で、口縁部の破片は全く無い。

時期 続縄文時代 (後北C₂-D式)

UP-2 (図Ⅲ-5)

位置 M-109-a

規模 1.03×0.83/0.84×0.60/0.15m 長軸方向 N-57°-E

特徴 調査区東側標高約44.5mのIV層上面で検出された性格不明の土壌である。平面は不整の楕円形で掘込みは浅い。覆土はTa-cを含む黒色土で埋め戻し土と考えられる。掘込み面は覆土から確認面より若干上のIII層中と考えられる。UP-1と比較的近い位置関係にあり関連する可能性がある。

遺物 なし

時期 続縄文時代 (後北C₂-D式) と考えられる。

③焼土 (図Ⅲ-5)

発掘区東側で2ヵ所、沢に向かって湾状に傾斜した部分で1ヵ所の計3ヵ所を確認した。いずれも焼土付近には炭化物や倒木痕が見られる。これらと焼土には何らかの関連があると考えられる。

UF-1

位置 F-108-b・c 規模 0.93×0.80/0.02m

特徴 III層下位で確認した不整形の焼土で、焼土表面と周辺には炭化物が分布していた。

遺物 なし

時期 層位から縄文時代晩期～続縄文時代と考えられる。

UF-2

位置 H-108-c 規模 0.60×0.48/0.06m

特徴 III層下位で確認した不整形の焼土で、焼土の上と周辺には炭化物が分布していた。

遺物 なし

時期 層位から縄文時代晩期～続縄文時代と考えられる。

UF-3

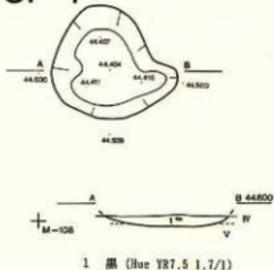
位置 Q-89-a 規模 0.58×0.41/0.06m

特徴 III層中位で確認した楕円形の焼土である。焼土の上と周辺には炭化物が分布していた。焼土中より縄文時代後期(手稲式)の土器片が出土しているが、これらの土器片は倒木によりV層中から動いたものである可能性がある。周辺の包含層から統縄文時代後北C₂-D式土器が出土している。

遺物 IV群b類土器片7点と炭化物が出土している。2は4点接合した胴部破片でRLの斜行縄文が施されている。

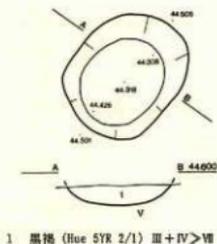
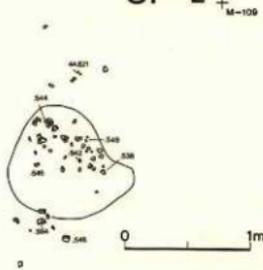
時期 周辺の遺物の分布状況と層位から統縄文時代(後北C₂-D式)と考えられる。

UP-1



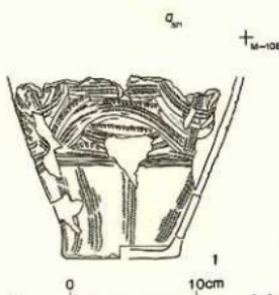
1 黒 (Hac YR7.5 1.7/1)

UP-2



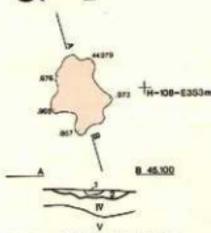
1 黒褐 (Hac 5YR 2/1) III+IV>VII

UF-1



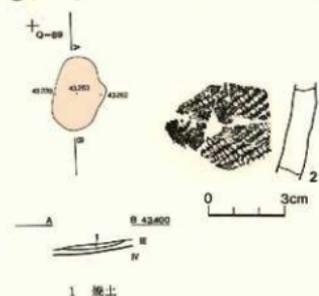
1 焼土 橙褐色 良く焼けて縮まる

UF-2



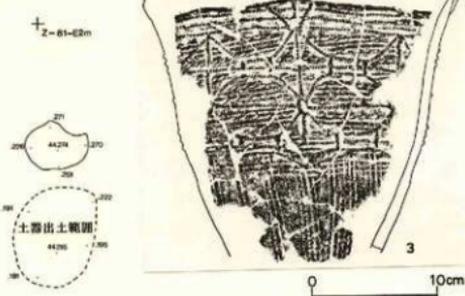
1 焼土 橙褐色 比較的良く焼けている
2 焼土 暗赤褐色 焼けが弱く縮まっていない

UF-3



1 焼土

UC-1



図III-5 UP-1・2、UF-1~3、UC-1

(4)炭化物集中

UC-1 (図Ⅲ-5)

位置 Z-81-a・d 規模 0.50×0.38m 長軸方向 N-78°-W

特徴 調査区西側のⅢ層中で検出した炭化物集中である。北側に近接した波線で囲った部分からは同じレベルで接合可能な口縁部を含む約1/3個体分の土器片(3)が出土した。

遺物 3は縄文時代後北C₁式土器である。時期 縄文時代(後北C₁式)と考えられる。

5. Ta-c層下位の遺構

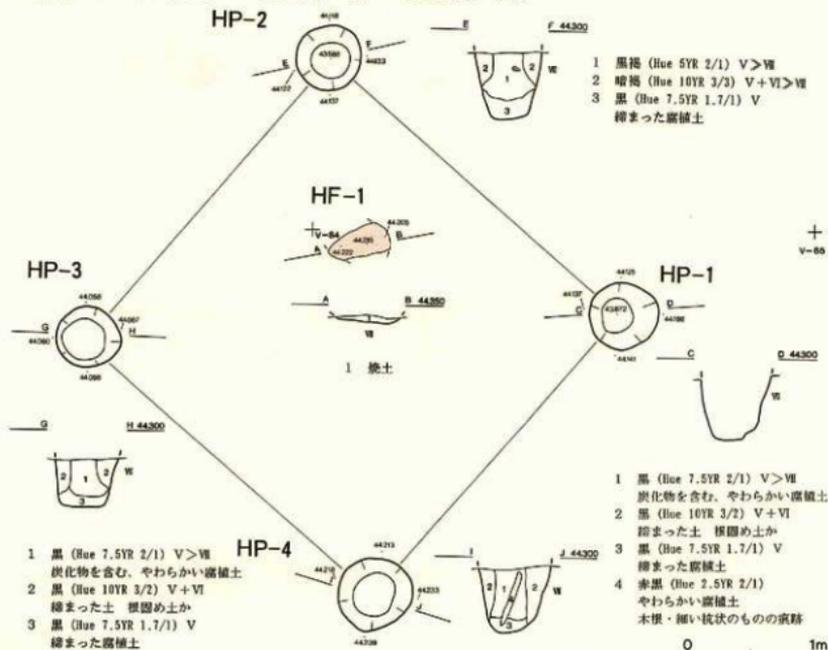
(1)住居跡

調査区西側でH-1～3の3軒の住居跡が検出された。いずれも4本の主柱穴と炉と考えられる焼土を伴う住居跡で、時期を決定する明瞭な遺物は少ない。H-2・3はV層中で壁の探索を試みたが確認できず、H-2の炉と同じ面では検出状況の良く似るLF-14・15が見つまっている。周囲のV層からはIV群a類とIV群b類が比較的多く出土している。以上のことから、H-1～3の時期は縄文時代中期末～後期中葉と考えておきたい。

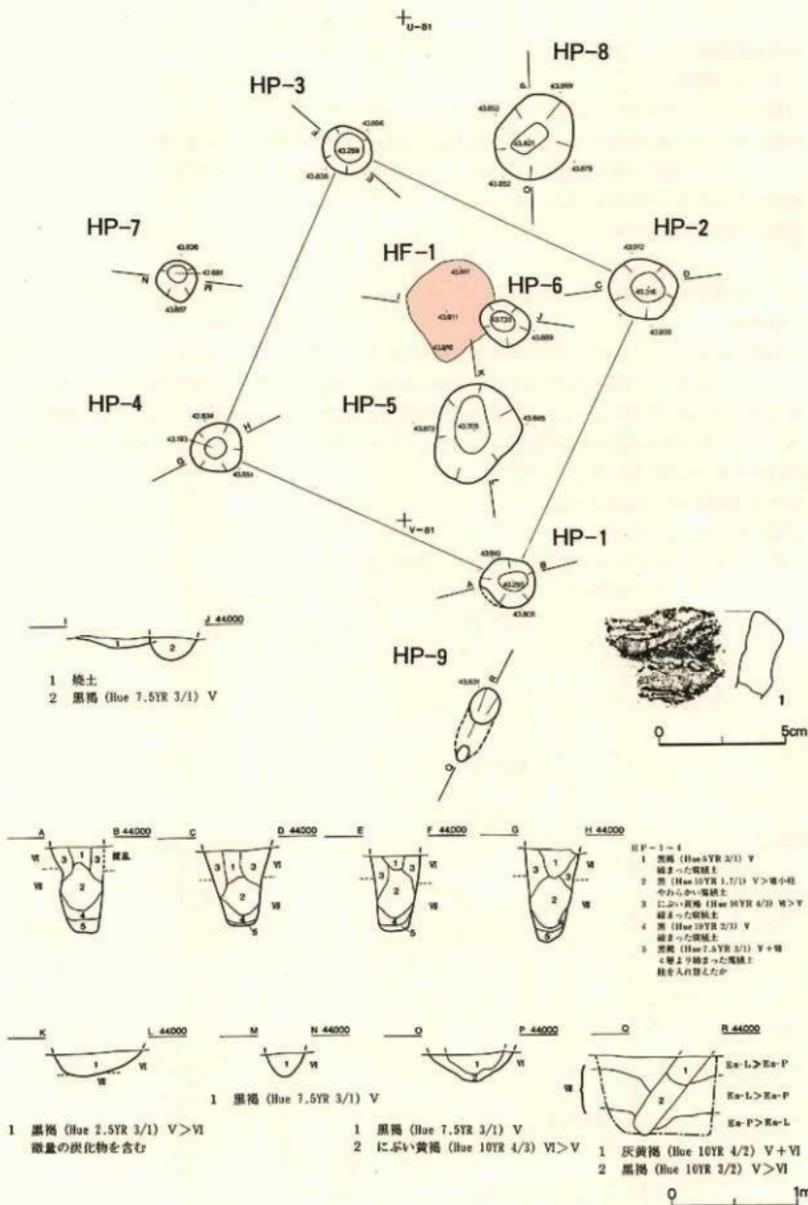
H-1 (図Ⅲ-6, 図版Ⅲ-3)

位置 U-83・84, V-83・84

規模 -X-/ (4.33) × (4.28) /-m 長軸方向 不明



図Ⅲ-6 H-1



図III-7 H-2

HP-1	(0.55) × (0.53) / 0.27 × 0.24 / (0.50) m
HP-2	(0.52) × (0.50) / 0.31 × 0.23 / (0.53) m
HP-3	(0.51) × (0.48) / 0.35 × 0.34 / (0.38) m
HP-4	(0.50) × (0.58) / 0.35 × 0.32 / (0.50) m
HF-1	(0.50) × (0.23) / (0.05) m

特徴 調査区西側で検出された4本の主柱穴とその中央に炉を備える住居跡である。耕作などで壁および床・炉の一部は失われている。各主柱穴の間隔はほぼ約2.6mで、大きさは確認面で径約50～60cm、深さ約50cmと比較的揃っている。覆土の断面にはいずれも柱を挿入してその回りを固めるために入れた土（2層）が認められる。

遺物 なし

時期 縄文時代中期末～後期中葉と思われる。

H-2 (図Ⅲ-7)

位置 U-80・81, V-80・81

規模 - × - / (4.10) × (4.08) / -m 長軸方向 不明

HP-1	0.44 × 0.40 / 0.23 × 0.15 / 0.68m
HP-2	0.54 × 0.50 / 0.24 × 0.23 / 0.60m
HP-3	0.40 × 0.38 / 0.23 × 0.23 / 0.60m
HP-4	0.42 × 0.36 / 0.16 × 0.15 / 0.73m
HP-5	0.79 × .067 / 0.45 × 0.27 / 0.18m
HP-6	0.41 × 0.33 / 0.20 × 0.15 / 0.18m
HP-7	0.32 × 0.30 / 0.15 × 0.15 / 0.19m
HP-8	0.70 × 0.58 / 0.29 × 0.16 / 0.28m
HP-9	0.30 × 0.28 / 0.13 × 0.08 / 0.52m
HF-1	0.80 × .069 / 0.08m

特徴 調査区西側で検出された住居跡である。V層の黒色土を掘り下げ終えたVI層上面で焼土と各HPのプランを確認しており、この面が床と考えられるが遺物は出土していない。この段階で隣接するU-81-a・bグリッドのV層が残っていたため、壁の検出を主眼に詳細な調査を行なったが確認することが出来なかった。主柱穴はHP-1～4で間隔はH-1とほぼ同じ約2.6mである。大きさは径約40～50cm、深さ約60～70cmと比較的揃っている。覆土の断面にはいずれも柱を挿入してその回りを固めるために入れた土（3層）が認められる。断面の4、5層は非常に堅く締まった土で改築等の際に主柱の入れ替えが行なわれた可能性がある。HP-7・8は隣あう主柱穴の中間からやや外側に寄った地点に位置しており補助的な役割を持つ柱の穴と思われる。HP-9はHP-1・2の軸線に沿った方向に傾いて打ち込まれた柱の跡と考えられる柱穴である。径は主柱に匹敵する太さを持ち、土中の先端部をマイナスのねじ回しの先端のように尖らせている。その規模から住居の建築構造に関わると思われるが他の相当する地点には認められなかった。

遺物 1はHP-2の覆土から出土したⅢ群b類土器の口縁部である。撚りの緩いLRの縄の押圧もしくは縄文を施した凹凸のある肥厚帯を持ち、胎土に砂粒と微量の繊維を含む。

時期 形態から縄文時代中期末～後期中葉と思われる。

H-3 (図Ⅲ-7)

位置 U-83・84, V-83・84

規模 -x-x/ (3.94) × (3.63) /-m 長軸方向 不明

HP-1 0.25×0.24/0.19×0.14/0.35m

HP-2 0.25×0.23/0.15×0.14/0.47m

HP-3 0.22×0.22/0.13×0.12/0.34m

HP-4 0.23×0.22/0.16×0.14/0.38m

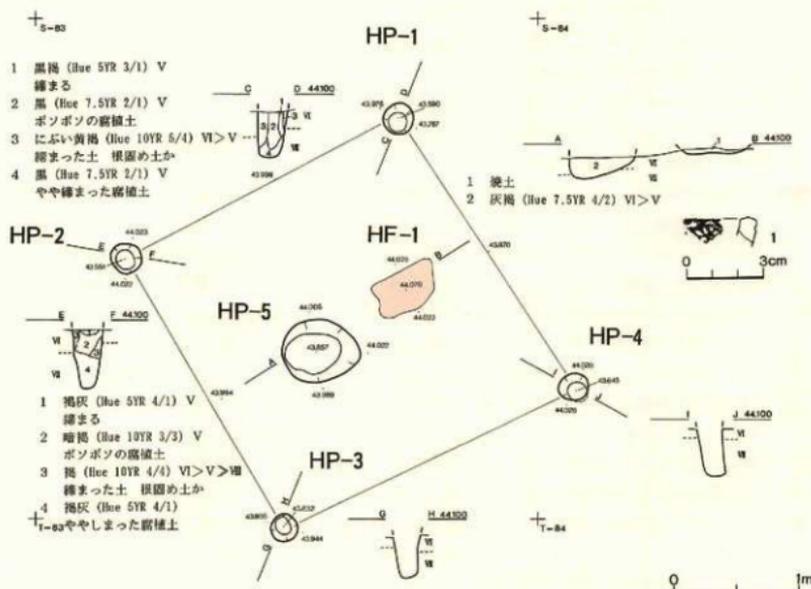
HP-5 0.62×0.50/0.45×0.32/0.17m

HF-1 0.57×0.36/0.03m

特徴 調査区西側で検出された4本の支柱穴とその内側に炉を持つ住居跡である。耕作土を除去した段階でHF-1を検出し、H-1・2の遺構配置をもとに柱穴を探索し確認したものである。中央やや東側に位置する炉(HF-1)は耕作などで壁および床・炉の一部と共に上部を削られている。焼土中からは1の土器が出土した。各支柱穴の間隔はほぼ約2.3m、径は確認面で径約22~25cm、深さ約34~47cmとH-1・2と比較して小型である。HP-1・2の覆土の断面に柱を挿入してその回りを固めるために入れた土(3層)が認められる。

遺物 1は口唇の断面が角形で器面にはLR原体による斜行縄文が施されている。縄文時代後期手稲式土器の可能性はある。

時期 形態から縄文時代中期末~後期中葉と思われる。

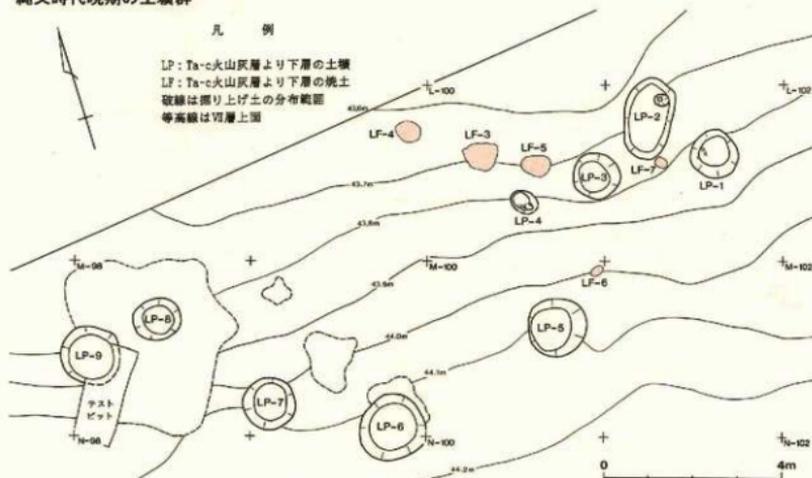


図Ⅲ-8 H-3

②土壌 (図Ⅲ-10~16)

沢頭南側で9基、沢に向かって湾状に傾斜した部分で2基、調査区西側で6基の計17基を確認した。沢頭南側のは縄文時代晩期(タンネトウL式)、湾状に傾斜した部分のものは縄文時代後期中葉(手稲式)、調査区西側のものは縄文時代後期初頭(余市式)・後期中葉(手稲式)・晩期(タンネトウL式)の土壌である。これらの土壌は、後述する焼土の分布域とほぼ一致する。

縄文時代晩期の土壌群



図Ⅲ-9 縄文時代晩期の土壌群

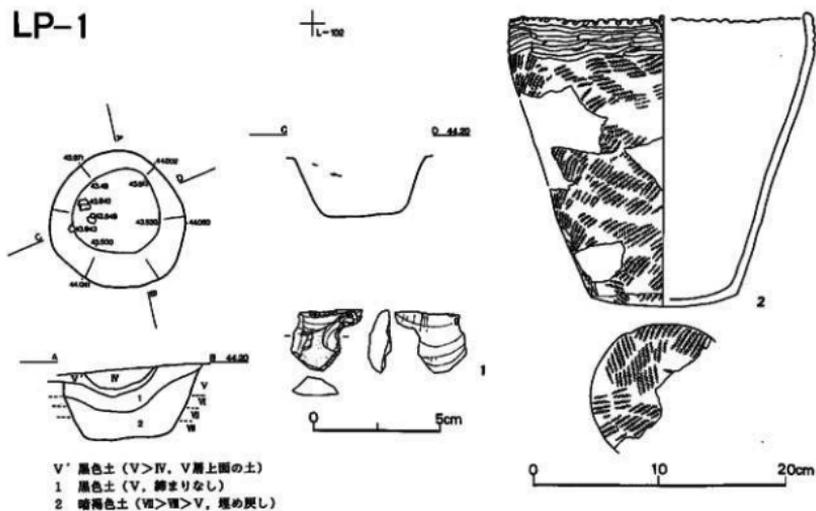
沢頭南側のM-100区周辺で、発掘区境界にかかって半円状に並んだ土壌9基(LP-1~9)を確認した。LP-4を除く8基の土壌は、IV層を除去した後のV層上面で、凹みにIV層土が落ち込んだ状態で検出された。これら8基の上にはIV層直下に特徴的に見られるV' (IV層土粒混じりのV層土でV層上面の土)が堆積しており、いずれもV層上位から掘り込まれたものである。これら土壌群のうちLP-6を除く8基の土壌の覆土からV群c類土器片が出土した。また、発掘区境界で大部分が未調査区にある土壌を1基確認していることから、これら縄文時代晩期土壌群は環状に配列された墓塚群と考えられる。この土壌群の分布域では、土壌に近接して焼土5カ所(LF-3~7)を検出しており、そのうちLF-6を除く4カ所の焼土からV群c類土器片が出土した。これらの焼土は縄文時代晩期土壌群に伴うものと考えられる。なお、この一帯からはV群c類土器片をはじめとする縄文時代晩期の遺物が多数出土している。

LP-1 (図Ⅲ-10)

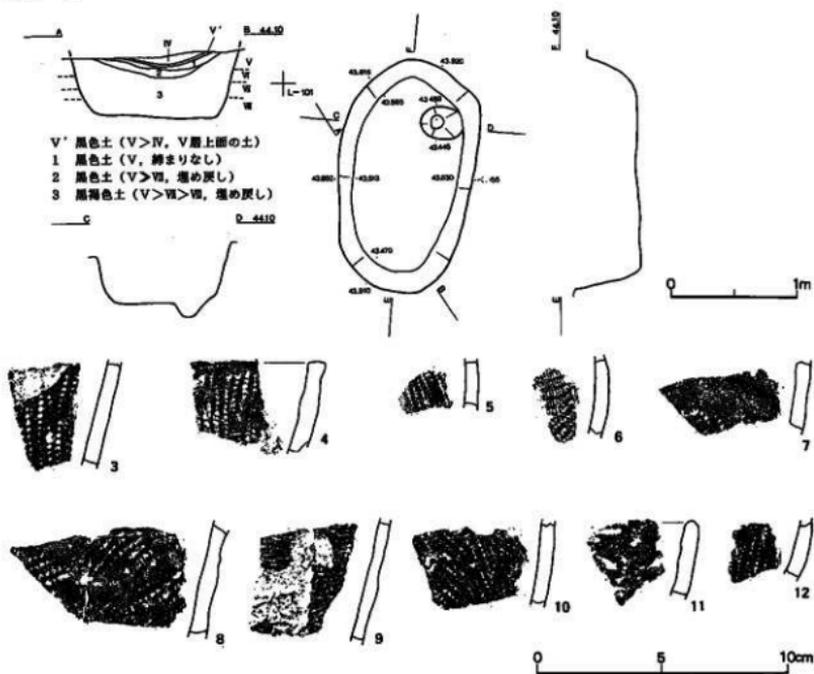
位置 L-101-a・c・d 規模 1.09×1.06/0.69×0.67/0.55m

特徴 平面形は円形を呈し、墳底は沢に向かって緩やかに傾斜している。セクション面の覆土1層下部分とその下の墳底中央部から、脂肪酸分析サンプルを採取した。

LP-1



LP-2



図III-10 LP-1・2

遺物 覆土1層からV群c類土器片11点、Uフレイク1点、フレイク1点の計13点が出土した。1は黒曜石製のUフレイクで一側面に刃こぼれ状の使用痕がある。背面に原石面を残している。2は覆土出土の底部破片4点と、土壌周辺の同じ面から出土した土器片38点が接合したV群c類の深鉢である。器高23.5cm、口径23.1cmを計る。口唇は竹管状工具での刻みにより小波状口縁となっており、口縁には平行沈線が施されている。器面と丸み帯びた底面には、節の細かなLRの斜行縄文が施されている。

時期 縄文時代晩期（タンネトウL式）

LP-2（図Ⅲ-10）

位置 K-101-b, L-101-a 規模 1.84×1.07/1.54×0.83/0.47m

特徴 平面形は楕円形を呈す。墳底面北側に東壁に接して、規模0.33×0.11/0.26×0.10/0.12mの小ピットがある。小ピットの中も覆土3層と同じ土で埋まっていた。規模・形態から、複葬あるいは被葬者の集団内での立場の違いなどが想定できる。

遺物 覆土からV群c類土器片14点とフレイク1点が出土した。4・11は口縁部破片、3・5~10・12は胴部破片である。3は胎土に砂粒を多く含み、堅く焼き締まる。4は口唇が平らで外側にわずかに張り出している。5は薄手で施されている縄文の節が細かい。8は2点接合したもので、器面には積輪みの際の凹凸がある。9は薄手で器面は大部分剥離している。11は口唇が丸みを帯びる。内面と口唇には亀裂が見られる。12は胎土に小礫を含んでいる。地文は3~6・8・9がRL、7・10はLRの斜行縄文で、11は判然としない。いずれも器面が磨耗している。

時期 縄文時代晩期（タンネトウL式）

LP-3（図Ⅲ-11）

位置 L-100-c・d, L-101-a・b 規模 1.05×1.02/0.72×0.62/0.48m

特徴 平面形は楕円形を呈し、墳底は短軸方向で北東に緩やかに傾斜している。

遺物 覆土からV群c類土器片1点とフレイク1点が出土した。1には横走気味のLRの縄文が施されている。器面は磨耗している。

時期 縄文時代晩期（タンネトウL式）

LP-4（図Ⅲ-11）

位置 L-100-b・c 規模 0.62×0.47/(0.58)×0.33/0.25m

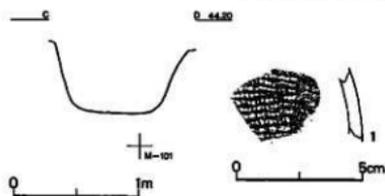
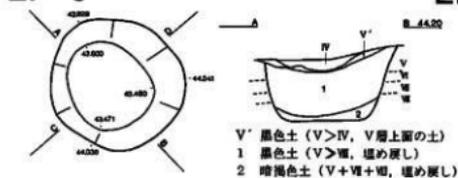
特徴 平面形は楕円形を呈し、墳底は長軸方向で南東に傾斜している。V層中位で台石の上部を検出し、トレンチにより南側を破壊してしまった浅い小型の土壇である。覆土はV層土が主体であり、一連の縄文時代晩期土壇群と同様にV層上位から掘り込まれたものと考えられる。規模・形態から、被葬者には乳・幼児が想定できる。

遺物 覆土1層からV群c類土器片1点、台石2点、礫片1点の計4点が出土した。2は薄手の胴部破片で節の細かいRLの縄文が施されている。3は安山岩製、4は砂岩製の台石で、いずれも表面に敲打痕が見られる。4の表面にはタール状の物質が付着している。

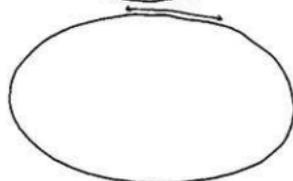
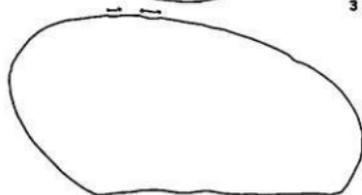
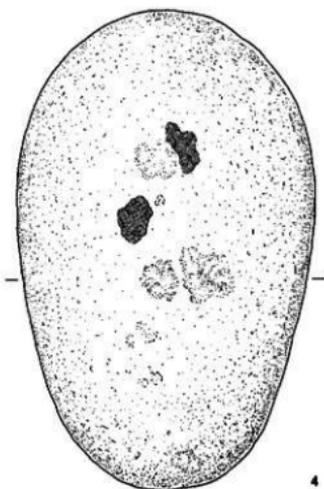
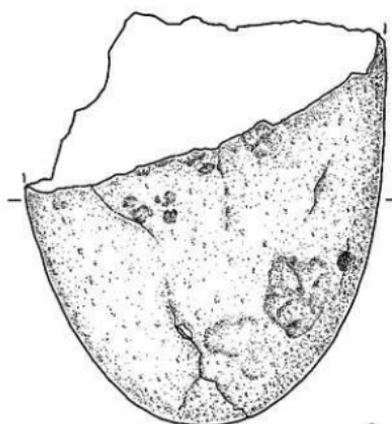
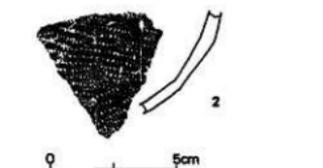
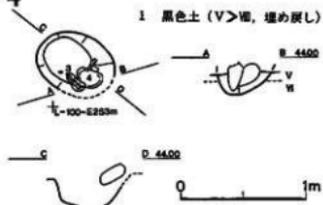
時期 縄文時代晩期（タンネトウL式）

III キウス7遺跡

LP-3



LP-4

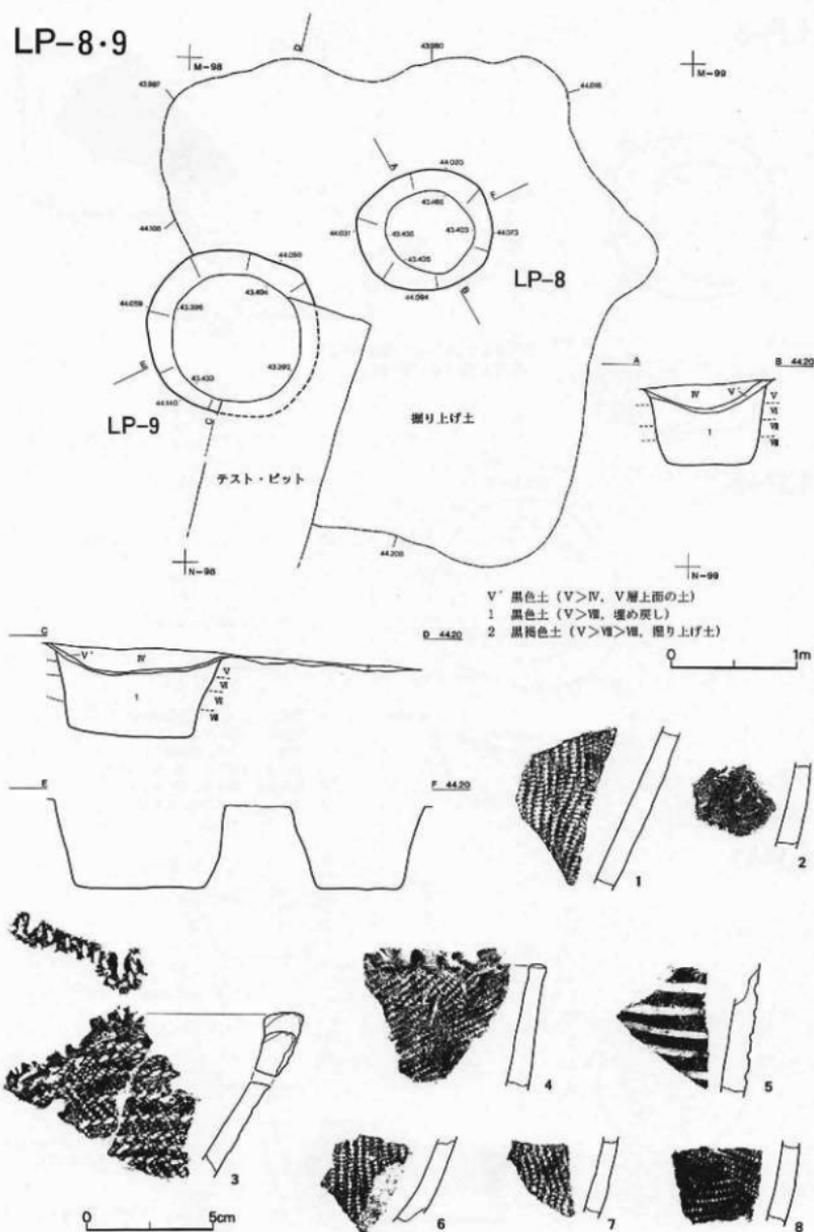


0 10cm

● タール状物質の付着

図三-11 LP-3・4

LP-8・9



図III-13 LP-8・9

LP-5 (図Ⅲ-12)

位置 M-100-c・d 規模 1.37×1.31/1.00×0.93/0.55m

特徴 平面形は円形を呈す。覆土はⅣ層土粒を含むⅤ層土である。規模・形態・覆土とも、後述するLP-7・8と類似する。

遺物 覆土1層からⅤ群c類土器片が1点出土した。1はやや厚手の胴部破片で節の細かいRLの縄文が施されている。

時期 縄文時代晩期(タンネトウL式)

LP-6 (図Ⅲ-12)

位置 M-99-c, N-99-d 規模 1.55×1.50/1.10×1.05/0.53m

特徴 平面形は円形を呈す。土壌に接して北東部分に厚さ1~2cmほどの掘り上げ土(図の破線部分)を検出した。ここから北西方向に、さらに同様の掘り上げ土を2ヵ所検出した。

遺物 覆土から礫片が1点出土した。

時期 縄文時代晩期(タンネトウL式)

LP-7 (図Ⅲ-12)

位置 M-98-c, M-99-b 規模 1.20×1.18/0.83×0.74/0.53m

特徴 平面形は円形を呈す。土壌の北東には前述の掘り上げ土(図の破線部分)を検出した。規模・形態・覆土ともLP-5・8と類似する。

遺物 覆土1からⅤ群c類土器片2点が出土した。2は無文の胴部破片、3は節の細かいRLの縄文が施されている胴部破片である。

時期 縄文時代晩期(タンネトウL式)

LP-8 (図Ⅲ-13)

位置 M-98-a・d 規模 1.06×0.97/0.66×0.66/0.64m

特徴 平面形は円形を呈す。規模・形態・覆土ともLP-5・7と類似する。隣接してLP-9がある。LP-8・9の周囲で厚さ2cmほどの掘り上げ土(図の破線部分)を検出した。この掘り上げ土、覆土への混入は判別できなかった。

遺物 覆土1層からⅤ群c類土器片2点が出土した。1はRLの縄文が施された胴部破片、2は無文あるいは磨消帯部分の胴部破片である。

時期 縄文時代晩期(タンネトウL式)

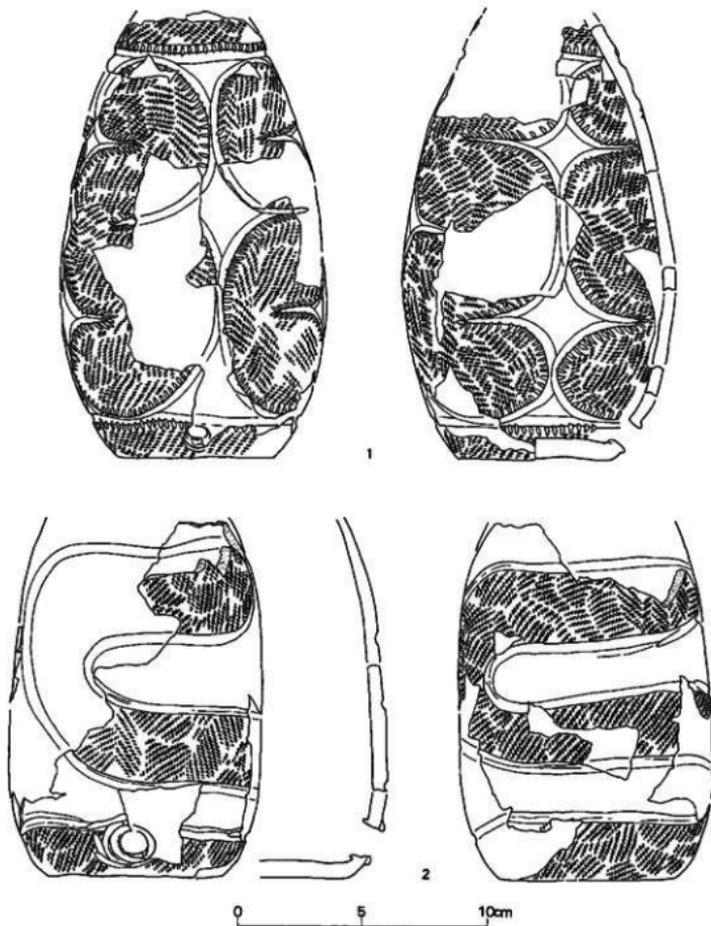
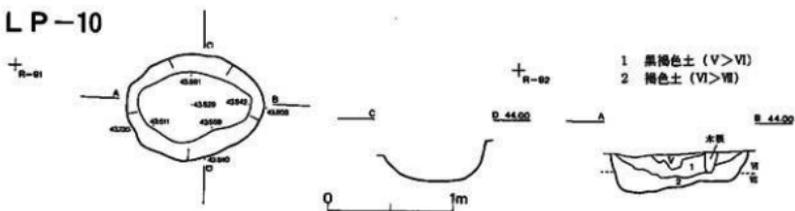
LP-9 (図Ⅲ-13)

位置 M-97-c・d, M-98-a・b 規模 (1.37)×1.29/1.02×1.00/0.70m

特徴 範囲確認調査の際の試掘坑にかかって確認されていた土壌である。平面形は円形を呈す。規模はやや大きい、形態・覆土ともにLP-5・7・8に類似する。隣接してLP-8がある。この掘り上げ土、覆土への混入は判別できなかった。LP-9の南側の掘り上げ土からヒスイ製の白玉(図Ⅲ-37-5)が出土している。

遺物 覆土1層からⅤ群c類土器片6点と礫2点が出土した。3・4は口縁部破片、1・2・5~8は胴部破片である。3は小突起頂部と口唇に棒状工具による内傾する刻みと縄文痕、口縁の下に

LP-10



図III-14 LP-10

は穿孔と縄線文が施されている。4は口唇が刻まれており小波状の口縁を呈している。5には平行沈線文が施されている。地文は3・6～8がRL、4がLRの斜行縄文で、3・4・6・8は縄文の節が細かい。

時期 縄文時代晩期（タンネットウL式）

L P-10（図Ⅲ-14）

位置 Q-91-b、R-91-a 規模 1.09×0.84/0.89×0.56/0.28m

特徴 VI層上面で凹みにV層土が落ち込んだ状態で検出した。平面形は楕円形を呈す。墳底には起伏があり、長軸方向で西側に傾斜する。覆土2にはV層土は見られず、覆土1にV層土が見られる。V層中より掘り込まれ、土を区別して埋め戻したものと考えられる。

遺物 覆土上部からIV群b類の一括土器94点が出土している。1・2はIV群b類の下部単孔土器である。破片のほとんどは接合したが、口縁部から頸部を欠いている。名称の由来となる底部やや上の孔は焼き上げる以前に外から内へ穿孔されている。簡単な研磨がなされる円形の底面周縁には接地による傷み（器面の細かい刺痕）が認められる。文様の基となる意匠は、器面に施した縄文を沈線で区画して蛇行する縄文の帯の文様帯を作成し、それ以外の器面には磨消を施すものである。縄文は細かいLRの縄を色々な方向へ回転施したものである。施文の順番は、縄文、沈線、磨消の順である。

1は胴部が緩やかに弧を描いて膨み、頸部・底部ですぼまる器形である。底部から5mm上の胴部に見られる径1cmの孔は、斜め上に向かって開けており、外面の孔の周囲にはわずかな盛り上がりが見られる。胴部には短い間隔で蛇行する縦方向の縄文の帯が描かれており、この文様帯4本で器面をほぼ覆っている。各文様帯の縁には鑿機工具によると思われる細かな刻みを途切れることなく施している。これはより新しい段階の土器に見られる特徴である。胴部文様帯の上下には横環する沈線と縄文が施されている。胎土には、表面観察では各閃石が特に多く含まれる。

2は胴部の丸みが少ない筒状を呈し、底部に至る手前で急にすぼまる器形である。底部から6mm上の胴部に見られる径1.1cmの孔は斜め上に向かって穿たれており、外面の孔の縁には粘土を貼り付けて盛り上げている。胴部には大きく蛇行する縦方向の縄文の帯2本が全面を使ってゆったりと描かれており、これらは底部上の縄文につながっている。器面の色調は暗褐色を基調とするが、一部に鈍い光沢を持つ黒味がかった箇所も見られる。胎土には白色の岩片が多く含まれている。

時期 縄文時代後期中葉（手稲式）

L P-11（図Ⅲ-15）

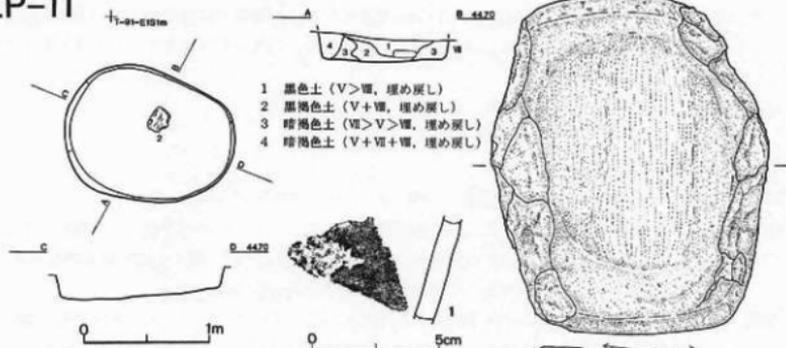
位置 T-91-a・b 規模 1.35×1.06/1.27×0.99/0.18m

特徴 耕地造成によりVIII層まで削平され、上部は消失していた。平面形は楕円形を呈す。墳底は長軸方向で北西方向にゆるく傾斜している。覆土にはいずれもV層土が入っていることから、V層中より掘り込まれたものであることがわかる。セクション面の覆土1層下部、墳底石皿直下および墳底中央部から脂肪酸分析サンプルを採取した。

遺物 覆土1層からIV群b類土器片1点と炭化物、覆土2層から石皿1点と炭化物が出土した。1は無文あるいは磨消部分の胴部破片で、器面は一部剥落している。2は周縁が整形加工された砂岩製の石皿で、擦面はわずかに凹んでいる。

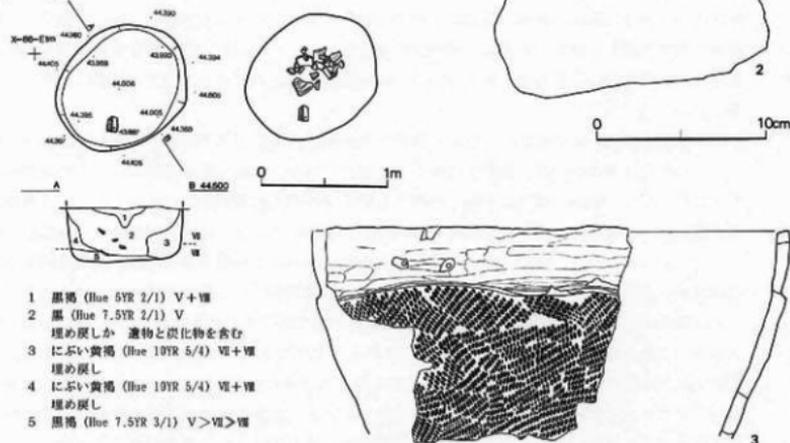
時期 縄文時代後期中葉（手稲式）

LP-11



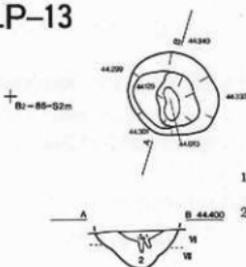
- 1 黒色土 (V>Ⅵ, 埋め戻し)
- 2 黒褐色土 (V+Ⅵ, 埋め戻し)
- 3 暗褐色土 (Ⅶ>V>Ⅵ, 埋め戻し)
- 4 暗褐色土 (V+Ⅶ+Ⅵ, 埋め戻し)

LP-12



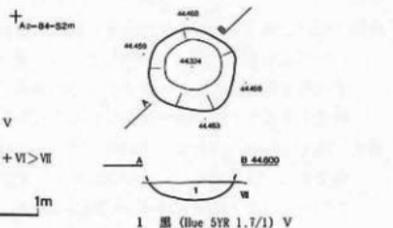
- 1 黒雫 (Iloc 5YR 2/1) V+Ⅵ
- 2 黒 (Iloc 7.5YR 2/1) V
埋め戻しか 遺物と炭化物を含む
- 3 にぶい黄褐 (Iloc 10YR 5/4) Ⅶ+Ⅵ
埋め戻し
- 4 にぶい黄褐 (Iloc 10YR 5/4) Ⅶ+Ⅵ
埋め戻し
- 5 黒雫 (Iloc 7.5YR 3/1) V>Ⅵ>Ⅶ

LP-13



- 1 黒 (Iloc 7.5YR 1.7/1) V
木根痕あり
- 2 黒雫 (Iloc 5YR 3/1) V+Ⅵ>Ⅶ

LP-14



- 1 黒 (Iloc 5YR 1.7/1) V

図III-15 LP-11・12・13・14

LP-12 (図Ⅲ-15)

位置 W-86-b・c, X-86-a・b

規模 (1.01) × (0.90) / 0.99 × 0.80 / (0.41) m 長軸方向 N-64°-E

特徴 調査区中央よりやや南西側の、削平を受けⅥ層が露見した地区で検出された。確認面での平面形は楕円形で平坦な墳底まではそのまま真直に掘り込まれている。覆土は下位に埋め戻しの土が在り、上位には埋め戻し土の陥没部に流れ込んだⅤ層主体とする腐植土が堆積する。遺物は同一個体の深鉢形土器が墳底と上位の覆土中から出土しており、これらは互いに接合する(1)。墳底の北側壁に近い位置から出土したのは表面を上にした口縁部の土器片で、これは埋め戻しがなされる以前に墳底に置かれたものである。上位の覆土中の土器は口縁部を含む約1/4個体分である。埋め戻し土の陥没時に一緒に落ち込んだ出土状況を呈しており、これは本来埋め戻した土の上面に置かれていたものと考えられる。

形態、覆土、遺物の出土状況から見て土墳墓の可能性が高く、本土墳から採取した土壌資料を残存脂肪酸分析にかけている最中である。

遺物 1はⅣ群b類土器の深鉢形土器である。平縁の口縁部には磨消の無文帯が巡り、その下にはLRの斜行縄文が施されている。

時期 縄文時代後期中葉(手稲式)

LP-13 (図Ⅲ-15)

位置 B₂-85-a・b

規模 0.73 × 0.65 / 0.43 × 0.35 / 0.30 m 長軸方向 N-34°-W

特徴 調査区西側の削平部分から検出した性格不明の土壌である。掘り込み面を含む上位の部分は失われている。確認面での平面形は不整楕円を呈し、底には凹凸が見られる。壁は明瞭な立ち上がりを持たず緩やかに広がりながら立ち上がる。覆土は主に流れ込みのⅤ層腐植土なので、掘り込み面はⅤ層中と考えられる。

遺物 なし

時期 縄文時代

LP-14 (図Ⅲ-15)

位置 A₂-84-b

規模 0.70 × 0.67 / 0.44 × 0.41 / 0.14 m 長軸方向 N-53°-W

特徴 調査区西側の削平部分から検出した性格不明の土壌である。平面は不整楕円形を呈し、墳底は比較的平坦である。覆土は主に流れ込みのⅤ層腐植土なので、掘り込み面はⅤ層中と考えられる。

遺物 なし

時期 縄文時代

LP-15 (図Ⅲ-16)

位置 V-81-a・b・c・d

規模 1.75 × 1.31 / 1.64 × 1.19 / 0.08 m 長軸方向 N-64°-W

特徴 調査区西側の削平部分から検出した性格不明の土壌である。掘り込み面を含む上位の部分は削られている。確認面での平面形は不整楕円形で平坦な墳底を持ち、壁は墳底から緩やかに立ち上が

る。覆土はV層腐植土を主体としたものなので、掘り込み面はV層中と考えられる。遺物は墳底から1の土器と2の小砂利の集中が出土している。

遺物 1はIV群a類土器で肥厚帯が剥落した口縁部である。口唇と表面にはRLの斜行縄文が施されている。

時期 縄文時代後期前葉(余市式)

LP-16 (図Ⅲ-16)

位置 V-18-c

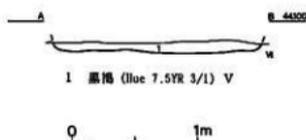
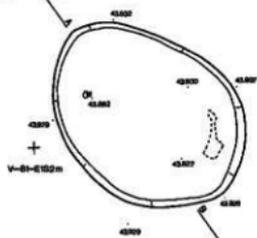
規模 0.56×0.55/0.32×0.20/0.18m 長軸方向 N-14°-W

特徴 調査区西側のVI層上面で検出した性格不明の土壌である。確認面での平面形は不整楕円で明確な墳底を持たず丸底である。覆土はVI層を主体で、掘り込み面はV層下位～VI層上面と考えられる。遺物は覆土から2・3の土器が出土した。

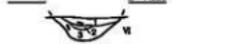
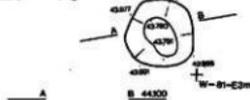
遺物 1はI群b-2類土器の口縁部である。2ヵ所の貫通孔を持ち、器面にはRLの斜行縄文が施されている。2は同時期の深鉢銅部片である。細いLRの縄の斜行縄文を施してから貼付帯を付けている。

時期 縄文時代早期末(コッタロ式)

LP-15



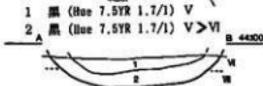
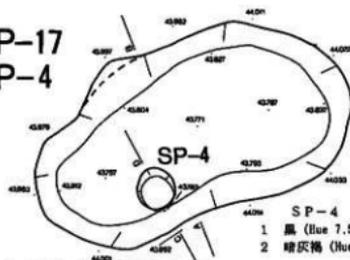
LP-16



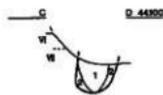
- 1 黒 (Hue 7.5YR 2/1) V
- 2 オリーブ黒 (Hue 2.5YR 4/3) V+VI
- 3 黒褐 (Hue 10YR 2/3) V>VI



LP-17
SP-4



- 1 黒 (Hue 7.5YR 1.7/1) V>VI
- 2 暗灰褐 (Hue 2.5YR 4/2) V+VI



図Ⅲ-16 LP-15・16・17、SP-4

LP-17 (図Ⅲ-16)

位置 Y-81、c・d、Y-82-a・b

規模 $0.56 \times 0.55 / 0.32 \times 0.20 / 0.18\text{m}$ 長軸方向 N-14°-W

特徴 調査区西側のVI層上面で検出した性格不明の土壌である。SP-4と重複すると考えられるが新旧関係は不明である。確認面での平面形は不整の長楕円で、平坦な墳底と緩やかに立ち上がる壁を持つ。覆土は流れ込みと考えられるV層主体の土で、掘り込み面はV層中と考えられる。遺物は覆土中から流れ込みの状態出土している。

遺物 4は東側の墳底近くで出土したIV群a類土器である。裏面の剥落した胴部で表面には太いLRの縄による縄文が施されている。

時期 縄文時代後期と思われる。

(3)小ピット

調査区の西側周辺で検出された柱穴様のピットである。焼土の近くや遺物分布の比較的濃い地区で見つかる傾向にある。SP-1・2やSP-7~9は住居跡の可能性も考えられるが、堅穴の壁や組み合せとなる柱穴の配置等は確認されていない。

SP-1 (図Ⅲ-17)

位置 Y-85-a・d

規模 $0.70 \times 0.34 / 0.61 \times 0.24 / 0.17\text{m}$ 長軸方向 N-33°-W

特徴 LF-11の下位から検出された小ピットである。平面は長楕円形で、V層腐植土を主体とする覆土中には炭化物と焼土粒が混入する。LF-11は堅穴の床に作られた炉の可能性がありことから、この炉に付属する性格を持つと思われる。

遺物 なし

時期 縄文時代

SP-2 (図Ⅲ-17)

位置 Y-85-a

規模 $0.34 \times 0.34 / 0.21 \times 0.19 / 0.20\text{m}$

特徴 平面が円形の掘り込みである。炉の可能性のあるLF-11の近くに位置することから柱穴の可能性がある。

遺物 なし

時期 縄文時代

SP-3 (図Ⅲ-17)

位置 X-83-c・d

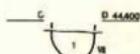
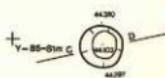
規模 $0.48 \times 0.47 / 0.33 \times 0.28 / 0.35\text{m}$

特徴 上部を削平されており、確認面での平面形は円である。覆土はV層腐植土主体の堅く締まった土が堆積している。単独で検出された。

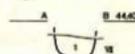
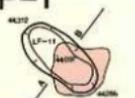
遺物 なし

時期 縄文時代

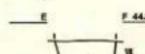
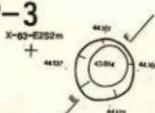
SP-2



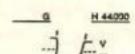
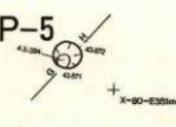
SP-1



SP-3



SP-5



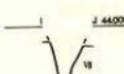
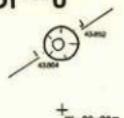
1 黒褐色 (Hue 7.5YR 3/2) V

1 黒褐色 (Hue 7.5YR 3/2) V

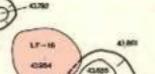
1 褐色 (Hue 7.5YR 4/3) V

1 褐色 (Hue 7.5YR 4/3) V

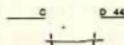
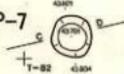
SP-6



SP-7・8・9



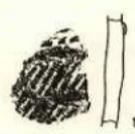
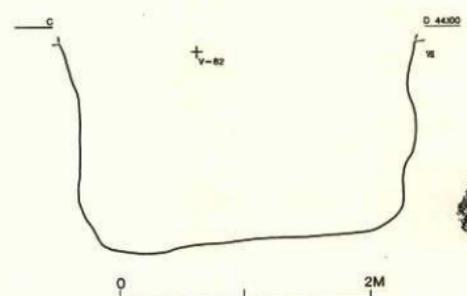
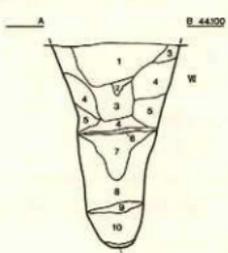
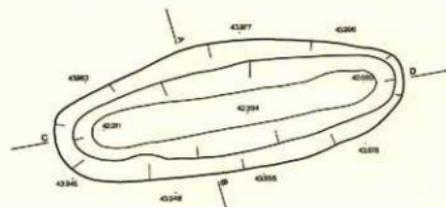
SP-7



1 黒褐色 (Hue 7.5YR 3/2) V
2 焼土

1 黒褐色 (Hue 10YR 3/2) V

TP-1



- 1 赤褐色 (Hue 2.5YR 1.7/1) V
 - 2 明黄褐色 (Hue 2.5YR 6/6) VII
 - 3 黒褐色 (Hue 7.5YR 2/2) V+VI
 - 4 にぶい黄褐色 (Hue 10YR 6/4) VII
 - 5 明黄褐色 (Hue 2.5YR 6/6) VII
 - 6 黒褐色 (Hue 7.5YR 2/2) V
 - 7 明黄褐色 (Hue 2.5YR 6/6) VII
 - 8 明黄褐色 (Hue 2.5YR 6/6) VII
 - 9 黄灰 (Hue 2.5YR 4/1) VII > V
 - 10 明黄褐色 (Hue 2.5YR 2/2) VII
 - 11 黄灰 (Hue 2.5YR 4/1) VII > V
- * 5~11は崩落土

図III-17 SP-1~3・5~9・TP-1

SP-4 (図Ⅲ-17)

位置 Y-81-d

規模 $(0.35) \times (0.30) / 0.25 \times 0.25 / (0.23) \text{ m}$

特徴 LP-17壁際の墳底面から検出された小ピットで新旧関係は不明である。確認面での平面形は円をなし穴は北側にやや傾いて掘り込まれている。覆土はV層腐植土が主体で、断面には南側にやや傾いた柱状の痕跡が認められる。

遺物 なし

時期 縄文時代

SP-5 (図Ⅲ-17)

位置 X-80-d

規模 $0.21 \times 0.18 / 0.11 \times 0.11 / 0.48 \text{ m}$

特徴 LF-14・15の周辺を探索中に検出した柱穴様の小ピットである。穴の掘り込みが北東方向にやや傾くことから、LF-14・15を中心に配置された柱穴の可能性がある。

遺物 なし

時期 縄文時代

SP-6 (図Ⅲ-17)

位置 V-80-c

規模 $0.27 \times 0.25 / 0.09 \times 0.08 / 0.29 \text{ m}$

特徴 H-2の南側で検出された小ピットである。覆土はV層主体の腐植土である。

遺物 なし

時期 縄文時代

SP-7 (図Ⅲ-17)

位置 S-82-b

規模 $0.33 \times 0.32 / 0.22 \times 0.22 / 0.21 \text{ m}$

特徴 LF-12・13・16の周辺に位置する小ピットである。平面は円形で、竪穴の柱穴の可能性を持つ。

遺物 なし

時期 縄文時代

SP-8 (図Ⅲ-17)

位置 T-81-a

規模 $0.70 \times 0.57 / 0.50 \times 0.25 / 0.16 \text{ m}$ 長軸方向 N-44°-E

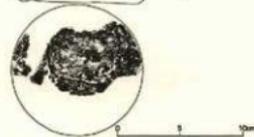
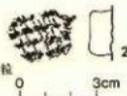
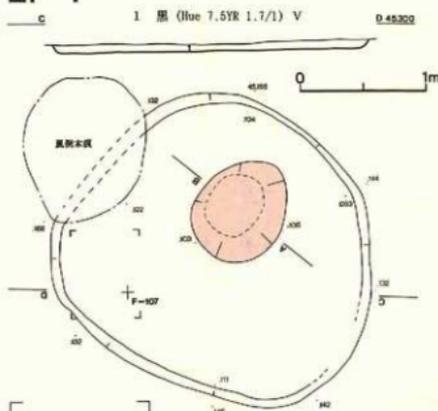
特徴 LF-16の下位に位置する掘り込みである。平面は不整形で覆土中にも焼土が入っている。炉に付属する掘り込みの可能性もある。

遺物 なし

時期 縄文時代

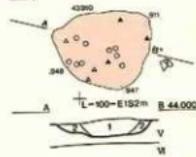
III キウス7遺跡

LF-1



1 に近い赤褐色 (Hue 5YR 4/4) V + 炭土粒
遺物を含む
2 明褐色 (Hue 7.5YR 5/8) 焼土 > V
3 焼土

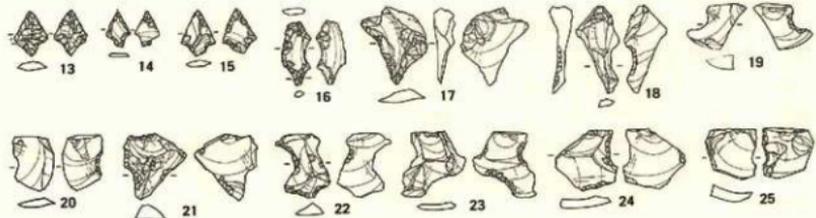
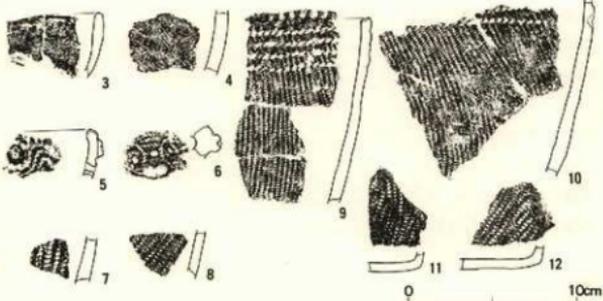
LF-3



○土層片 ▲割片石等 ▲フレイク

1 焼土 橙褐色
非常に良く焼けて締まる

2 焼土 暗赤褐色
焼けが弱く締まっていない



図III-18 LF-1・3

SP-9 (図Ⅲ-17)

位置 S-81-b, T-81-a

規模 0.30×0.28/0.11×0.11/0.13m

特徴 LF-12・13・16の周辺に位置する小ピットである。平面は円形で、堅穴の柱穴の可能性を持つ。

遺物 なし

時期 縄文時代

(4)Tピット

TP-1 (図Ⅲ-17・図版Ⅲ-7)

位置 U-81-c・d, U-82-a・b

規模 2.80×1.03/2.29×0.27/1.62m 長軸方向 N-84°-W

特徴 調査区の西側で単独で検出された大型のTピットである。上部は耕作などによる削平で消失している。平面は長楕円形で、墳底の西側がやや深く傾斜した底を持つ。掘り込み面は覆土の腐植土からV層中と考えられる。覆土の上部から1が出土した。

遺物 1は貼付帯とLRの縄文が施されたI群b-2土器である。

時期 縄文時代

(5)焼土 (図Ⅲ-18~21)

発掘区東側で2基、沢頭南側で5基、沢に向かって湾状に傾斜した部分で3基、発掘区西側で7基の計17ヵ所を確認した。LF-1・2を除いて、これらの焼土は前述の土壌の分布域とほぼ一致している。発掘区東側で検出したLF-1・2の周辺からはIV群a類土器片、沢に向かって湾状に傾斜した部分で検出したLF-8~10の周辺からはIV群b類土器片が出土している。また、発掘区西側で検出したLF-14・15・17の周辺からはIV群a類土器片、LF-11~13・16の周辺からはIV群b類土器片が出土している。沢頭南側で検出したLF-3~7は先に述べた縄文時代晩期(タンネットウ式)土壌群に伴う焼土である。

LF-1 (図Ⅲ-18)

位置 E-106-c, E-107-b, F-106-c, F-107-a 規模 0.86×0.70/0.16m

特徴 V層下位で確認した楕円形の焼土である。(2.53)×2.29/(2.34)×2.15/0.06mの楕円形の浅い掘り込み中に焼土の掘り込み面がある。焼土層は2枚あり、2層は3層を切る形で堆積している。何度か掘り込んで使用されたものと考えられる。浅い掘り込みの中からは、IV群a類の一個体分の土器片が出土している。

遺物 IV群a類土器片1点、フレイク・チップ34点、礫・礫片13点の計48点と炭化物が出土している。1は浅い掘り込みの中から出土したIV群a類一括土器を、図上で復元した胴部から底部にかけての部分である。現存器高36.8cm、現存最大径29cm、底径10.5cmを計る。器面にはLRとRLの斜行縄文が重複して施文されているが、底部付近には施文が見られない。2は焼土出土の胴部破片で、器面にはLRの斜行縄文が認められる。

時期 縄文時代後期初頭(余市式)

LF-2 (図Ⅲ-19)

位置 E-105-a 規模 0.19×0.15/0.01m

特徴 V層下位で確認した、倒木痕上の楕円形の焼土である。

遺物 なし

時期 周辺の遺物の分布状況と層位から、縄文時代後期初頭(余市式)と考えられる。

LF-3 (図Ⅲ-18)

位置 L-100-a 規模 0.76×0.62/0.13m

特徴 V層上位で確認した楕円形の厚い焼土で、縄文時代晩期土壌群に伴うものである。

遺物 V群c類土器片187点、石鏃3点、石錐1点、スクレイパー1点、Rフレイク5点、Uフレイク9点、フレイク・チップ761点、礫31点(うち3点は焼成礫)の計998点と炭化物が出土している。3・4は胎土から同一個体と考えられる無文の土器片である。3は2点接合した口縁部破片で、口唇は丸みを帯びている。5は口唇が縄圧痕により刻まれ、口縁のボタン状貼り瘤には竹管状工具による刺突が見られる。器面には貼り瘤を際立たせるように弧線の縄線文が施されている。6には弧線の縄線文により区画された貼り瘤様の突起がある。その突起上と突起間には、縄端による刺突が施されている。突起より上にはRLの縄文が施されている。7・8は胴部破片で、いずれもRLの縄文が施されている。9はLF-3横から出土した口縁部破片である。内傾した口唇は縄により刻まれ、口縁には縄線文が施されている。10は4点接合した9と同じ個体の胴部破片である。地文には節の細かいRLの斜行縄文が施されている。11・12は底部破片で、器面にはRLの斜行縄文が施されており、底面にも同じ縄文が施されている。13~25は黒曜石製の石器である。13~15は石鏃で、13は菱形、14・15は有柄凸基で14は基部が欠損している。16は先端が欠損した石錐である。17は片面加工の切り出し状のスクレイパーで、背面基部に原石面を残している。18~25は側縁に抉りのある特徴的なUフレイクである。19には原石面が残っている。

時期 縄文時代晩期(タンネトウL式)

LF-4 (図Ⅲ-19)

位置 L-99-d 規模 0.60×0.46/0.05m

特徴 V層上位で確認した楕円形の焼土で、縄文時代晩期土壌群に伴うものである。

遺物 V群c類土器片28点、石鏃1点、Rフレイク1点、フレイク・チップ121点(うち安山岩のフレイク1点)、礫・礫片5点の計156点が出土している。1・3は胎土から同一個体と考えられる無文の土器片である。1は4点接合した口縁部破片で、口唇が棒状工具により刻まれている。2・4も同一個体で、2はRLの斜行縄文が施された胴部破片、4は底部破片である。5は黒曜石製の有柄凸基の石鏃である。

時期 縄文時代晩期(タンネトウL式)

LF-5 (図Ⅲ-19)

位置 L-100-c・d 規模 0.67×0.46/0.10m

特徴 V層上位で確認した楕円形の焼土で、縄文時代晩期土壌群に伴うものである。

遺物 土器片2点(IV群b類、V群c類各1点)、チップ5点、礫6点の計13点と炭化物が出土している。

時期 縄文時代晩期(タンネトウL式)

LF-6 (図Ⅲ-19)

位置 M-100-d 規模 0.30×0.20/0.04m

特徴 V層上位で確認した楕円形の焼土で、縄文時代晩期土壌群に伴うものである。

遺物 なし

時期 縄文時代晩期 (タンネットウL式)

LF-7 (図Ⅲ-19)

位置 L-101-a 規模 0.29×0.11/0.03m

特徴 V層上位で確認した楕円形の焼土で、縄文時代晩期土壌群に伴うものである。

遺物 チップ1点が出土している。

時期 縄文時代晩期 (タンネットウL式)

LF-8 (図Ⅲ-19)

位置 P-92-a 規模 0.43×0.24/0.12m

特徴 V層上位で確認した不整形の焼土である。付近から炭化物が検出された。

遺物 なし

時期 周辺の遺物の分布状況から、縄文時代後期中葉 (手稲式) と考えられる。

LF-9 (図Ⅲ-19)

位置 Q-91-b 規模 0.92×0.52/0.06m

特徴 V層中位で確認した不整形の焼土である。

遺物 チップ1点と炭化物が出土している。

時期 周辺の遺物の分布状況から、縄文時代後期中葉 (手稲式) と考えられる。

LF-10 (図Ⅲ-19)

位置 Q-89-b 規模 0.50×0.48/0.02m

特徴 V層中位で確認した不整形の焼土である。

遺物 礫片1点と炭化物が出土している。

時期 周辺の遺物の分布状況から、縄文時代後期中葉 (手稲式) と考えられる。

LF-11 (図Ⅲ-19)

位置 Y-85-a・d 規模 0.51×0.47/0.04m

特徴 V層下位で確認した不整形の焼土である。この焼土の下からSP-1を検出した。また、近接してSP-2を検出した。

遺物 炭化物が出土している。

時期 縄文時代後期と考えられる。

LF-12 (図III-19)

位置 S-81-c 規模 0.17×0.13/0.02m

特徴 V層上位で確認した楕円形の焼土である。近接してSP-7~9、LF-13・16を検出した。

遺物 なし

時期 周辺の遺物の分布状況から、縄文時代後期中葉(手稲式)と考えられる。

LF-13 (図III-19)

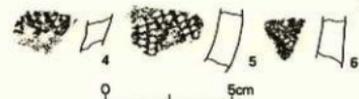
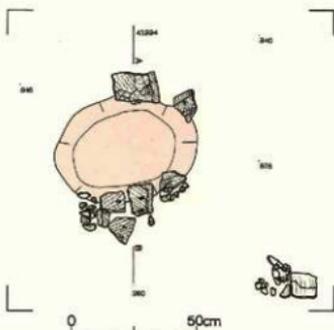
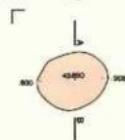
位置 T-80-aほか 規模 0.55×0.48/0.08m

特徴 V層上位で確認した不整形の焼土である。近接してSP-7~9、LF-12・16を検出した。

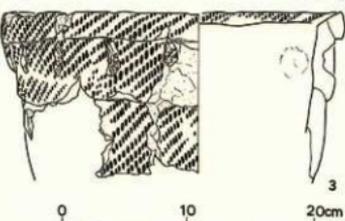
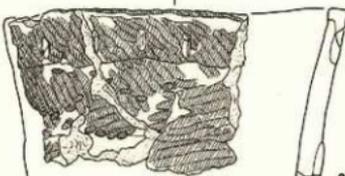
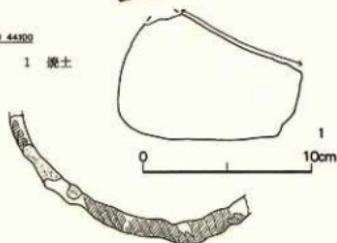
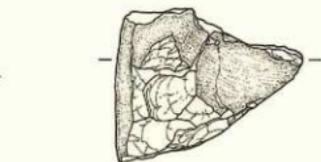
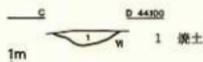
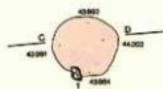
遺物 なし

時期 周辺の遺物の分布状況から、縄文時代後期中葉(手稲式)と考えられる。

LF-15



LF-14



図III-20 LF-14・15

LF-14 (図III-20)

位置 W-81-b 規模 0.52×0.47/0.12m

特徴 V層下位で確認した円形の焼土である。近接するLF-15と同じ面で検出した。当初は住居跡の地床炉と想定したが、周辺では柱穴を確認できなかった。

遺物 フレイク・チップ12点、石皿片1点、礫片1点の計14点と炭化物が出土している。1は砂岩製の石皿片である。表面が擦痕により凹んでいる。

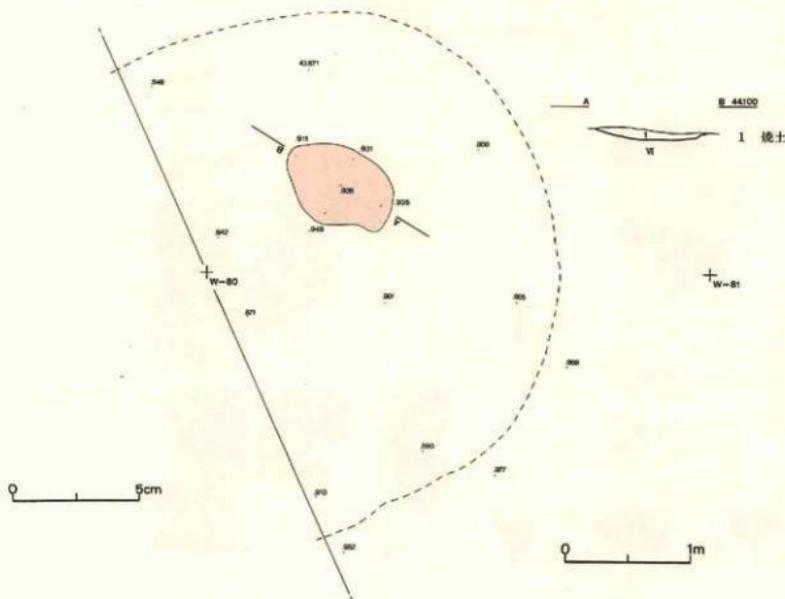
時期 周辺の遺物の分布状況から、縄文時代後期初頭（余市式）と考えられる。

LF-15 (図III-20)

位置 W-80-c 規模 0.56×0.45/0.10m

特徴 V層下位で確認した楕円形の焼土で、近接するLF-14と同じ面で検出した土器片囲炉である。当初はLF-14と同様に住居跡の地床炉と想定したが、周辺では柱穴を確認できなかった。南西に近接してSP-5を検出した。

遺物 土器片275点（IV群a類272点、IV群b類3点）、フレイク・チップ26点、礫・礫片6点、種子殻1点の計308点と炭化物が出土している。種子殻は3片に割れており炭化していない。樹種はホウノキまたはキタコブシと考えられる。2と3は焼土を囲んでいたIV群a類土器である。2は7点接合した口縁部で、器面には撚りの異なる無節の斜行縄文が施されており、平らな口唇にも無節の縄文が見られる。口縁の貼付帯には棒状工具により下からの刺突が加えられている。この刺突により内面には凸状のふくらみができている。貼付帯の下には縄端による斜位の刺突が加えられ、



図III-21 LF-17

下のタガ状に巡らされた貼付帯にも同様の刺突が施されている。内面には横帯での調整痕と、指頭による調整痕が認められる。3は10点接合した口縁部で、内傾した口唇にも地文と同じLRの斜行縄文が施されており、口縁の幅広の貼付帯にはさらに幅の狭い貼付帯が巡らされている。幅広の貼付帯には縄端による斜位の刺突が加えられている。この刺突により内面には凸状のふくらみができている。4～6は胴部破片である。いずれもRLの斜行縄文が施されている。

時期 縄文時代後期初頭（余市式）

LF-16（図Ⅲ-19）

位置 T-81-a・d 規模 0.53×0.51/0.09m

特徴 V層中位でSP-8にかかって確認された、不整形の焼土である。SP-6とSP-8の間に位置する。近接してSP-7～9、LF-12・13を検出した。

遺物 チップ1点、礫9点の計10点と炭化物が出土している。

時期 周辺の遺物の分布状況から、縄文時代後期中葉（手稲式）と考えられる。

LF-17（図Ⅲ-21）

位置 V-80-b 規模 0.92×0.63/0.08m

特徴 V層下位で確認した。発掘区西側境界付近の浅い凹み（図Ⅲ-21の破線で示した部分）の中で検出した焼土である。この凹みの中からはIV群a類の土器片が出土している。当初、住居跡の地床炉を想定したが明瞭な掘り込みは確認できず、周辺から柱穴は検出できなかった。

遺物 フレイク・チップ8点、種子1点の計9点が出土している。種子は炭化しておらず、樹種はニシキギ科と考えられる。

時期 縄文時代後期初頭（余市式）

6. 遺物

(1)土器

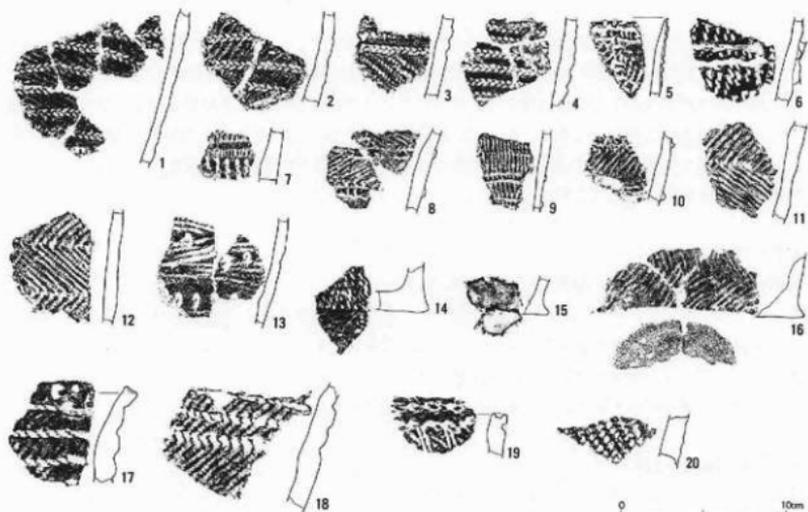
I群（図Ⅲ-22-1～16、図版Ⅲ-13-1～16）

主体はb-2類コッタロ式である。組紐圧痕文など東釧路Ⅲ式の文様を持つものもあるが、比較的細めの原体を使用しており今回はb-2類に含めて報告する。

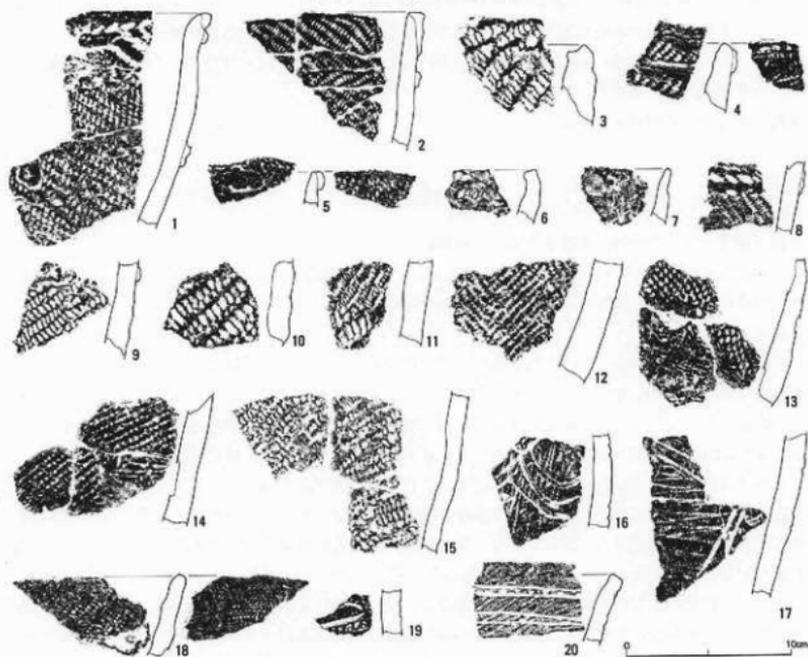
I群b-2類土器

コッタロ式に相当する土器である。総点数は全体の約2.5%を占める125点で、調査区全域のV～VI層から少量ずつ出土している。全て深鉢形土器の破片と思われ、文様は組紐圧痕文・貼付帯を持つもの・絡条体圧痕文・短縄文・結束羽状縄文・斜行縄文・縄端の押捺等が認められる。5は口縁部、1～4・6～13は胴部、14～16は底部である。5・6・9・13の内面は炭化物の付着が顕著である。

1～4は組紐圧痕文が施されるもので、1・2は一段の縄を組んだもの、3・4は0段の繊維を組んだものである。1・2の組紐圧痕文は原体を軽く蛇行させながら押しつけたもので、地文には多条のLR原体による斜行縄文を施している。3は組紐の下段にRL原体の斜行縄文を施している。4は組紐の施文が密である。5・6・8～10は貼付帯を持つもの、7は絡条体圧痕文が施されるものである。5は貼付帯の上と口唇に刻みの入る口縁部で、口唇断面は尖っている。貼付帯は縦・横・斜め方向に付けられており、それらで区画された一部の器面には短縄文が施される。6は太い縦と横の貼付帯を持つものである。器面の短縄文は貼付帯が付けられる以前に施されたもので、貼付帯の上や側



図III-22 I群・III群土器



図III-23 IV群a類土器

の刻みは同じ原体でなされている。7の絡糸体疋痕文は角軸に細い縄を巻付けた原体によるもので、下段には短縄文が施されている。8は地文に羽状縄文が施されている。貼付帯上に入る刻みも同一の原体によると思われる。9は細い縄による密な短縄文の地文上に細い貼付帯を付け、その上に地文と同じ原体で刻みを施している。10の地文は多条の結束羽状縄文である。11・12は結束羽状縄文で、11は多条の原体を使用している。12は条の方向が途中で変化している。13は燃糸文もしくは燃糸文風の縄文を羽状に施したものと撚った縄の折り返し部分によるループ状の押捺文を施したものである。胎土および内面の整形状態から本グループに含めたが、文様的には東鎮路Ⅳ式の可能性も考えられる。14~16は底部の下端が張り出す特徴を持つ。14は器面と下端部に短縄文が施される。15は無文の小型土器、16は多条の縄による羽状縄文が施されている。下端部には指等の押圧による緩やかな刻みが認められる。

Ⅲ群（ⅢⅢ-22-17~20、ⅢⅢⅢ-13-17~20）

調査区の西側で極く少量が出土した。b類と思われる。

Ⅲ群 b 類土器

柏木川式に相当すると思われる土器である。総点数は全体の約0.5%を占める26点である。施文される文様は斜行縄文・縄線文・半截竹管様の施文工具によるもの等が見られる。17・19は口縁部、18・20は胴部片である。

17・18は横線する太い縄線を持つもので、地文にはLRの斜行縄文が施され胎土には繊維を含む。17は口唇の平坦な部分には指もしくは縄状の施文工具による刻みが入り、口唇部が強く外反する。18は口縁に近い胴部である。19は口唇部と直下の器面に半截竹管様の施文工具で斜め方向からの刺突がなされている。地文はRLの斜行縄文である。20は複節RLRの斜行縄文が施されている。

Ⅳ群（ⅢⅢ-23~27、ⅢⅢⅢ-13~17）

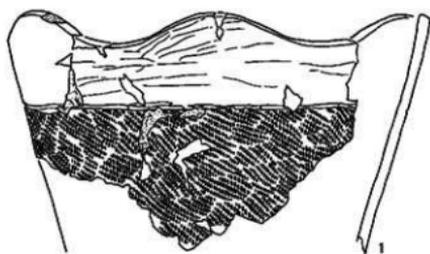
a~c類が出土した。

Ⅳ群 a 類土器（ⅢⅢ-23、ⅢⅢⅢ-13）

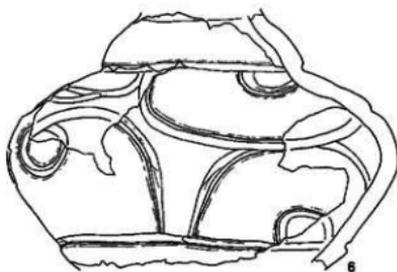
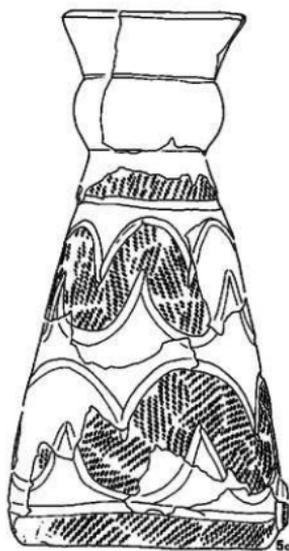
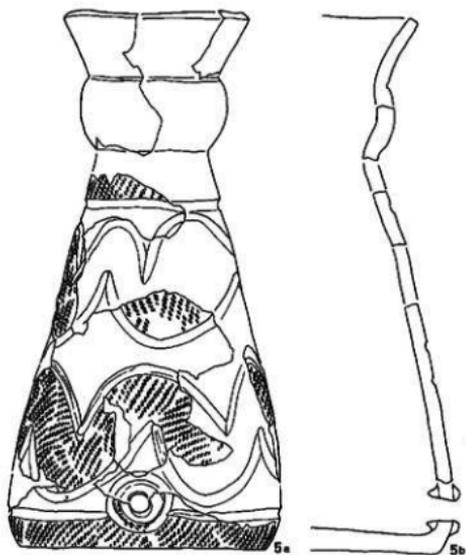
余市式（1~15）を主体に、仮称「手稻砂山式」（16~20）など総点数の16.1%を占める802点が出土した。ほぼ全域で出土するが、東西の両側地区に片寄る傾向が見られ、これらの地区では余市式土器を伴う焼土が検出されている。また、西側の地区で検出された住居跡もこれらに伴う可能性がある。全て深鉢形土器と思われ、器面には貼付帯と斜行縄文が施され、内面に斜行縄文を施すものも見られる。なお、今回の余市式には所謂「タブコブ式」と称される土器が多数含まれ、これらは縄文を施した後に研磨様の処理（調整？）を施し、器面の細かい凹凸をなだらかにするものが見られ、これらには処理の行なわれた段階によって縄文の削れ方がやや異なる（512~14）。1~5は貼付帯を持つ口縁部、8・9は貼付帯を持つ胴部片である。16~20は斜行縄文を地文に施した後に、沈線による文様を描いたものである。

1は貼付帯の上にRLRの縄を押捺したもので地文にも同一原体による斜行縄文が施されている。2は口唇部を含む2段に肥厚帯が付けられるもので、2種類の縄文が施されており、胴部の縄文は交差して施される。3は厚みのある肥厚帯の部分で、肥厚帯の下辺に沿って刺突が施されていた形跡が認められる。極太の原体でLRの縄文を表裏と口唇に施文しており、胎土には細かい岩片が多数含む。4は表裏にLRの斜行縄文が施されるもので、胎土には砂粒を多く含む。5はやや小形の深鉢口縁である。部分的な肥厚帯が付けられ表裏と口唇にLRの縄文が施され、口唇上には細い棒状の工具による刺突が一定の間隔で施される。6・7は類似した軟質の胎土を持つもので、6はLRの太い縄文が施され、7は無文である。8は貼付帯上に縄線が押捺され器面にRLの斜行縄文が施される。

III キウス7遺跡



0 10 20cm



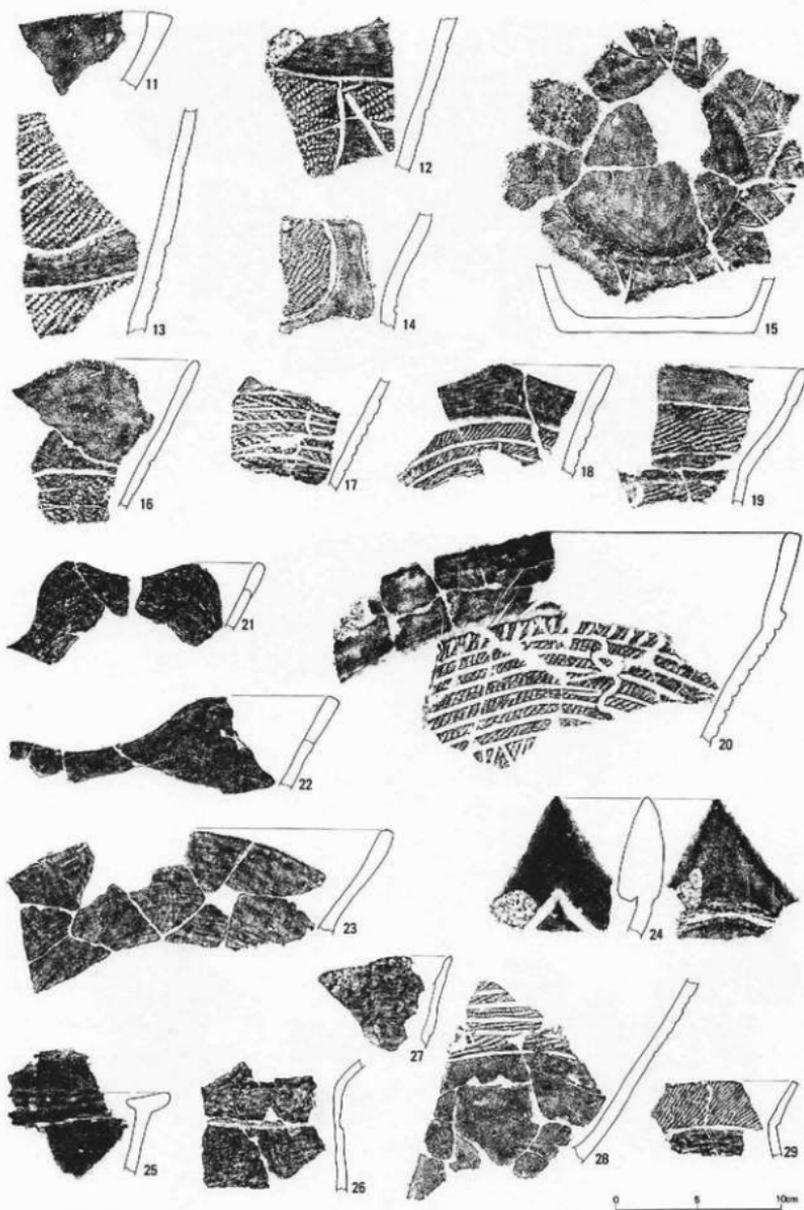
0 5 10cm

図III-24 IV群b類土器(1)



圖三-25 IV群b類土器(2)

III キウス7遺跡



図III-26 IV群b類土器(3)

この縄は多条の可能性がある。9・15は器面にやや乱れたLRの斜行縄文が施される。10・11は同一個体で非常に太いLRの縄と細い多条の縄による縄文が施されている。12は表裏にLRの縄を縦と横に施し羽状にしたもの、13・14は同一個体でRLの斜行縄文に直線と丸を組み合わせた文様を施文している。18・19も同一個体で表裏にLRの斜行縄文を施し、沈線文は上から下に向かって描かれる蛇行沈線と思われる。20は多条の縄を使った斜行縄文を施し、その後で間に刺突を施した2本の平行沈線を上下2段に施文している。

IV群b類土器（図Ⅲ-24～26、図版Ⅲ-14～16）

主に手稲式土器に当たるもので、総点数の約35.4%を占める1,765点が出土した。出土地点は調査区中央から北側境界線に寄った地点の、沢頭に向かって緩やかに落ち込む北向きの斜面である。破片が散乱して出土する状況で、接合・復元されるものも極く僅かである。器形は深鉢が多く鉢・注口・下部単孔土器・壺・ミニチュアなども出土している。主体となる深鉢口唇の山形突起は小さく、やや内反する口縁に無文帯を持つものがある。磨消の施される土器の施文順位は（縄文→沈線→磨消）の順である。地文に施される縄文はLR原体のものがほとんどで、一部の土器は文様帯の縁に籠網式土器に見られるような刻みやハの字状の太沈線が施されている。これらの特徴から、時期は手稲式土器の比較的新しい時期から籠網式土器へ移行する頃と考えられる。

深鉢形土器（1・7～23）

器形は底部から口縁部に向かう縁がほぼ直線的なもの（1・7・9・10）と、底部付近では立ち気味で胴部あたりから外側に向かって開いていくもの（8・11～20）とに大きく分けられる。

1・7は凹凸の少ない波状の口縁に狭い磨消の文様帯を持つ土器で、横環する沈線より下に1はRL、7はLRの斜行縄文が施されている。胎土には大粒の丸いチャートなどが入る。磨消の処理は非常に雑である。9・10は同一個体の底部付近である。LRの斜行縄文が施された胴部で、底部近くでは無文になる。底部には図で断面を示した2個所の未通孔があり、これらは焼成後に作られている。8は開いた平縁の口縁に幅広の縄文が施される文様帯を持ち、胴部には曲線を描く沈線で区画された面に縄文と磨消が施される。11～15は同一個体である。口唇部は内側にやや張り出し、口縁には磨消、胴部には曲線を描く沈線で区画した面に縄文と磨消が施される文様帯を持つ。16～19は小形の器形のものである。16・17は同一個体の口縁と胴部である。比較的凹凸の大きな波状口縁で幅の広い磨消の文様帯の下の胴部には横環する数条の沈線で区画された文様帯が施文される。18は凹凸のない波状口縁の下に幅の狭い磨消の文様帯を持つ。他の面より一段高くなっている胴部の文様帯には明瞭な沈線とLRの細かい縄文が施される。19は胴部から口縁へ向かう縁のくびれが顕著な器形である。緩やかな波状の口縁で、胴部にかけては横環する沈線で区画された比較的幅の広い縄文の文様帯と磨消の文様帯が段違いに施文されている。20は一段高くなった横環する平行沈線の文様帯の上下に一見刻みの様に見えるハの字状の太沈線が施されるものである。21～23は磨消の施された口縁で、21・22は波状口縁、23は平縁である。

鉢もしくは浅鉢形土器（27、28）

27は口唇の断面が先細りで先が丸い粗製のものである。粗く研磨された器面には細い沈線による単純な施文がなされる。28は明瞭な沈線で区画された胴部文様帯から下に磨消の文様帯を持つものである。

注口形土器（6・29）

6は約1/3個体分の破片が出土しほとんどが接合した。器形から注口形土器と考えられる。沈線で区画した面に研磨を施して高低の段差を作出した文様を描いている。29は注口もしくは壺の口縁部である。

壺形土器（2）

2は平縁の壺形土器で研磨の施された口縁の下段には沈線で区画した面に縄文や磨消を施す文様帯がある。

下部単孔土器（3・5）

3の器形は5の上半分に似た形である。表面と口縁に近い内面は研磨が施されており、器壁は5と比較して厚い。注口土器の口縁部の可能性もある。5は出土した破片のほとんどが接合している。5aは下部の穴がある面、5cは左側面、5bはその器壁断面である。器形は三角フラスコ状の胴部に、開いた口縁と丸く膨らんだ頸部が付くもので、底部は平らで広く安定感がある。底部から約1.3mm上の胴部に見られる径約8cmの孔は、整形時に水平に穿たれたもので、外面の孔の縁に沿って太い粘土紐を貼り付け厚く盛り上げている。

文様は、器面に施文した縄文を沈線で区画して蛇行する縄文の帯を作出し、それ以外の器面には磨消を施すものである。縄文は細かいLRの縄を色々な方向へ回転施文したものである。口縁とその内面それと頸部は研磨が施されている。胴部には蛇行する縄文の文様帯が2本、上段と下段に巡らされている。特に下段の文様帯は上段のものよりも大振りで、一つおきに高さを変える緩急を付けた蛇行が施されている。磨消文はその文様帯の狭間などの空間に施される。胎土には白色の岩片を含む。

ミニチュア（4）

4はLRの縄文が施される土器で、上部の沈線は地文の後に描かれている。内面には炭化物が薄く付着する。

口縁部その他（24～26）

24は単独で出土した口縁の山形突起部である。ほぼ全面に研磨が施されており、内面は口縁に沿って大きく張り出している。同じ個体の破片は他に出土していない。25は山形突起部にいたる途中の口縁部である。口唇が内外に向かって大きく張り出し、口唇上は広く平らである。26は底部から胴部の広がる途中の土器片である。表面は研磨が施され底部側の器壁は一段厚くなっている。

IV群（図Ⅲ-27、図版Ⅲ-17）

調査区の中央と東側から少量のc類が出土した。

IV群c類土器

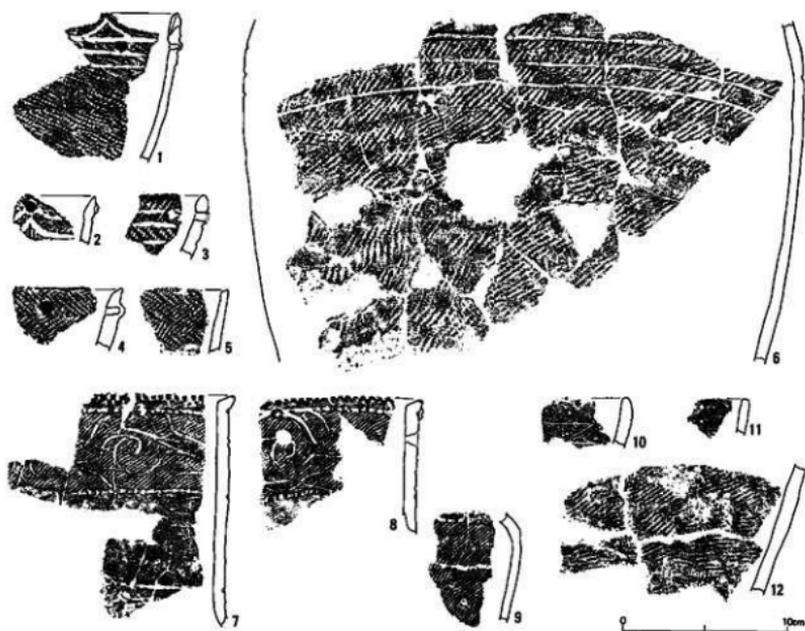
堂林式・御殿山式など総点数の約3.1%を占める157点が出土した。器形は深鉢形・鉢形・壺などがある。口唇には小形の山形突起を持ち、口縁には内面からの突瘤文が施される。口唇の断面は尖るものと、先端に平らな面を持つものが見られる。文様は沈線・連続した刺突・羽状を含む縄文などが見られる。施文の順番は主に縄文→突瘤文→沈線である。

深鉢形土器（1・6・12）

1の山形突起の内面には頂部から縦に短い沈線が引かれている。器面には突瘤文・沈線・RLの縄文が施されている。6は上部が内側に入る大型の深鉢である。器面にはLRの縄文と横環すると考えられる3本の平行沈線が施されている。12は細かいLRの縄文が施される胴部片で、小岩片、砂粒などが多く含む粗雑な胎土を持つ。

鉢もしくは浅鉢形土器（2～5・10・11）

2は小形の山形突起を持つ口縁部で、器面には羽状縄文と2本の沈線が施される。突起部の器面には小粒の粘土塊が貼り付けられている。3・4は羽状縄文と突瘤文の施される口縁部で、3には2本の沈線が引かれる。5は羽状縄文の施されるもの器壁の薄い小形の土器である。10・11は無文の器面に細い沈線の文様を施文した小形の土器の口縁部である。



図Ⅲ-27 IV群c類土器

壺形土器（7～9）

7～9は同一個体のもので、外に向かって張り出した口唇部を持つ口縁から頸部には、上段にLRの縄文と断面の丸い棒状の工具による連続した刺突と沈線の文様が施される文様帯、下段には無文帯を持つ。胴部の形は肩の辺りがわずかに膨らむものでやはりLRの縄文で施される。

V群（図Ⅲ-28～31、図版Ⅲ-17～20）

総点数の約37.3%を占める1,860点が出土した。

V群c類土器

タンネトウL式を主体とするもので晩期遺構群の範囲を含む集中区周辺から出土している。包含層はⅢ～Ⅴ層であるが主体はⅤ層である。深鉢・鉢・浅鉢・ミニチュアなどの器形があるが、小形の深鉢や鉢・浅鉢が主体である。文様は斜行縄文を地文に口唇と口縁部の文様帯に施される。口唇には縄線文、縄による刻み、棒状工具による刻み、指等による太い棒状工具を用いた連続した凹凸等が見られる。口縁部の文様帯には縄線や沈線による文様が見られ、前者の施文されるものが多い。ママチ遺跡、美々2遺跡、東駒里遺跡などで検証されたTa-cを挟んだ土器の文様の変化は認められない。以下、上から順に述べる。

Ⅲ層（図Ⅲ-28・図版Ⅲ-17）

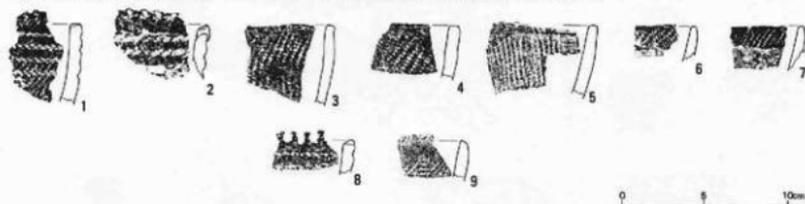
器形は深鉢形土器や鉢形土器がある。口唇に刻みがあるものも見られ、文様は口縁を横環する数状

III キウス7遺跡

の縄線文と地文に縄文が施される。2はLRの同一原体による4本の縄線文と口唇上の刻みが施される。3は口縁の上端に口唇から折り曲げた様な粘土の盛り上がりが付く口縁部である。器面にはRLの縄線文が3本あり、口唇の刻みは同一原体による原体の折り返しの縄端を押捺したものである。4は口唇に棒状の工具を使った刻みのある口縁である。器面にはLRの縄文が施される。5・6・8・9はLRが施されている。7は条の立ったRLの縄文が施された口縁である。

III～V層（図III-28、図版III-17）

調査区の中央から細かい破片が出土した。8はLRの縄線文が施された口縁で口唇には棒状の施文具で深い刻みが施される。9はLRの縄を縦横に転がした縄文が施される。

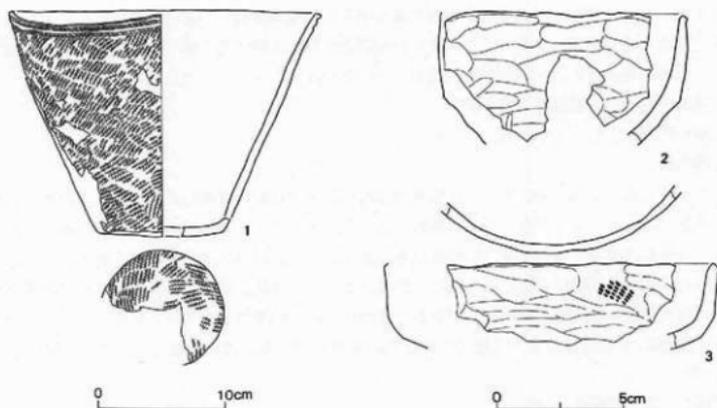


図III-28 V群c類土器(1) III・III～V層出土

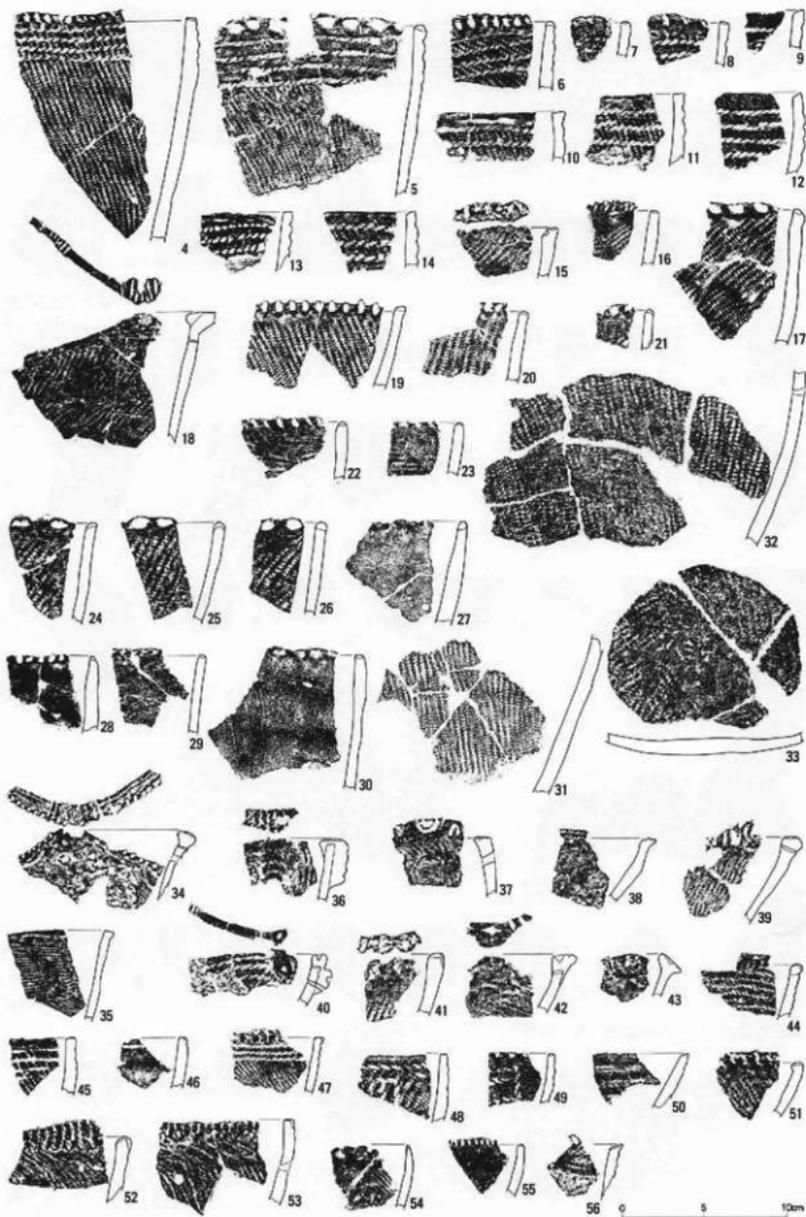
V層（図III-29）

深鉢形土器（1・4～33・100・103）

1の復元個体は底部を含む約1/4個体が出土したものである。比較的小形の土器で口縁は外に開き気味である。底部はやや丸みを帯びるもので、据え置いたときに不安定である。口縁にLRの縄線文が2本施され、器面と底部には同じ原体で横位の縄文を施文している。4～14は縄線文があるもので、4～8にはそれに口唇の刻みが加わり、4・7・8は縄、5は指様の施文具、6は棒状の施文具が使われる。地文にはRLの縄文が施されており、縄による口唇の刻み・口縁の縄線文と同一原体が

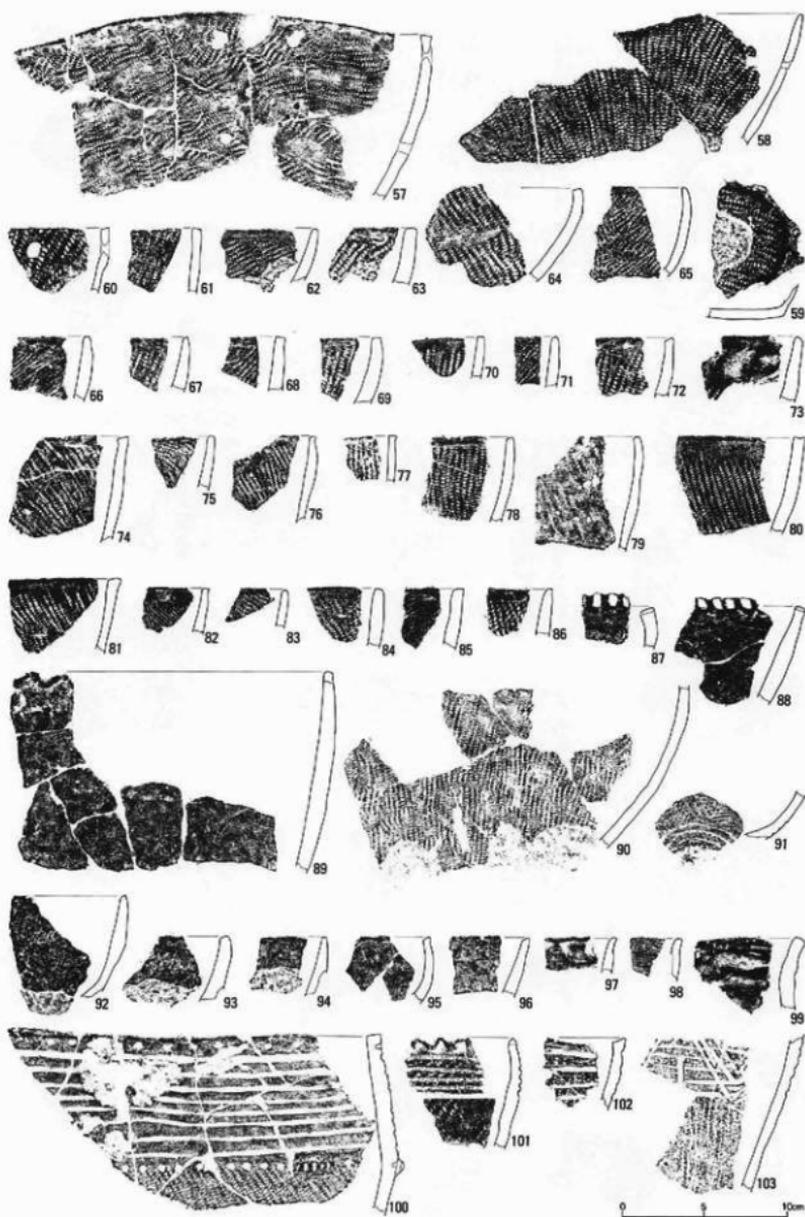


図III-29 V群c類土器(2) V層出土



圖三-30 V群c類土器(3)V層出土

III キウス7遺跡



図III-31 V群c類土器(4)V層出土

使用される。15～30は口唇に施文するものである。各施文具は17・24～27が指状、19・28が棒状、18・22・23が筒状、29・30が半截した管状のものである。地文の縄文はLRが多く、RLは22・23に施される。27～30は無文である。15はLRの縄の押捺で口唇に複雑な文様を施している。16は口唇にRLの縄文を施してから同じ原体で刻みを入れている。18は緩やかな波状口縁の頂部と口唇の一部に粘土を張り付けている。31・32は条が立ち気味のLRの縄文が施される胴部である。33は32の底部である。100・103は沈線が施されるものである。100は胴部で逆くの字に曲がる器形で8本の横環する平行沈線の下には小径の管状施文具による刺突が巡っている。下段の刺突列中には短い横の貼り付けがあり、その上には棒状の施文具による刻みが入る。胴部にはRLの縄文が施されている。103は地文がLRの縄文で、上部に沈線の文様が施される胴部片である。

鉢もしくは浅鉢形土器（2・3・34～94・96・99・101・102）

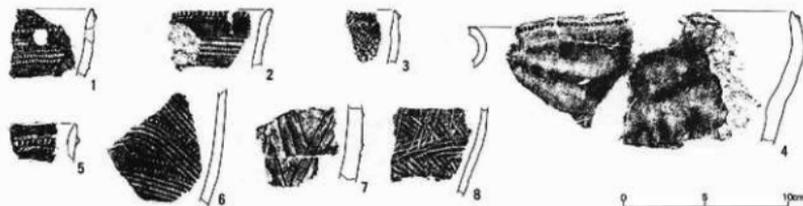
2は小形の無文土器、3は平面が楕円形の浅鉢である。34～56は口唇や口縁に縄線文や縄の刻みなどが施されるものである。34は波状口縁の口唇の平坦部にRの一段無節の原体で施文したもので、波状の頂部の下には一対の貫通孔が穿たれている。縦位の細いLR縄文が施されている35とは同一個体である。36は縦の短い貼り付けを持つ口縁部で、口唇には間隔の狭いLRの縄の押捺、口縁には同じ縄の縄線文が施される。37は口唇に縄の押捺でUとO状に文様を描くもので、左右の割れ面には表面から穿たれた孔の痕跡が2箇所が認められる。RLの縄文が施文された器面の中央には丸い貼り付けの刺落痕がある。38の外へ張り出した口唇には縄線文が施される。39は口唇に貼り付けを持つ口縁で、口唇には縄と棒状施文具による刻みが施される。貼り付け下の割れ面には貫通孔の痕跡がある。40はボタン状の貼り付けを口唇と口縁に付けたもので、口縁にはRLの縄線文が施されている。41・43は縄の押捺で口唇に複雑な文様を施している。42の口唇の貼り付け上の文様は半截した管状の施文具の刺突で描いている。44～50は横環する縄線文を持つもので、44・47の口唇には縄、49の口唇には棒状施文具による刻みが施される。48・49には縦の縄線文も施されている。44～47の地文はRL、48はLRである。51～53は口唇にRLの縄の刻みが施されるもので、地文は同じ原体の縄文である。54～56は棒状の施文具による刻みが口唇に施されるもので、54・56の器面にはRLの縄文が施されている。57～86・90・91は縄文が施されるものである。58・59は異形の土器の口縁と底部である。91は4本の縄線文が施された底部と考えられるものである。87～89・92～99は無文の口縁で、87～89の口唇には刻みが施される。101・102は横走する沈線の施される口縁である。

ミニチュア（95・97・98）

いずれも無文で、器面には手で調整した凹凸が見られる。

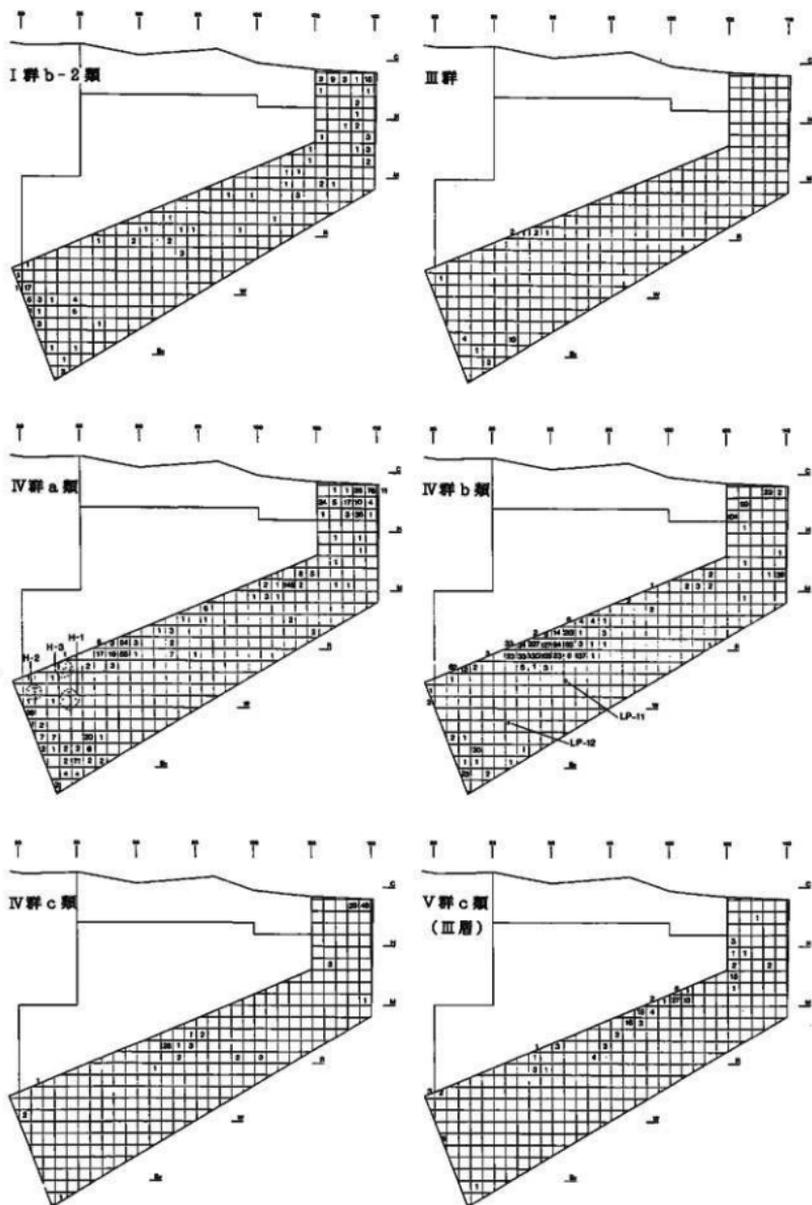
VI群土器（図Ⅲ-32、図版Ⅲ-20）

調査区の中央から少量のVI群が出土した。後北C₂-D式を主体に北大式や天王山式系の特長を持つものも出土している。総点数の4.3%を占める215点が出土した。器形は深鉢形・注口形土器などがある。



図Ⅲ-32 VI群土器

III キウス7遺跡



図III-33 グリッド別土器出土点数(1)

器面の文様は微隆起線文、刺突文、縞縄文などがある。尖り気味の口唇や微隆起線上には間隔が密な刻みが施されるものが多い。

深鉢形と思われる土器（1～4・6～9）

1・2・4は口唇の刻み・微隆起線・三角の刺突・縞縄文が施される口縁で、2の中央には補修孔が穿たれている。3は口唇に刻みが施される口縁で器面には横走る縞縄文が施文されている。6は口縁に沿って付けられた微隆起線上に刻みが施されている。7は三角の刺突と縞縄文が施文される胴部である8は等間隔の微隆起線が施される胴部で北大式と考えられる。9は堅く燃った細い原体による縞糸文風の文様が施文される胴部片である。天王山式系の土器と考えられる。

注口形土器（5）

口縁の直下に刻みの施された微隆起線を持つ小形の注口形土器である。図の右端は焼けて赤化した部分が認められる。

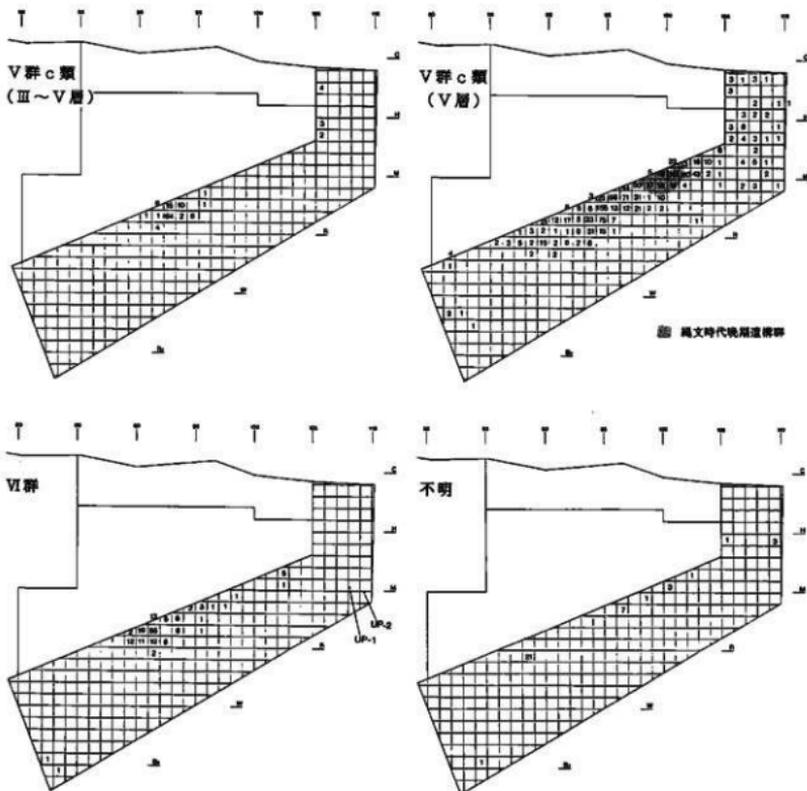
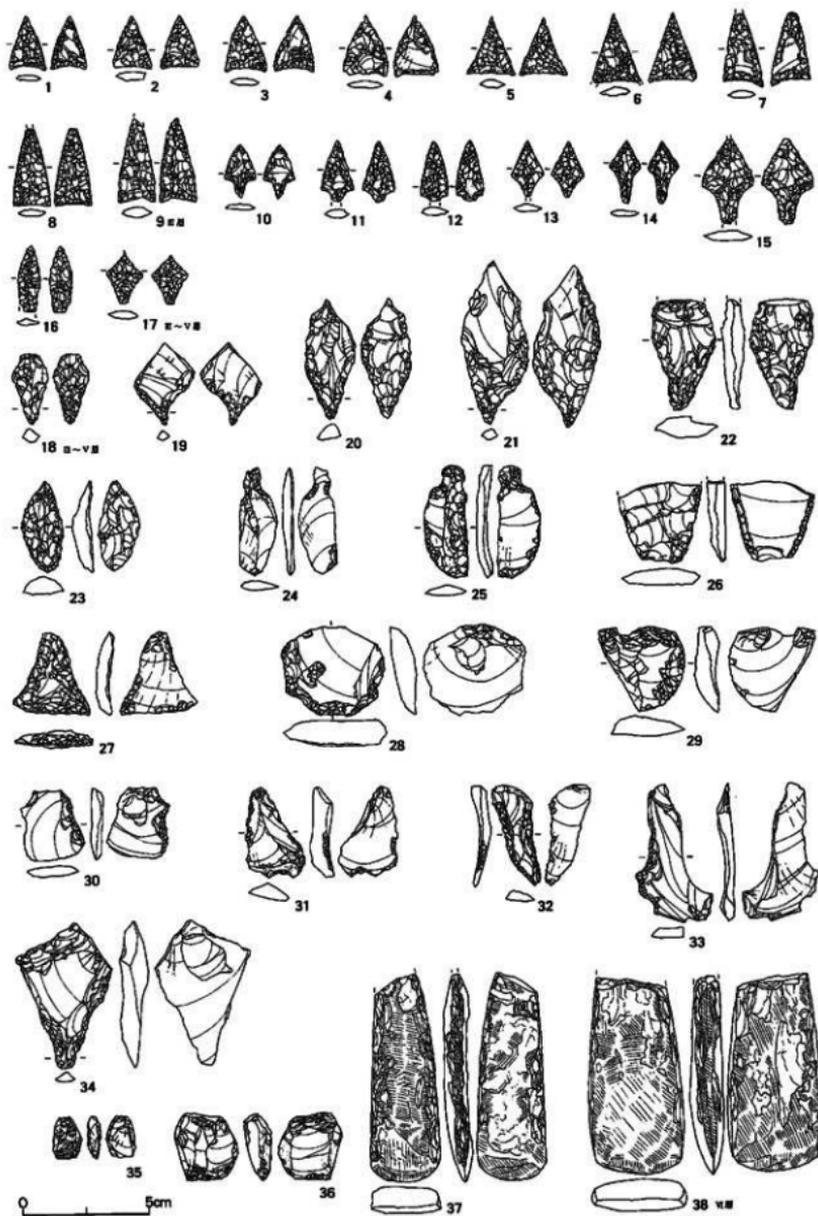


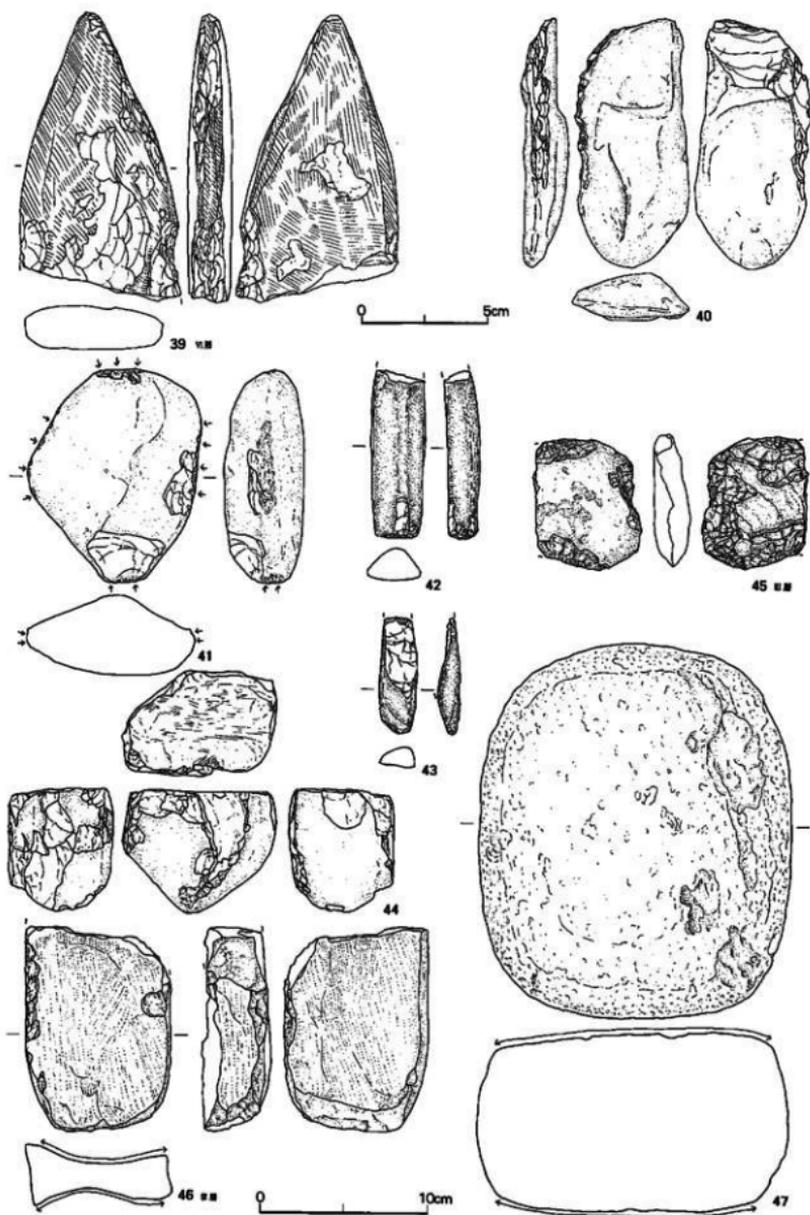
図 縄文時代晩期遺物群

図Ⅲ-34 グリッド別土器出土点数（2）

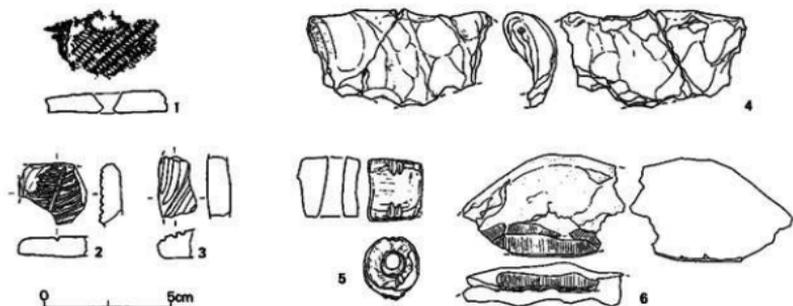
III キウス7遺跡



圖III-35 石器(1)



图Ⅲ-36 石器(2)



図Ⅲ-37 土製品・石製品

(2)石器 (図Ⅲ-35・36)

1～17は石鏃で、1～9は無茎凹基、10～15・17は有茎凸基のものである。16は下端部が欠損しているため尖基か円基か不明。18～21は石鏃。22・23はポイントもしくは両面加工のナイフで、23は折損面から再調整の加工が施されている。24・25はつまみ付きナイフ、26もつまみ部を欠損したナイフであろう。いずれも縦形で、24はつまみ部のみを作出したもの、25・26は片面加工のものである。27～34はスクレイパー類。27は全周に加工が施され、三角形を呈する。28は内彎もしくは鋸歯状の刃部を、29は外彎する刃部を有する。30は錯向剥離による直線状および内彎状の、31は鋸歯状の、33は内彎もしくは挟入りの刃部をそれぞれ有する。32・34は尖頭部を有するもので、後者は丸みをおびている。なお、28・30の2点は両面ボジの剥片を素材としている。35・36は楔形石器。37～39はいずれも打ち欠きによる成形の磨製石斧で、37・38は両刃一曲刃である。40は石材が緑色泥岩であることから石斧の製作途中のものと考えられる。41～43はたたき石で、41は周縁を、42・43は棒状礫の少なくとも一端を使用したものである。44は緑色泥岩の荒割面（上面図）に磨痕があり、一般的ではないがすり石に含めておく。稜には潰打痕が認められ、たたき石としても用いられている。45は礫片もしくは礫石器の破片に二次加工が施されたもので、これ自体破損しているため器種を決めがたい。46は両面を使用した砥石。47は両面を使用した石皿。

(3)土製品・石製品 (図Ⅲ-37)

1はI群b-2類の土器片を利用した有孔の円盤状土製品。2・3はいずれも小破片であるが、前者はオロシガネ状土製品、後者はスタンプ状土製品の一部であろう。4はあたかも土器の口縁部を折り返したような形状であるが、下端が完結していることから焼成粘土塊と考えておきたい。

5は橄欖岩製の管玉で、土壌（P-8もしくは9）の掘り上げ土から出土した。6は蛇紋岩製石器もしくは石製品の破片を再利用したもので、一側縁にわずかであるが平行した磨きの痕跡が認められ、このことから擦り切り具（石鋸）の可能性もある。

参考文献

- 石川 徹・金山哲夫 1970 「縄文文化晩期後半の住居遺跡—千歳市駒屋遺跡の概要—」『北海道考古学』第6輯
- 小柳ヲラコ他 1992 『遺跡1・2遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第6集 北海道文化財研究所
- (財)北海道縄文文化財センター 1982 『千歳市 ママチ遺跡』
- (財)北海道縄文文化財センター 1984・85 「美々2遺跡」『美沢川流域の遺跡調査』
- (財)北海道縄文文化財センター 1985・86 『千歳市 ママチ遺跡Ⅱ』
- (財)北海道縄文文化財センター 1990・91 「美々3遺跡」『美沢川流域の遺跡調査Ⅴ』

表Ⅲ-1 層別遺構数

	I層	Ⅲ層	V層	計
住居跡	0	0	3	3
土壌	0	2	17	19
小ピット	0	0	9	9
Tピット	0	0	1	1
焼土	0	3	17	20
炭化物集中	0	1	0	1
杭跡	2	0	0	2
計	2	6	47	55

表Ⅲ-2 遺構出土遺物数

層位	種別	土器	石器類	自然遺物	計
I層	杭跡	0	0	0	0
Ⅲ層	土壌	76	0	0	76
	焼土	7	0	0	7
	炭化物集中	40	0	0	40
V層	住居跡	4	12	0	16
	土壌	295	876	0	1,171
	小ピット	1	1	0	2
	Tピット	1	1	0	2
	焼土	493	1,065	2	1,560
計		917	1,955	2	2,874

表Ⅲ-3 層別出土遺物数

	土器	石器類	土製品	石製品	計
I層	23	27	0	0	50
Ⅲ層	305	139	0	0	444
Ⅲ～V層	204	30	0	0	234
V層	4,335	1,045	6	2	5,388
VI層	70	65	0	0	135
攪乱等	49	30	0	0	79
計	4,986	1,336	6	2	6,330

表Ⅲ-4 遺構出土遺物一覧

遺構名	層位	種別	点数	備考	遺構名	層位	種別	点数	備考	
UP-1	覆土	土器片	76	VI	LP-17	壇底	土器片	1	IVa	
UF-3	—	土器片	7	IVb		覆土	フレイク・チップ	2		
UC-1	—	土器片	40	VI			礫・礫片	2		
H-1	覆土	土器片	2	Vc		計	5			
	炉跡	フレイク・チップ	2		SP-9	覆土	土器片	1	Vc	
	計	4				フレイク・チップ	1			
H-2	覆土	土器片	1	HP-2出土Ⅲ		計	2			
		フレイク・チップ	1	HP-4出土	TP-1	覆土	土器片	1	Ib-2	
	計	2				フレイク・チップ	1			
H-3	覆土	フレイク・チップ	1			計	2			
		炉跡	土器片	1	IVb	LF-1	—	土器片	1	IVa
			フレイク・チップ	6				フレイク・チップ	34	
			礫・礫片	2				礫・礫片	14	
	計	10			計		49			
LP-1	覆土1	土器片	11	Vc	LF-3	—	土器片	187	Vc	
		Uフレイク	1				石鏃	3		
		フレイク・チップ	1				石錐	1		
計	13		スクレイパー	1						
LP-2	覆土	土器片	14	Vc				Rフレイク	5	
		フレイク・チップ	1					Uフレイク	9	
	計	15					フレイク・チップ	761		
LP-3	覆土1	土器片	1	Vc				礫・礫片	31	
		Rフレイク	1					計	998	
	計	2		LF-4			—	土器片	28	Vc
LP-4	覆土1	土器片	1		Vc			石鏃	1	
		台石	2					Rフレイク	1	
		礫・礫片	1					フレイク・チップ	121	
		計	4					礫・礫片	5	
LP-5	覆土1	土器片	1	Vc		計	156			
LP-6	覆土1	礫・礫片	1		LF-5	—	土器片	2	IVb1, Vc1	
LP-7	覆土1	土器片	2	Vc				フレイク・チップ	5	
LP-8	覆土	土器片	2	Vc				礫・礫片	6	
LP-9	覆土1	土器片	6	Vc		計	13			
		礫・礫片	2		LF-7	—	フレイク・チップ	1		
	計	8		LF-9	—	フレイク・チップ	1			
LP-10	覆土	土器片	94	IVb	LF-10	—	礫・礫片	1		
LP-11	覆土1	土器片	1	IVb	LF-14	—	フレイク・チップ	12		
		覆土2	石皿	1					石皿	1
	計	2						礫・礫片	1	
								計	14	
LP-12	覆土	土器片	156	IVb	LF-15	—	土器片	275	IVa272, IVb3	
		フレイク・チップ	1					フレイク・チップ	26	
		礫・礫片	4					礫・礫片	6	
	計	161					種子殻	1	※オノキョウコブシ	
								計	308	
LP-15	覆土	土器片	3	IVa2, 不明1	LF-16	—	フレイク・チップ	1		
		礫・礫片	856					礫・礫片	9	
	計	859				計	10			
LP-16	覆土1	土器片	1	Vc	LF-17	—	フレイク・チップ	8		
		覆土3	土器片	1			Ib-2		種子	1
	計	2				計	9			

表Ⅲ-5 分類別石器点数

	遺 構							包 含 層							合計	
	H	P	S	T	P	F	C	小計	I	Ⅲ	Ⅲ~V	V	VI	攪乱等		小計
I b-2	0	1	0	1	0	0	0	2	0	11	0	76	34	4	125	127
Ⅲ	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	21	4	0	26	27
Ⅳa	0	3	0	0	0	273	0	276	1	21	4	756	15	5	802	1,078
Ⅳb	1	251	0	0	11	0	263	1	61	21	1,661	8	13	1,765	2,028	
Ⅳc	0	0	0	0	0	0	0	0	16	8	116	0	17	157	157	
Vc	2	39	1	0	216	0	258	19	143	58	1,624	9	7	1,860	2,118	
VI	0	76	0	0	0	40	116	1	52	113	47	0	2	215	331	
不明	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	34	0	1	36	37	
計	4	371	1	1	500	40	917	23	305	204	4,335	70	49	4,986	5,903	

表Ⅲ-6 石器類器種別点数

	遺 構							包 含 層							合計	
	H	P	S	T	P	F	小計	I	Ⅲ	Ⅲ~V	V	VI	攪乱等	小計		
石鏃							4	4		2	1	30	1	2	36	40
石鏃							1	1			1	3			4	5
ポイント・ナイフ										1		4			5	5
つまみ付ナイフ												2	1		3	3
スクレイパー							1	1	1	4	1	35	2		43	44
楔形石器										1		3			4	4
磨製石斧									1	1		4	2		8	8
# 薄片									1		1	8			10	10
たたき石									1	1		20		1	23	23
すり石												3		1	4	4
砥石											1	1			2	2
石皿・台石			3				1	4		1		2			3	7
R礫										2					2	2
Uフレイク			1				9	10	1	2		11	1		15	25
Rフレイク			1				6	7	1	1	2	23	1	1	29	36
フレイク・チップ	10	5	1	1	1	970	987	987	4	23	2	263	27	2	321	1,308
コア									1	1		3			5	5
有意の礫・礫片										3		19	1		23	23
焼礫									1	6		7			14	14
礫・礫片	2	866					73	941	15	89	22	604	29	23	782	1,723
土製品												6			6	6
石製品												2			2	2
計	12	876	1	1	1	1,065	1,965	1,965	27	139	30	1,063	65	30	1,344	3,299

Ⅲ キウス7遺跡

表Ⅲ-7 遺構出土掲載土器一覧

図	番号	出土遺構	分類	層位等	図	番号	出土遺構	分類	層位等
Ⅲ-5	1	UP-1	Ⅵ	覆土	Ⅲ-14	1・2	LP-10	Ⅳb	覆土
	2	UF-3	Ⅳb	焼土中		Ⅲ-15	1	LP-11	Ⅳb
	3	UC-1	Ⅵ	Ⅲ層中	3		LP-12	Ⅳb	壇底・覆土
Ⅲ-7	1	H-2	Ⅲb	HP-2覆土	Ⅲ-16	1	LP-15	Ⅳa	覆土1層
Ⅲ-8	1	H-3	Ⅳb	HF-1覆土		2	LP-16	Vc	覆土1層
Ⅲ-10	2	LP-1	Vc	覆土1層		3	#	I b-2	覆土3層
	3~12	LP-2	Vc	覆土		4	LP-17	Ⅳa	壇底
Ⅲ-11	1	LP-3	Vc	覆土1層	Ⅲ-17	1	TP-1	I b-2	覆土
	2	LP-4	Vc	覆土	Ⅲ-18	1	LF-1	Ⅳa	周辺V層
Ⅲ-12	1	P-5	Vc	覆土1層		2	#	Ⅳa	焼土中
	2・3	LP-7	Vc	覆土1層		3~12	LF-3	Vc	焼土中
Ⅲ-13	1・2	LP-8	Vc	覆土	Ⅲ-19	1~4	LF-4	Vc	焼土中
	3~8	LP-9	Vc	覆土1層	Ⅲ-20	2~6	LF-15	Ⅳa	焼土とその周辺

表Ⅲ-8 遺構出土掲載石器一覧

図	番号	出土遺構	名称	層位等	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石材
Ⅲ-10	1	LP-1	Uフレイク	覆土	2.45×2.67×0.84	3.7	Obs.
Ⅲ-11	3	LP-4	台石	覆土	(24.6) × 21.4 × 11.5	7,050	And.
	4	#	#	#	28.6 × 17.6 × 10.1	7,550	Sa.
Ⅲ-15	2	LP-11	石皿	覆土2層	20.3 × 16.5 × 8.6	3,780	Sa.
Ⅲ-18	13	LF-3	石鏃	焼土中	1.80 × (1.32) × 0.37	0.5	Obs.
	14	#	#	#	(1.38) × 0.97 × 0.14	0.2	#
	15	#	#	#	(1.80) × 1.40 × 0.29	0.4	#
	16	#	石鏃	#	2.53 × (1.19) × 0.32	0.8	#
	17	#	スクレイパー	#	2.62 × 2.80 × 0.85	3.7	#
	18	#	Uフレイク	#	3.48 × 1.21 × 0.90	1.9	#
	19	#	#	#	1.80 × 2.39 × 0.55	1.5	#
	20	#	#	#	2.20 × 1.62 × 0.45	1.3	#
	21	#	#	#	2.60 × 2.16 × 0.56	2.0	#
	22	#	#	#	2.60 × 2.50 × 0.40	1.8	#
	23	#	#	#	2.04 × 2.00 × 0.69	2.6	#
24	#	#	#	2.45 × 2.40 × 0.49	2.3	#	
25	#	#	#	2.70 × 2.50 × 0.90	3.5	#	
Ⅲ-19	5	LF-4	石鏃	焼土	2.65 × 1.41 × 0.90	0.7	Obs.
Ⅲ-20	1	LF-14	石皿	覆土	(8.74) × (12.24) × (7.76)	820	Sa.

表III-9 包含層出土掲載土器一覽(1)

図	番号	分類	出土区	層位	図	番号	分類	出土区	層位	
III-22	1	I b-2	D-109-d	VI	III-26	11	IVb	Y-82-a	V	
	2	"	D-106-d	"		12	"	R-90-a	"	
	3	"	P-101	"		13	"	Q-88-d	"	
	4	"	O-103	"		14	"	R-86	"	
	5	"	Z-87-a	"		15	"	Q-88-d	"	
	6	"	Q-93-c	"		16	"	Q-88-d	"	
	7	"	V-93	"		17	"	O-91-b	"	
	8	"	Q-90-d・V-80-d	"		18	"	Q-86・V-80-d	"	
	9	"	Y-86-b	"		19	"	K-109ほか	"	
	10	"	X-80-d	"		20	"	Z-83-b	"	
	11	"	I-105	"		21	"	Q-88-d・Q-90-b	"	
	12	"	H-108-b	"		22	"	—	—	
	13	"	S-93	"		23	"	Q-88-b	V	
	14	"	W-81-c	"		24	"	R-88-c	"	
	15	"	Q-89-a	"		25	"	P-91-b	"	
	16	"	V-80-d	"		26	"	R-86	"	
	17	III	Q-87-b	V		27	"	R-90	"	
	18	"	Q-86-c	"		28	"	Q-86	"	
	19	"	A ₂ -86-b	"		29	"	R-88	"	
	20	"	Q-93-d	"		III-27	1	IVc	Q-90-d	V
III-23	1	IVa	R-94-bほか	I			2	"	O-95-a	"
	2	"	Y-82-d	V			3	"	J-107	"
	3	"	P-91-a	"			4	"	I-106-c	"
	4	"	R-93	"			5	"	S-94	I
	5	"	R-87	"			6	"	D-108	V
	6	"	B ₂ -84-a	"			7	"	P-92-d	"
	7	"	A ₂ -86-b	"			8	"	P-92-d	"
	8	"	Q-88-b	"			9	"	P-92-d	"
	9	"	R-87-d	"			10	"	L-109	"
	10	"	C ₂ -82-c	"	11		"	S-81	"	
	11	"	Z-82-c	"	12		"	D-109-d	"	
12	"	E-107-b	"	III-28	1	Vc	I-105	III		
13	"	K-102	"		2	"	K-100	"		
14	"	F-108-c	"		3	"	J-105	"		
15	"	R-87・88	"		4	"	N-97	"		
16	"	Q-88-b	"		5	"	N-96	"		
17	"	R-86・88-a	"		6	"	J-105	"		
18	"	E-108	"		7	"	M-97	"		
19	"	E-107	"		8	"	O-93-b	III~V		
20	"	R-88	"		9	"	E-105-b	"		
III-24	1	IVb	P-91-b	V	III-29	1	Vc	L-100-d	V	
	2	"	R-88-a	"		2	"	L-100-a・d	"	
	3	"	R-88-c	"		3	"	L-100-d	"	
	4	"	Q-87	"	III-30	4	Vc	N-95・96	V	
	5	"	Q-91-b	"		5	"	O-93・94	"	
	6	"	P-89-d	"		6	"	R-89-a	"	
7	IVb	R-88-d	V	7		"	O-92-b	"		
8	"	Q-89-c・Q-90-b	"	8		"	N-94-b	"		
9	"	Q-88-d	"	9		"	N-95	"		
10	"	Q-89-b	"	10		"	N-95-a	"		

表III-10 包含層出土掲載土器一覽(2)

図	番号	分類	出土区	層位	図	番号	分類	出土区	層位	
III-30	11	Vc	O-92-b	V	III-31	62	Vc	O-96-b	V	
	12	#	N-95-c	#		63	#	P-93-c	#	
	13	#	Q-89-d	#		64	#	R-93-a	#	
	14	#	O-95-d	#		65	#	Q-94	#	
	15	#	N-97-a	#		66	#	L-103	#	
	16	#	E-106-a・b	攪乱		67	#	M-97-d	#	
	17	#	P-94-c	V		68	#	N-95-b	#	
	18	#	P-94	#		69	#	M-97-d	#	
	19	#	O・P-91-c	#		70	#	L-102-d	#	
	20	#	N-97-b	#		71	#	M-96-c	#	
	21	#	R-91	#		72	#	L-101-d	#	
	22	#	O-97-a	#		73	#	O-98	#	
	23	#	N-99-c	#		74	#	P-94-d	#	
	24	#	L-98-c	#		75	#	M-96	#	
	25	#	N-96-b	#		76	#	M-98-d	#	
	26	#	N-95-d	#		77	#	R-91-b	#	
	27	#	Q-94-d	#		78	#	-	-	
	28	#	N-96-a	#		79	#	M-98-a	#	
	29	#	S-82	#		80	#	N-99	#	
	30	#	K-102	#		81	#	M-100	#	
	31	#	P-94-c	#		82	#	O-92-b	#	
	32	#	L-100-d	#		83	#	N-96-a	#	
	33	#	L-101-b	#		84	#	P-94-a	#	
	34	#	L-100-d	#		85	#	L-99-c	#	
	35	#	L-100-d	#		86	#	O-97-a	#	
	36	#	K-103-a	#		87	#	N-96-d	#	
	37	#	M-96-c	#		88	#	R-86	#	
	38	#	M-98-d	#		89	#	O-94・96	#	
	39	#	N-95	#		90	#	N-96-d	#	
	40	#	Q-93-d	#		91	#	N-93-a	#	
	41	#	M-98-a	#		92	#	O-97-a	#	
	42	#	M-97-d	#		93	#	M-97-c	#	
	43	#	M-99-c	#		94	#	I-106-c	#	
	44	#	O-92-b	#		95	#	L-101	#	
	45	#	N-96-b	#		96	#	M-96-b	#	
	46	#	N-96-b	#		97	#	R-91	#	
	47	#	L-100-a	#		98	#	E-105-b	#	
	48	#	N-95-b	#		99	#	M-98-d	#	
	49	#	M-99-b	#		100	#	O-94-d	#	
	50	#	N-95-b	#		101	#	K-103-b	#	
	51	#	N-95-b	#		102	#	P-94-b	#	
	52	#	N-96-a	#		103	#	O-92-c・93-a・95-a	#	
	53	#	P-94-c・Q-94	#		III-32	1	VI	O-93	III
	54	#	M-100	#		2	#	Q-90	#	
	55	#	R-91-b	#		3	#	P-91	#	
	56	#	Q-93-c	#		4	#	P-90	#	
	III-31	57	#	L-100		V	5	#	P-91	#
		58	#	L-100-d		#	6	#	K-102	#
		59	#	L-100-a		#	7	#	Q-92・93	#
		60	#	O-96-a		#	8	#	N-95	#
		61	#	O-97-a		#				

表III-11 包含層出土掲載石器・土製品・石製品一覧

図	番号	名称	出土区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材
III-35	1	石 鏃	J-103	V	2.10×1.43×0.22	0.5	Obs.
	2	"	Q-90-d	V	2.08×1.57×0.34	0.8	"
	3	"	E-109-a	V	2.20×1.62×0.30	0.8	"
	4	"	A ₂ -86-b	V	2.41×1.75×0.30	1.8	"
	5	"	J-106-b	V	2.27×1.94×0.31	0.7	"
	6	"	A ₂ -84-b	V	(2.71) × (1.92) × 0.36	1.0	"
	7	"	P-93-d	V	(2.88) × 1.59×0.29	1.2	Che.
	8	"	D-109-a	V	(3.05) × 1.46×0.29	1.1	Obs.
	9	"	F-109-b	III	(3.30) × 1.48×0.40	1.7	"
	10	"	E-107-d	V	2.10×1.28×0.25	0.4	"
	11	"	N-98-b	V	(2.40) × 1.30×0.33	0.8	"
	12	"	E-108-c	V	(2.38) × 1.05×0.33	0.8	"
	13	"	F-109-c	V	(2.21) × 1.29×0.30	0.5	"
	14	"	Y-81-b	V	2.50×1.25×0.25	0.5	"
	15	"	Q-88-c	V	(3.40) × 2.09×0.42	2.1	"
	16	"	R-93-a	V	(2.61) × 0.88×0.29	0.4	"
	17	"	U-79-d	III~V	1.94×1.43×0.36	0.6	"
	18	石 鏃	Q-88-d	III~V	2.76×1.40×0.71	2.8	Che.
	19	"	Q-88-d	V	3.29×2.40×0.71	4.4	"
	20	"	B ₂ -84-a	V	4.75×1.98×0.99	7.2	Obs.
	21	"	Q-87-c	V	6.50×2.68×1.35	16.2	Sh.
	22	ポイント・ナイフ	T-81-a	V	(4.39) × 2.52×0.90	7.6	Obs.
	23	"	X-80-a	V	3.60×1.15×0.80	3.3	"
	24	つまみ付ナイフ	P-95-b	V	4.28×1.49×0.43	1.8	"
	25	"	Z-85-b	VI	4.45×1.72×0.63	3.8	"
	26	"	L-102-c	V	(3.20) × (3.30) × 0.70	7.9	Sh.
	27	スクレイパー	L-102-c	V	3.30×3.07×0.70	4.0	Obs.
	28	"	O-96-b	V	3.60×4.07×1.03	14.0	"
	29	"	Q-89-c	V	3.35×3.40×1.00	8.2	Sh.
	30	"	L-99-c	V	2.86×2.48×0.50	3.3	Obs.
	31	"	A ₂ -86-b	V	3.62×2.34×0.94	5.0	"
	32	"	G-108-b	V	4.07×1.80×0.79	2.6	"
	33	"	L-99-c	V	3.70×5.24×0.60	5.6	"
	34	"	L-100-b	V	5.34×4.02×1.10	16.6	"
	35	楔形石器	B ₂ -82-d	V	1.69×1.14×0.50	0.9	"
	36	"	L-99-d	V	2.69×2.53×1.05	6.5	"
37	磨製石斧	N-100-d	V	(8.30) × 2.76×1.05	33.6	Gr-Mud.	
38	"	W-80-d	VI	(7.90) × 3.73×1.31	67.5	Sch.	
III-36	39	"	W-86-b	VI	(11.40) × 6.47×1.74	196.0	Gr-Mud.
	40	"	H-109-c	V	9.90×4.60×1.90	96.6	"
	41	たたき石	M-99-b	V	12.65×10.26×4.82	771	Sa.
	42	"	R-93-d	V	(6.84) × 2.25×1.29	27.2	Sch.
	43	"	D-106-d	V	(9.90) × 3.26×2.20	106.9	Mud.
	44	すり石	O-99-a	V	7.33×9.12×6.21	612	Gr-Mud.
	45	R 礫	T-80-d	III	7.66× (6.29) × 2.05	124.3	Sa.
	46	砥石	S-81-c	III	(12.27) × 8.58×4.10	433.7	"
	47	石 皿	P-88-c	V	22.4×18.5×10.9	7720	And.
III-37	1	土製品	C ₂ -82-d	V	(2.79) × (4.91) × 0.87	11.3	—
	2	"	X-84-c	V	(2.43) × (2.67) × (0.86)	4.9	—
	3	"	Q-88-b	V	(2.40) × (1.05) × (1.04)	3.3	—
	4	"	O-96-a	V	7.49× (3.75) × 1.07	36.3	—
	5	石製品	M-98-c	V	2.43×2.16×1.00	19.7	Per.
	6	"	D-105-d	V	4.29× (6.32) × 1.44	34.8	Ser.

写 真 図 版

Ⅱ オサットー1遺跡……図版Ⅱ-1~8

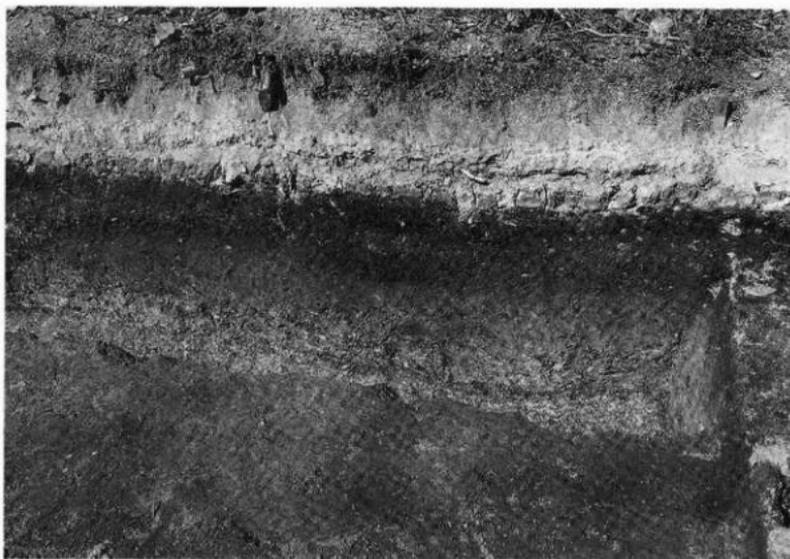
Ⅲ キウス7遺跡……図版Ⅲ-1~22

図版II-1



1. Ⅲ層上面調査状況

SW→



2. 土層断面

S→

図版Ⅱ-2



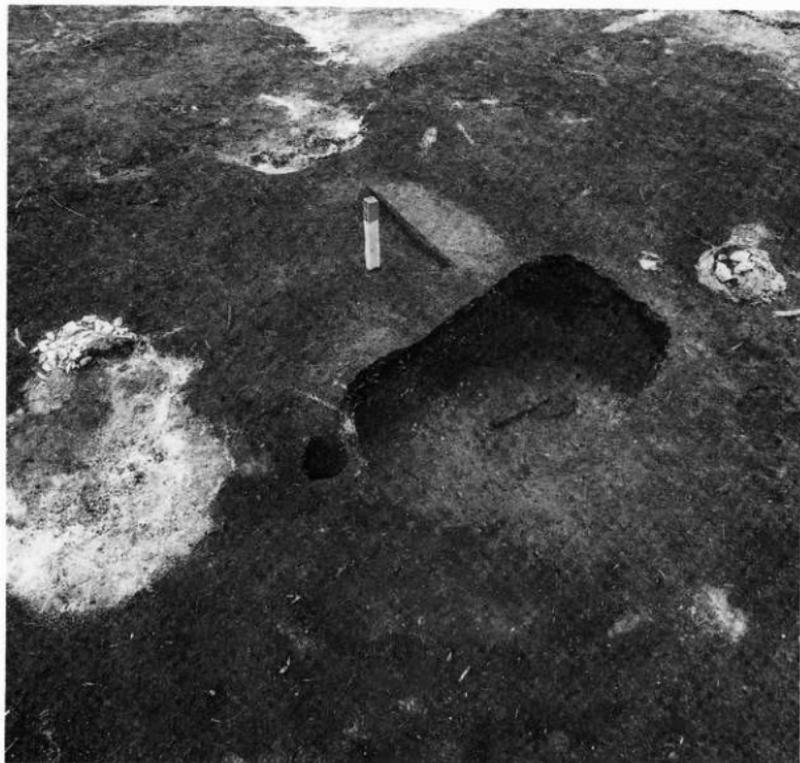
1. P-1 検出状況

S→



2. P-1キセル

S→



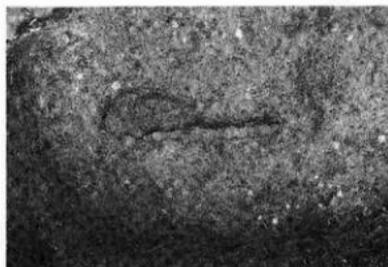
3. P-2 発掘

NE→



1. P-2完掘

W→



2. 坑底刀子出土状況

N→



3. P-2鉄鍋・石器出土状況

N→



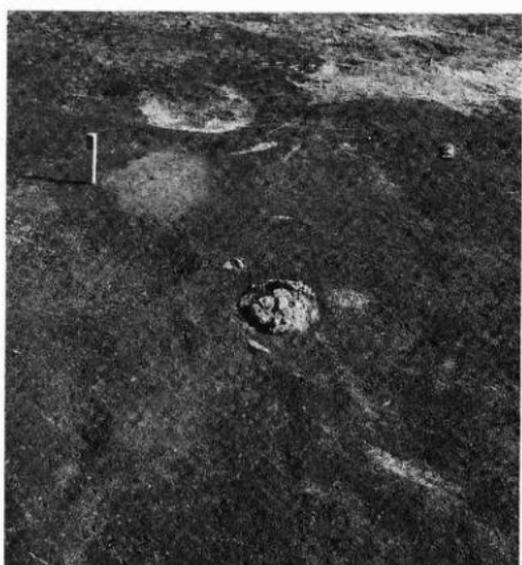
4. P-2集石

S→



5. 鉄斧出土状況

E→



6. P-2調査前状況

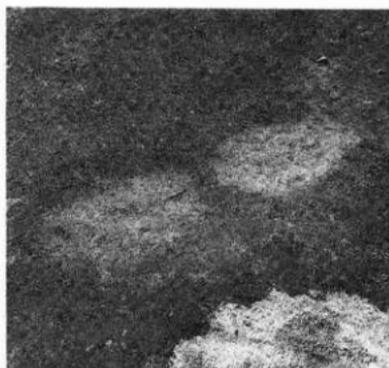
N→

図版II-4



1. F-4

S→



2. F-6・7

S→



3. V層遺物出土状況

N→



4. 石斧出土状況

S→



5. 貝皮出土状況

E→



1. Ⅲ層上面地割れ検出状況

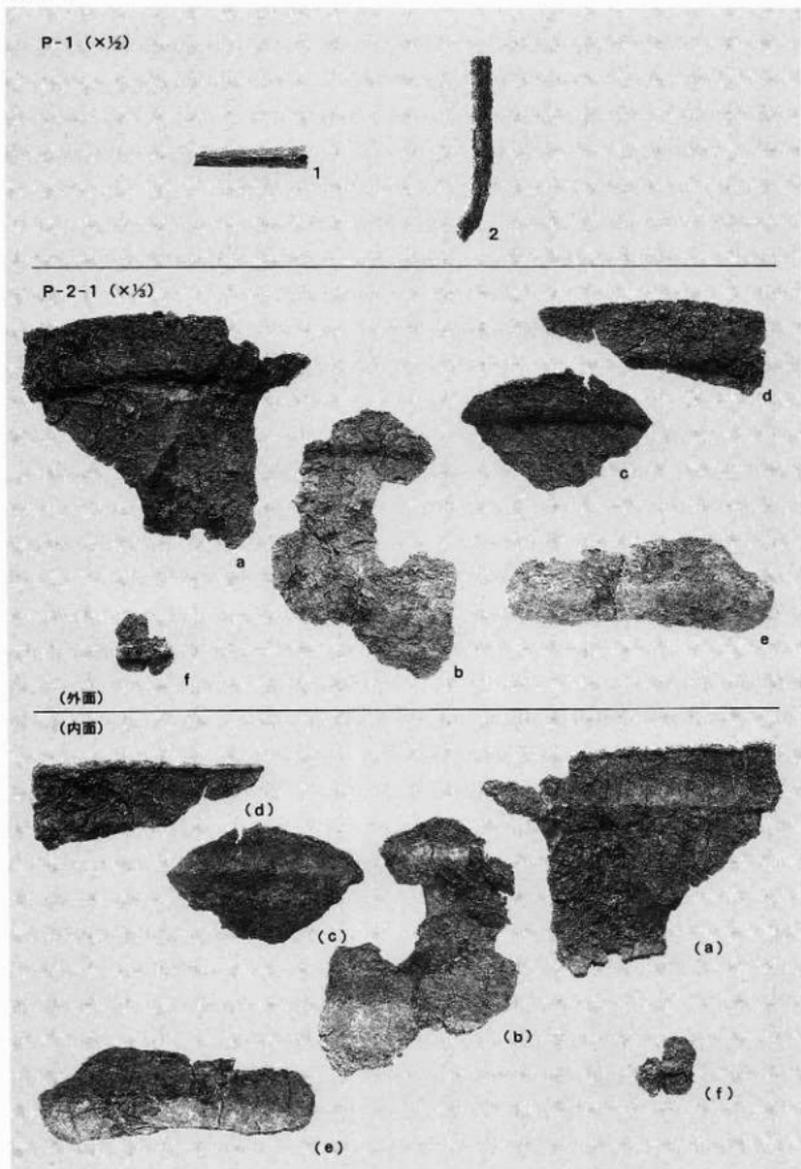
S→



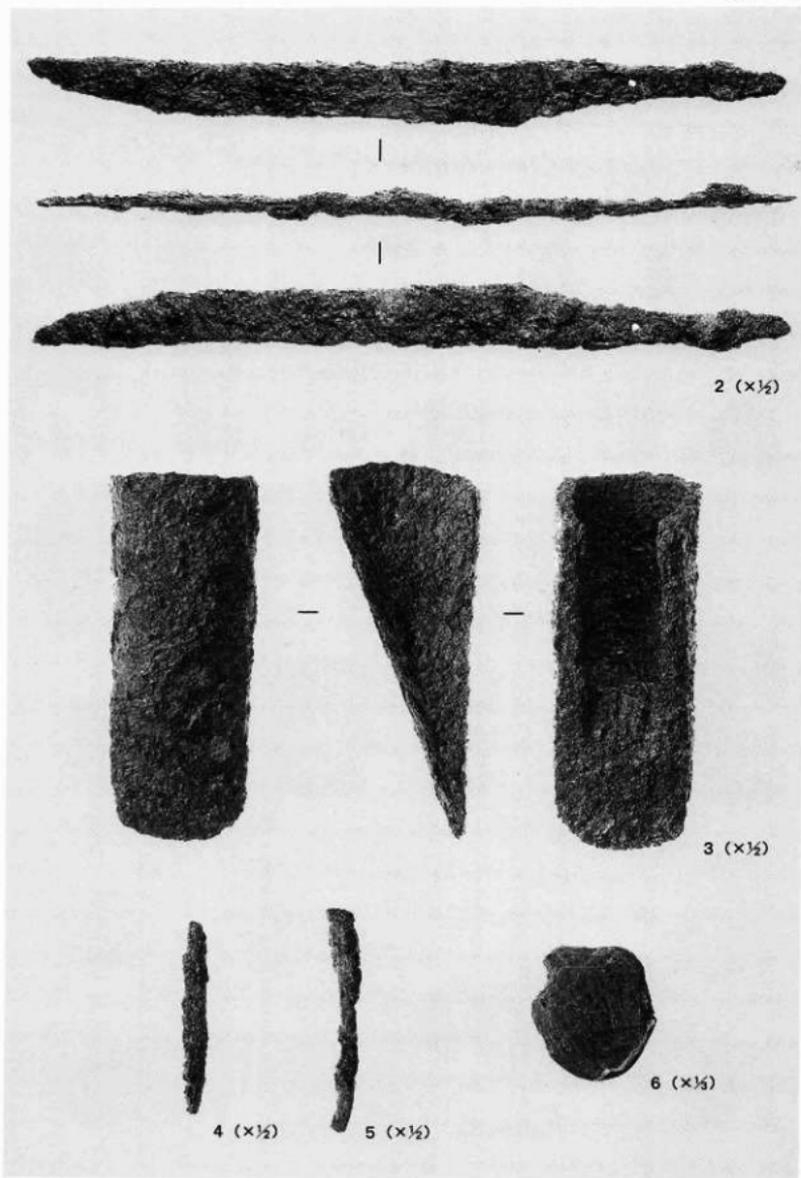
2. V層調査状況

SE→

図版II-6

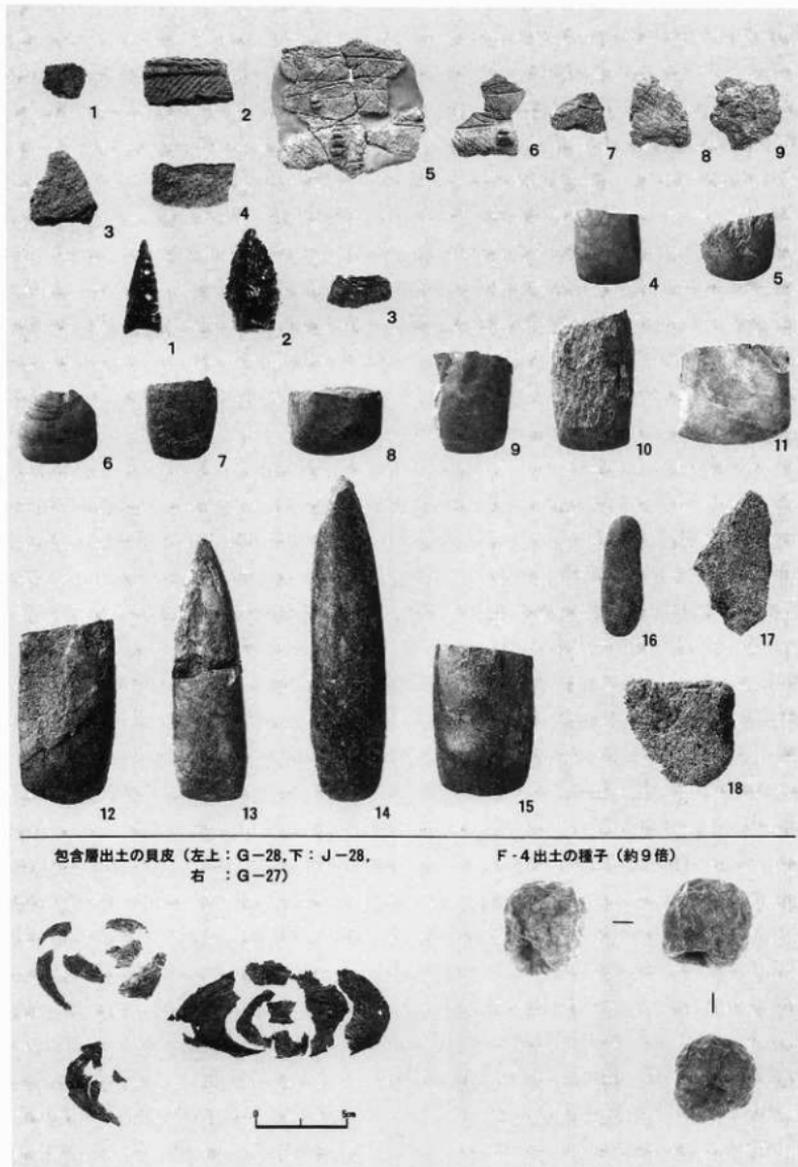


1. 遺構出土の金属製品(1)



1. 遺構出土の金属製品(2)・石器

図版II-8



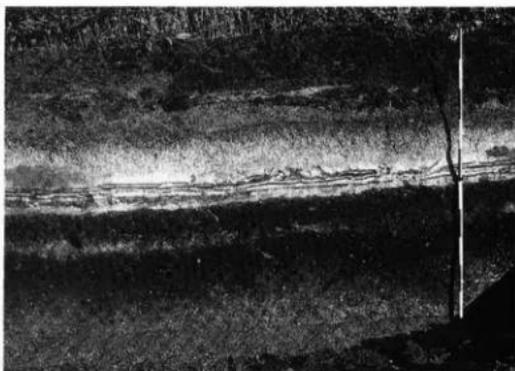
1. 土器・石器・自然遺物

図版Ⅲ-1

1. 調査前全景 E→



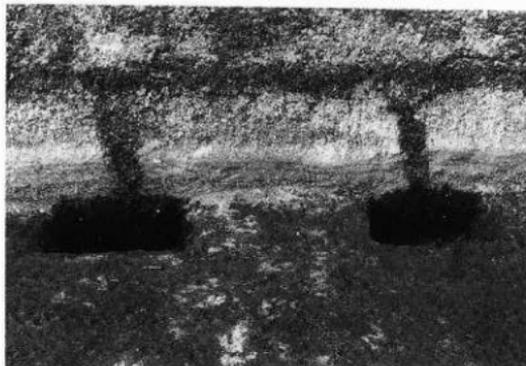
2. 標準土層断面 S→



3. 耕作土及び盛土除去
作業状況 SW→



図版 III-2



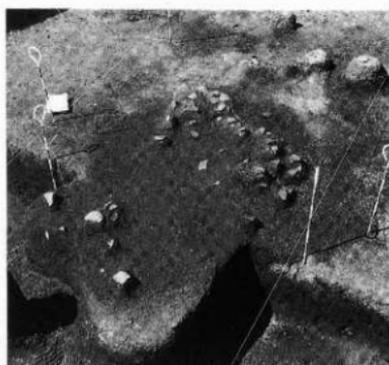
1. 杭跡検出状況

S→



2. III層調査状況

S→



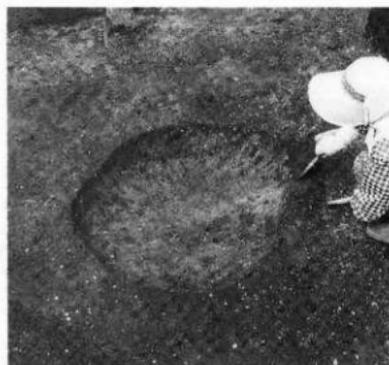
3. UP-1遺物出土状況

S→



4. UP-1完掘

S→



5. UP-2完掘

SW→



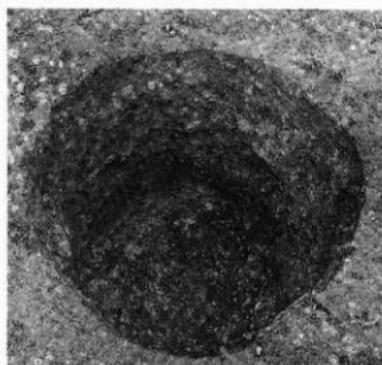
1. H-1完掘

E→



2. HP-3セクション

N→



3. HP-3完掘

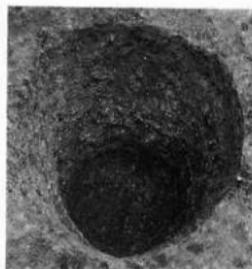
E→

図版Ⅲ-4



1. H-2完掘

S→



2. HP-2完掘 NW→

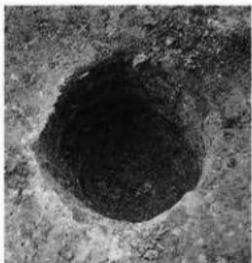


3. HP-10セクション S→

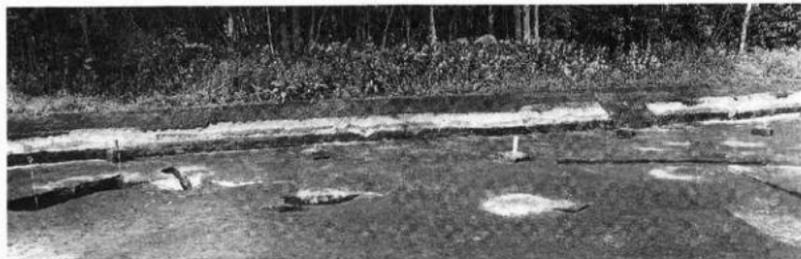


4. H-3完掘

S→



5. HP-1完掘 W→



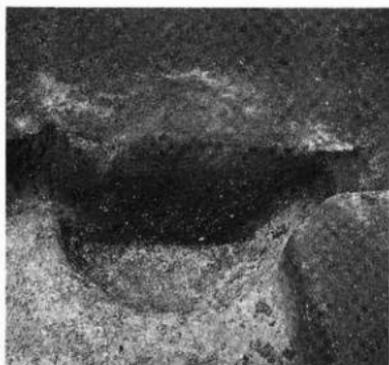
1. 縄文時代晩期遺構群確認状況

SW→



2. 縄文時代晩期遺構群完掘

SW→



3. LP-9セクション

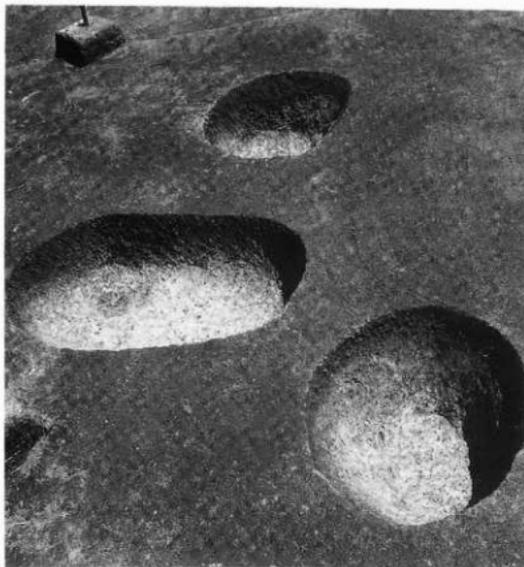
S→



4. 晩期遺構群調査状況

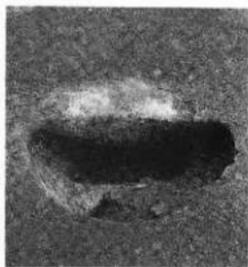
SW→

図版III-6

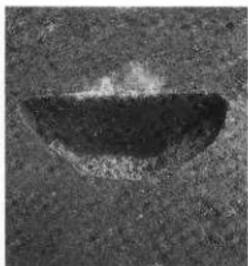


1. LP-1~3完掘

W→



2. LP-1セクション W→

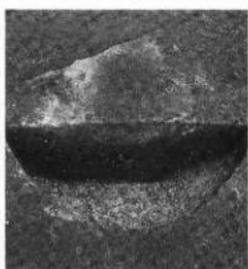


3. LP-2セクション S→

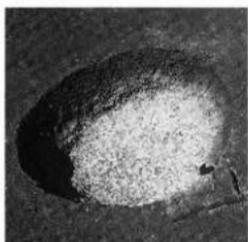


4. LP-1~3調査状況

S→



5. LP-5セクション SW→



6. LP-6完掘

S→



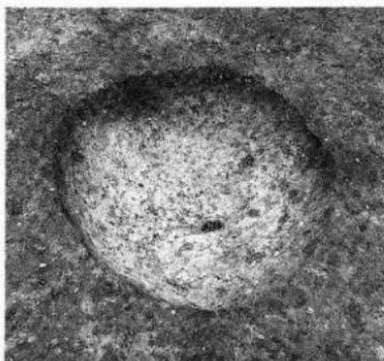
7. LP-6セクション W→



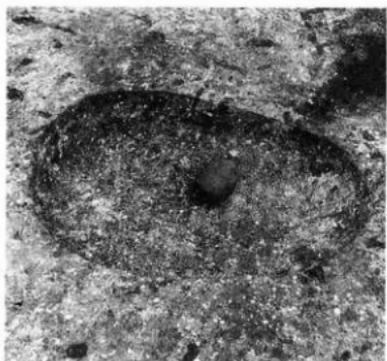
8. LP-8遺物出土状況 S→



1. LP-10遺物出土状況 E→



2. LP-10完掘 W→



3. LP-11完掘 S→



4. LP-12完掘 E→



5. LP-17・SP-4完掘 NW→



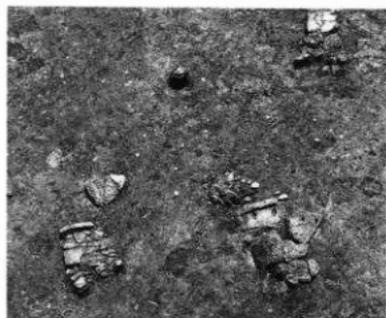
6. TP-1完掘 W→

図版Ⅲ-8



1. LF-1

SW→



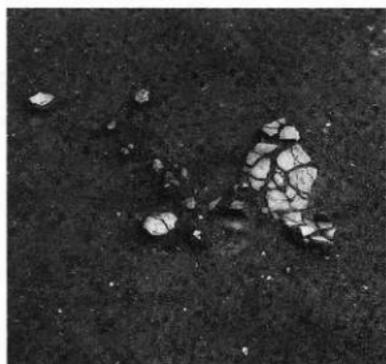
2. LF-15

W→



3. LC-1

S→



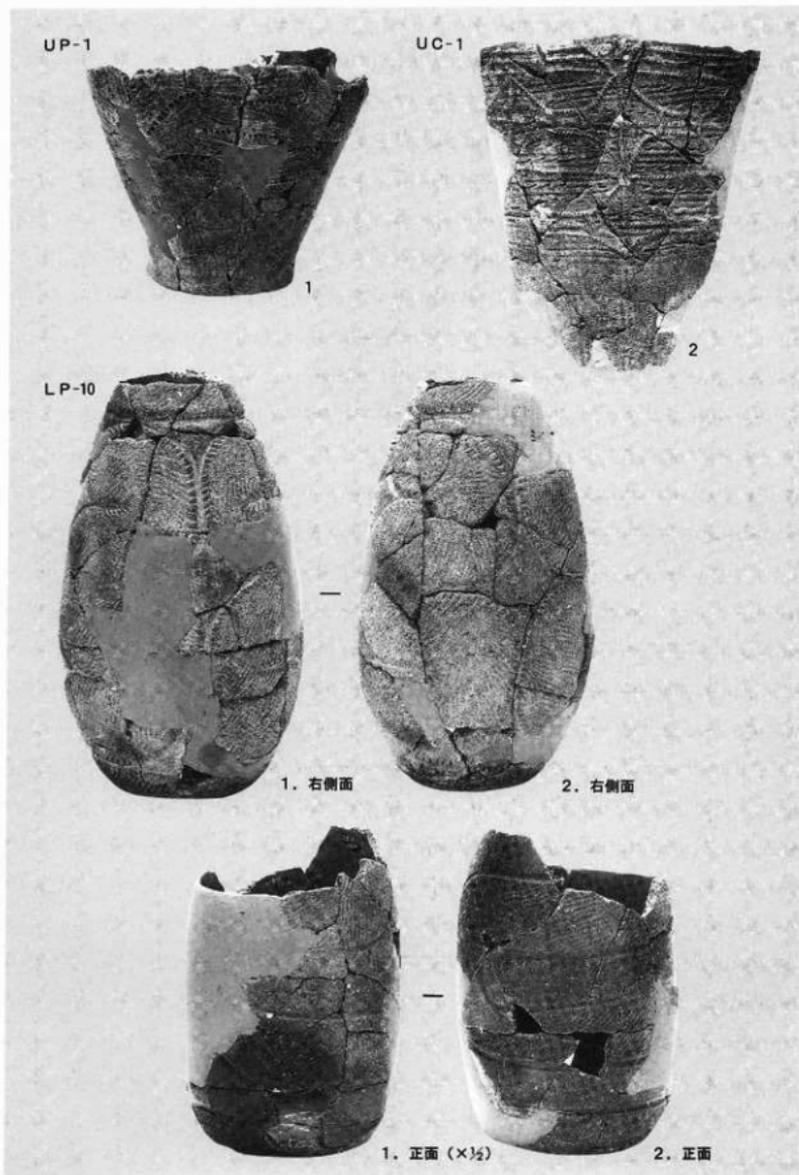
4. IV群b類出土状況

SW→



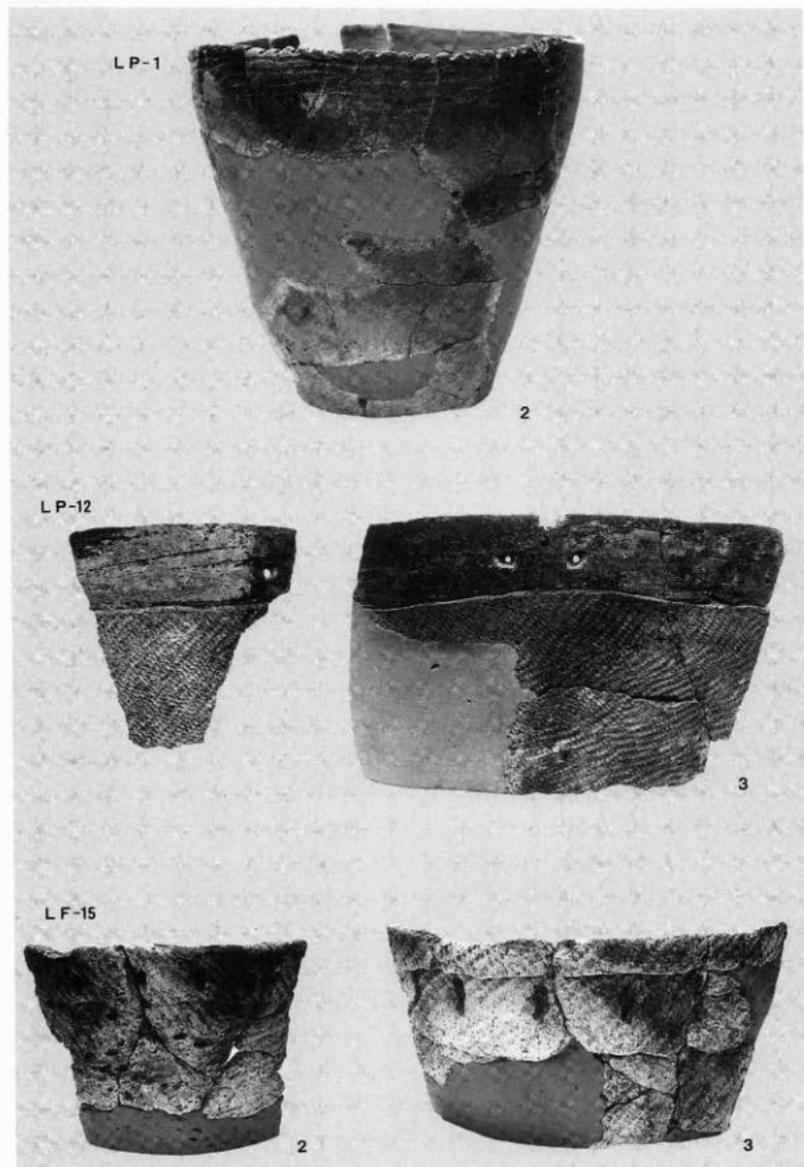
5. V群c類土器出土状況及びV層調査状況

SE→

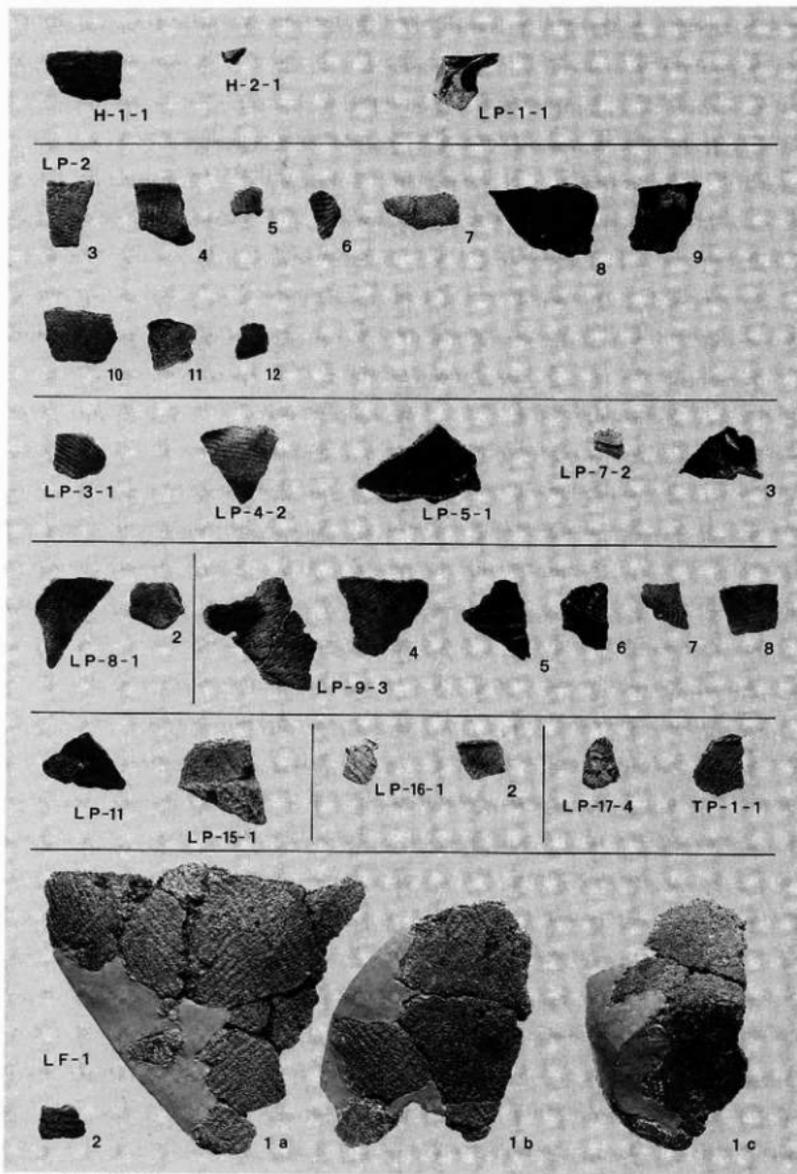


1. 遺構の遺物(1) (サイズの記載がないものは全て1/3)

図版III-10

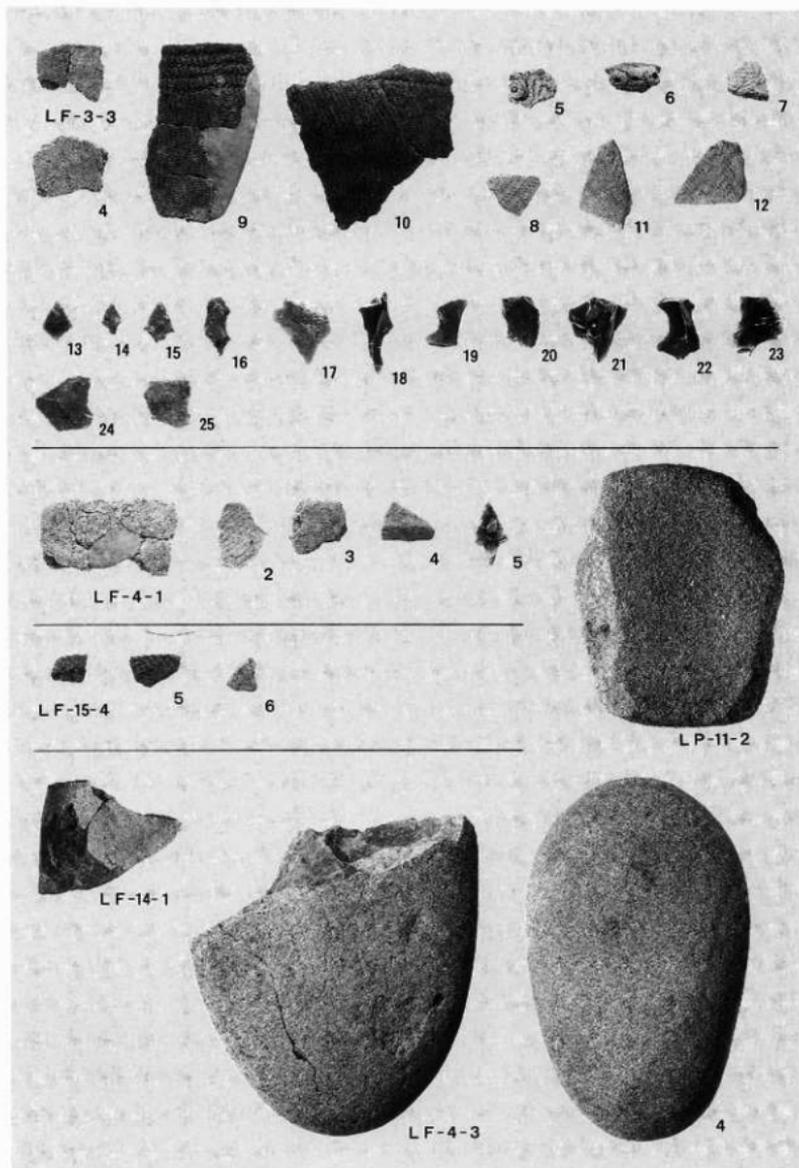


1. 遺構 遺物(2) (サイズは全て $\frac{1}{3}$)

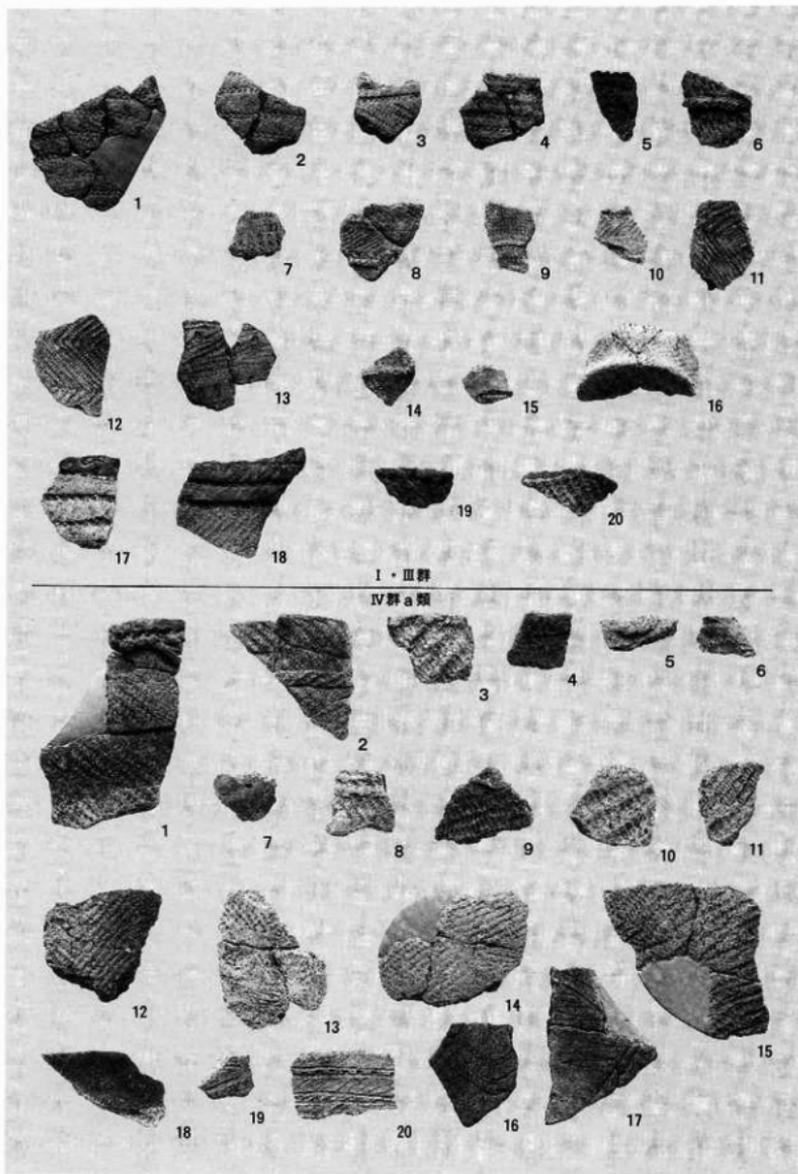


1. 遺構の遺物③ (サイズの記載がないものは全て1/3)

図版III-12

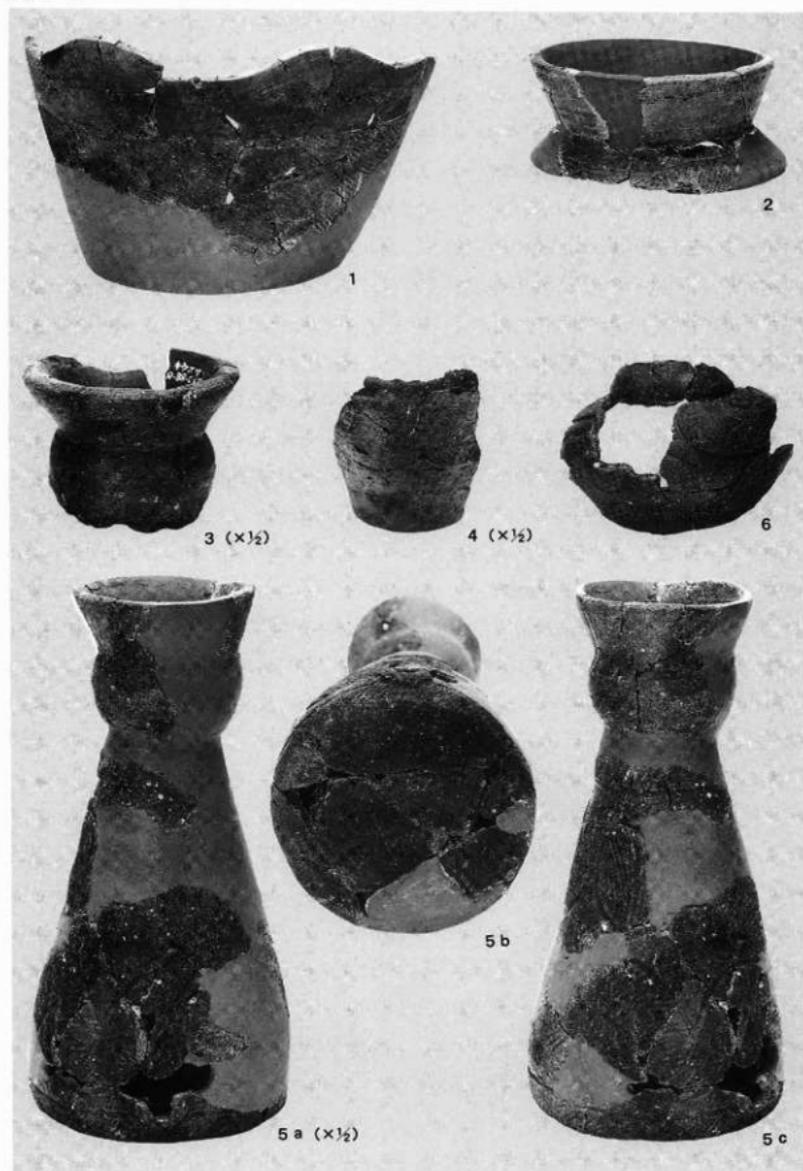


1. 遺構の遺物(4) (サイズは土器が $\frac{1}{3}$ 、剥片石器が $\frac{1}{2}$ 、礫石器が $\frac{1}{4}$)

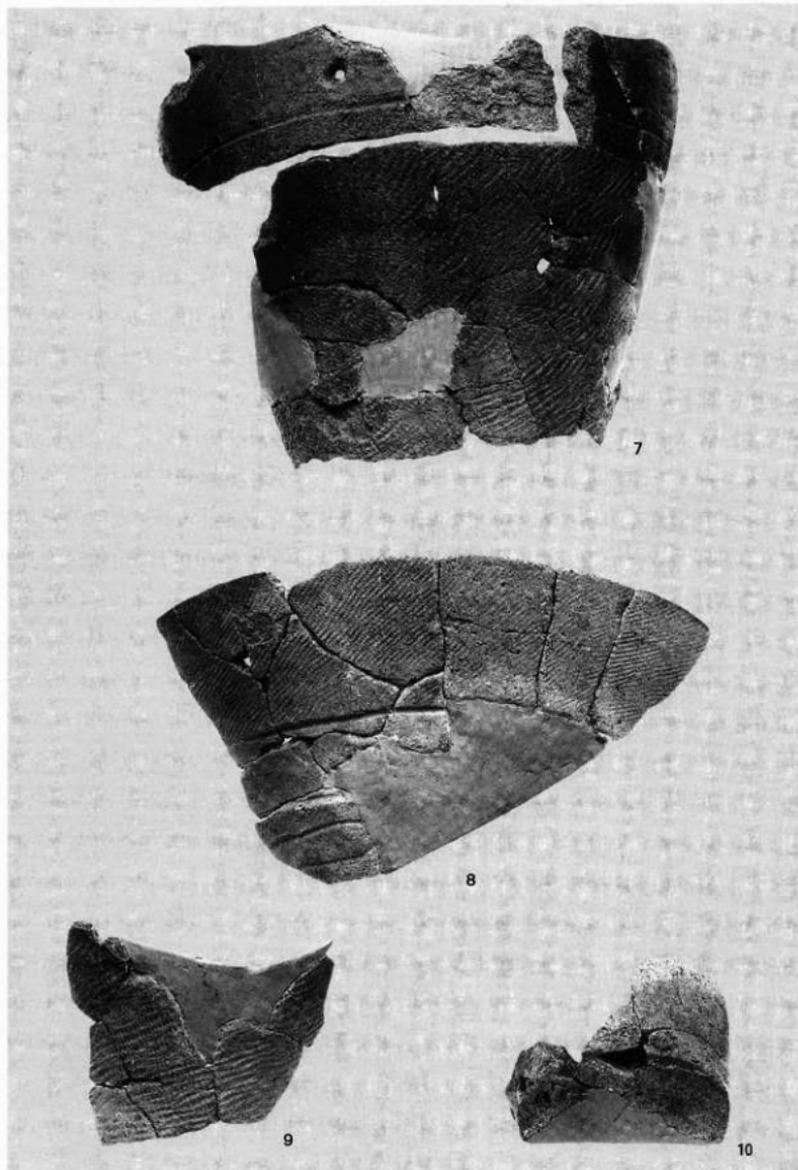


1. I群b-2類、皿群、IV群a類土器（サイズは全て $\frac{1}{2}$ ）

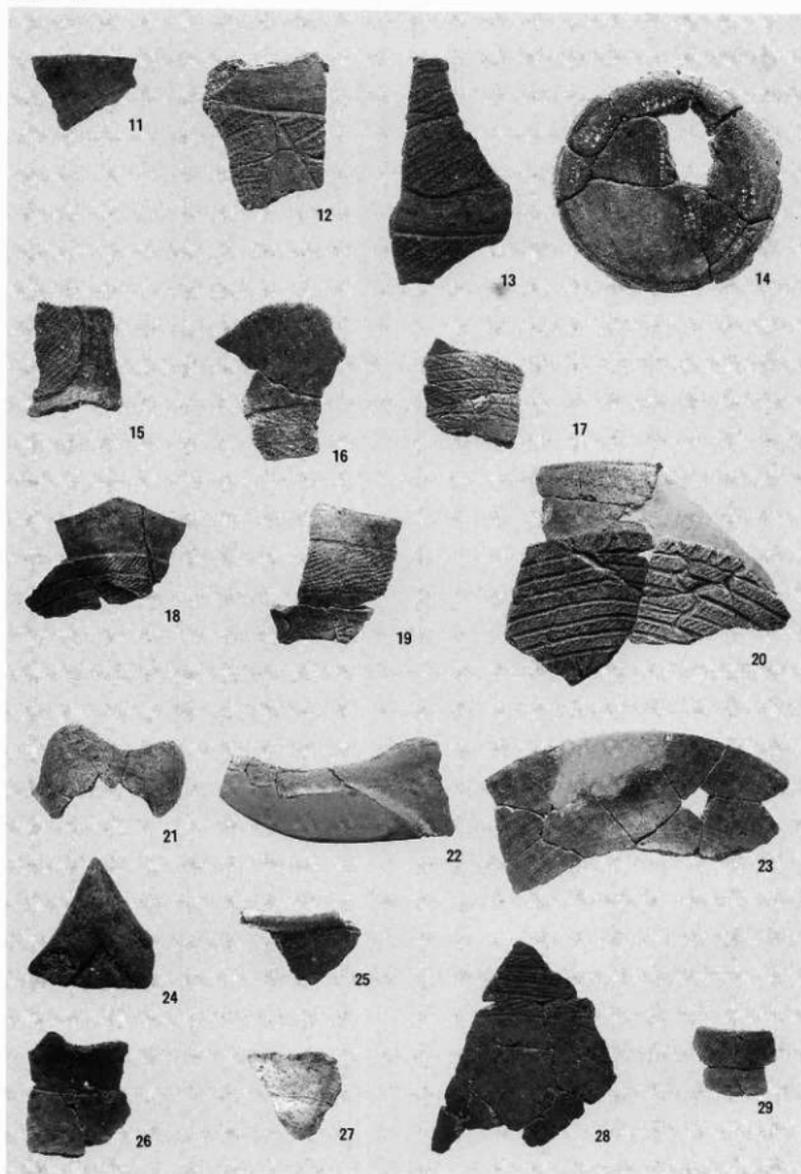
図版III-14



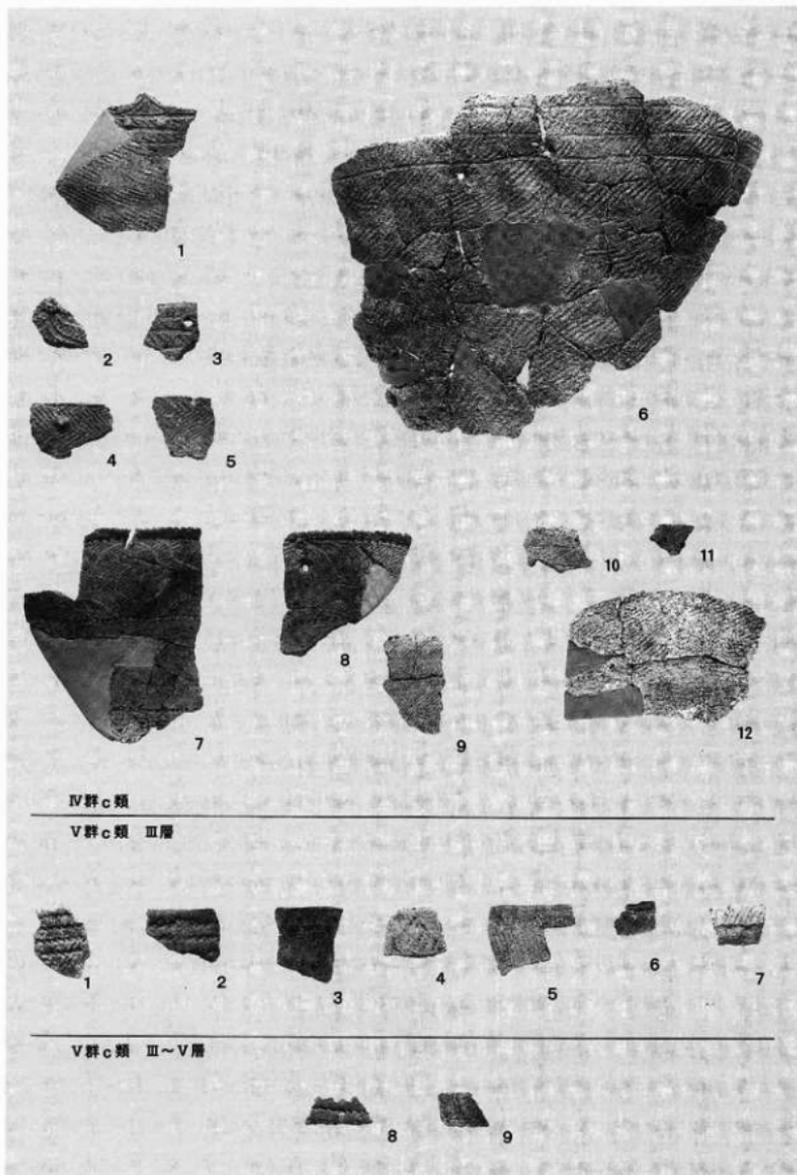
1. IV群b類土器(1) (サイズは記載がないものは全て1/5)



1. IV群b類土器(2) (サイズは全て1/4)

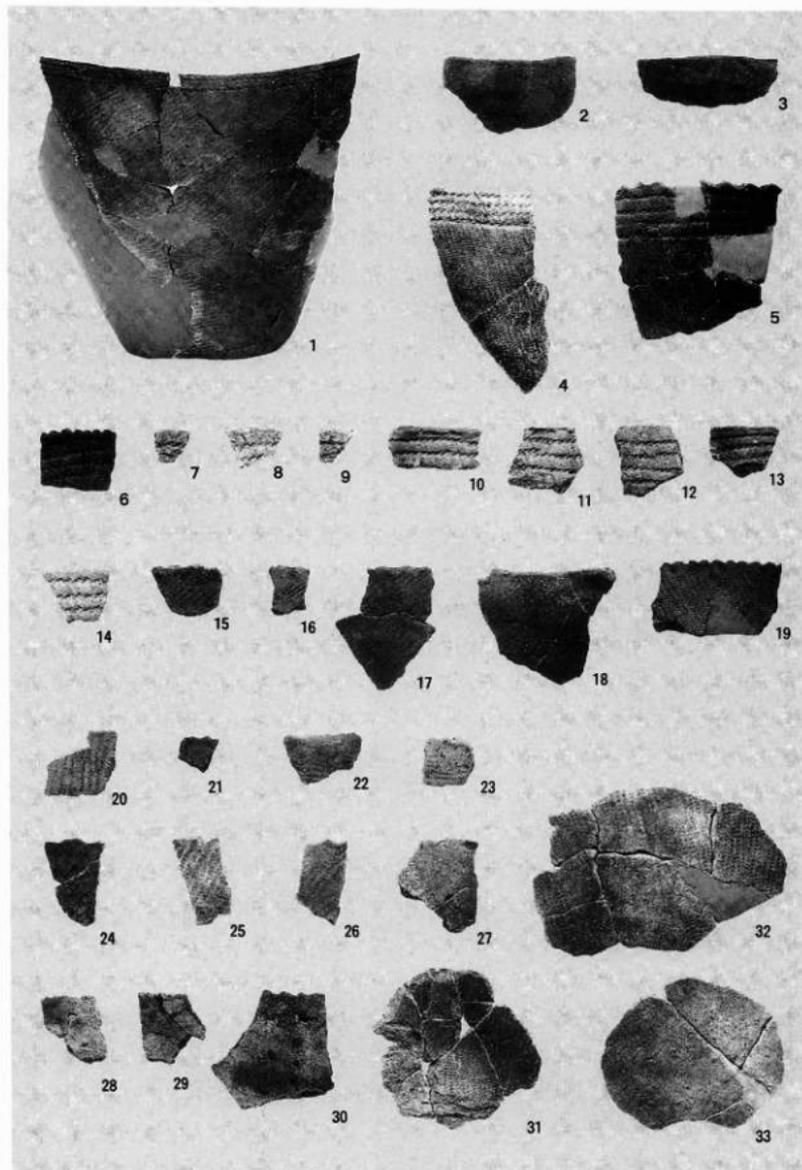


1. IV群b類土器(3)

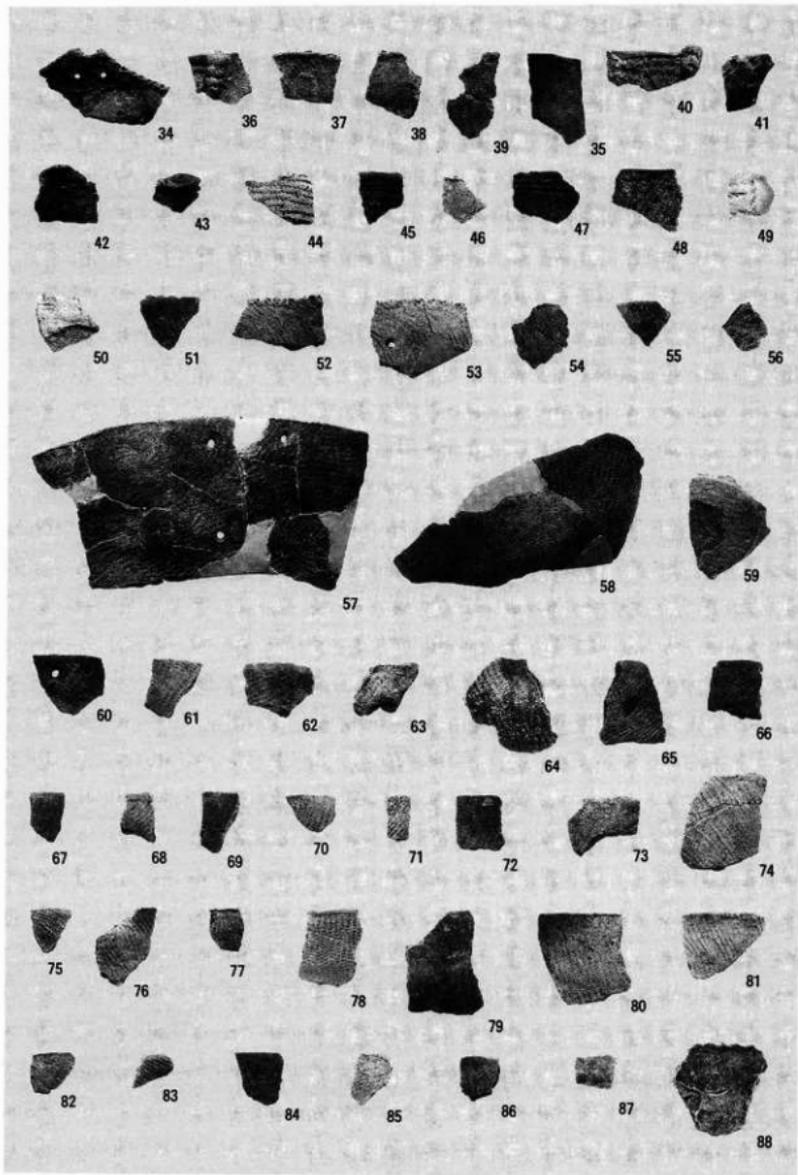


1. IV群c類、V群c類(II・III~V層出土)土器(サイズは全て1/5)

図版III-18

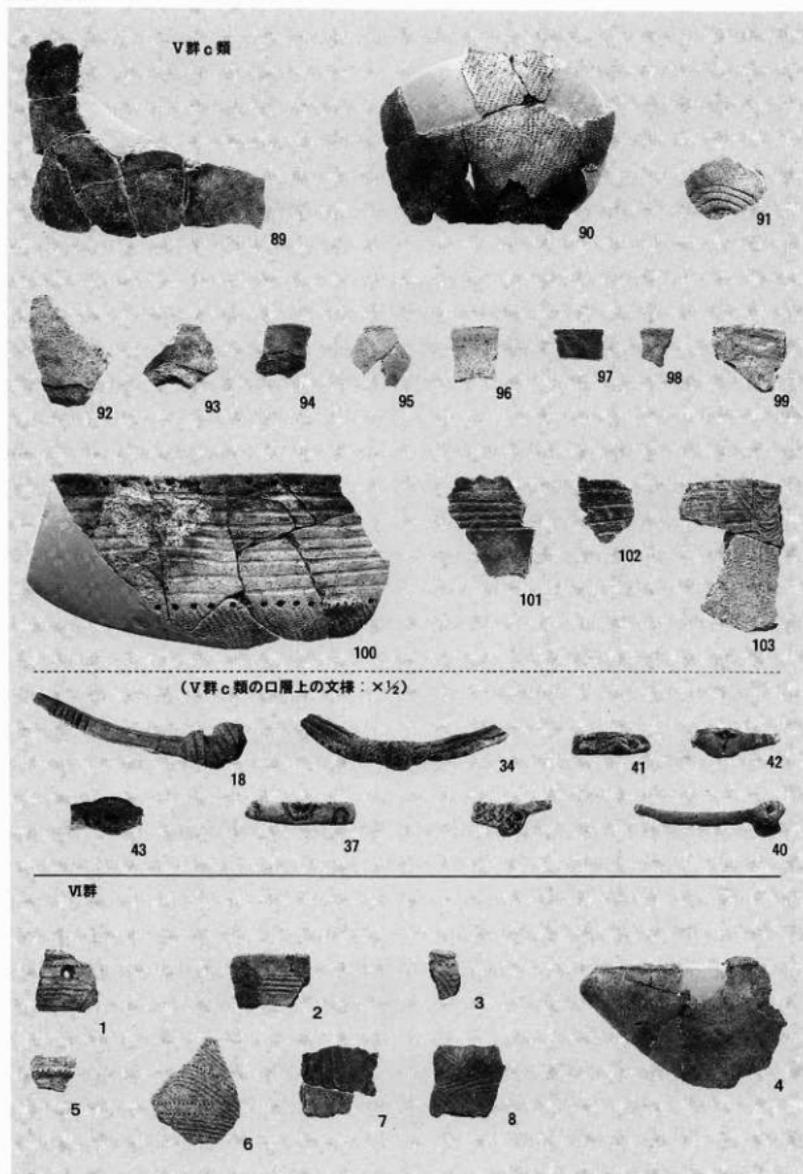


1. V群c類土器(1) (サイズは全て $\frac{1}{2}$)

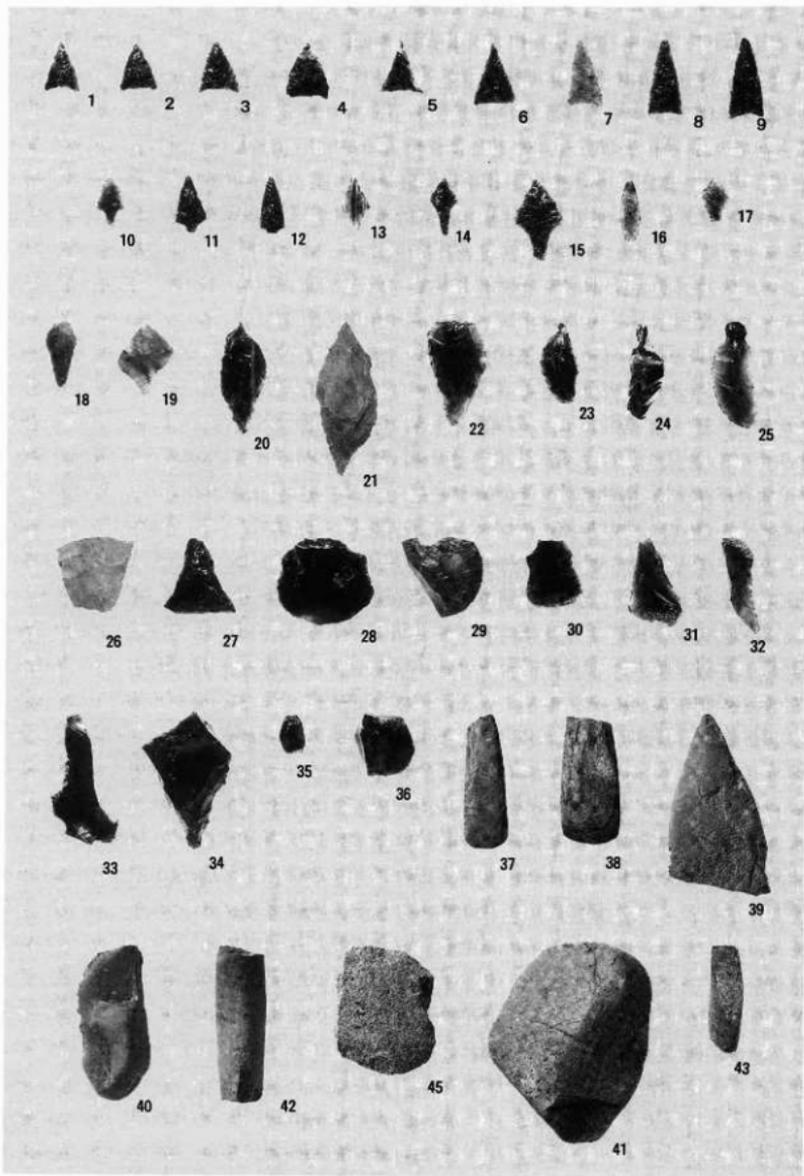


1. V群c類土器(2) (サイズは全て1/5)

図版III-20

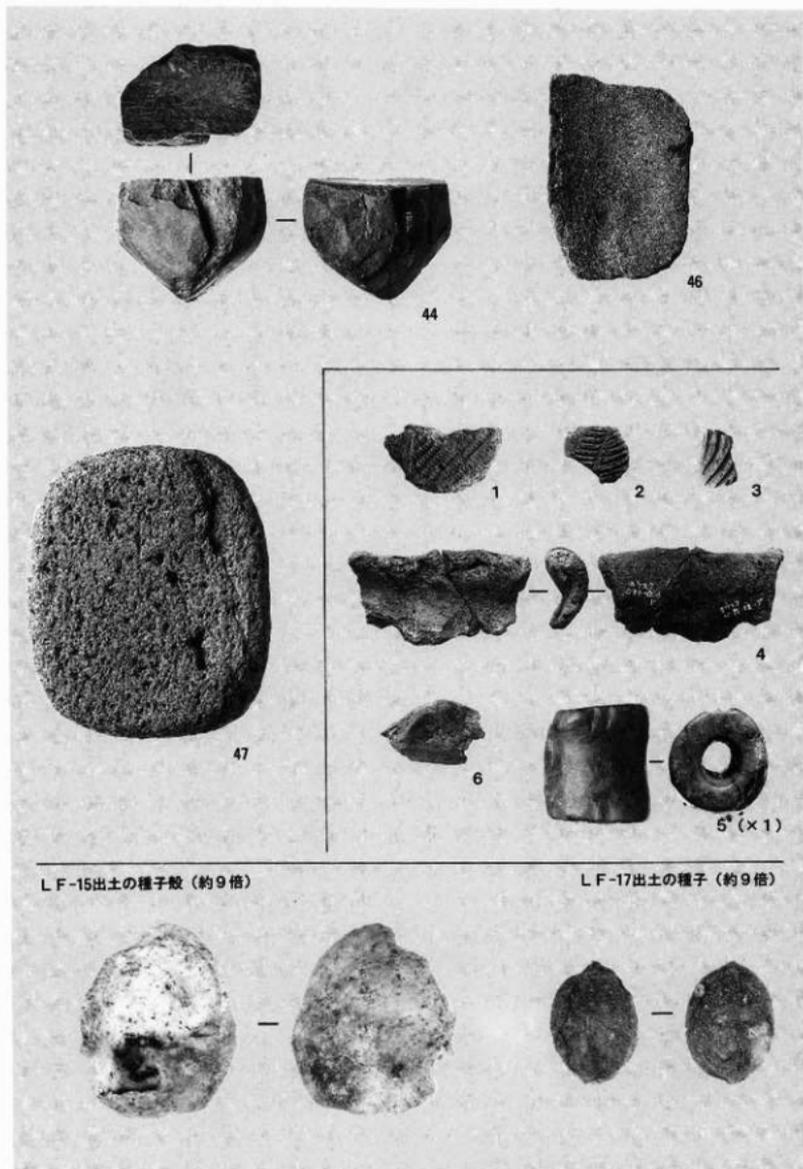


1. V群c類土器(3)・VI群土器(サイズの記載がないものは全て1/2)



1. 石器(1) (サイズは剥片石器が $\frac{1}{2}$ 、礫石器が $\frac{1}{3}$)

図版II-22



L F-15出土の種子殻 (約9倍)

L F-17出土の種子 (約9倍)

1. 石器(2)・土製品・石製品・自然遺物 (サイズの記載がないものは、礫石器 $\frac{1}{2}$ 、土・石製品 $\frac{1}{2}$)

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第90集

オサットー1遺跡 キウス7遺跡

—北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成6年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561-3131

印刷 札幌大同印刷株式会社
〒004 札幌市厚別区厚別東3条2丁目
TEL (011) 897-9711